

A scenic landscape featuring a range of mountains in the background, some with patches of snow. The foreground is dominated by a dense forest of trees with autumn-colored foliage in shades of brown, orange, and yellow. The sky is filled with soft, white clouds, and the overall lighting suggests a bright, slightly hazy day.

アラン

神話序説

高村昌憲 訳

## I 子供っぽい神話の源泉

私たちは、大人になる前は子供だったので...

デカルト（『哲学原理』）

私は、出来るだけの全ての神話を十分に論じたいと思います。そして心の動きによる自分自身の確信は、多くの事実を精神で観察することが実証的精神にとって大変に不可解であっても、何ものでもありません。私はメヌ・ド・ビランを、取分け彼の『思想の分析についての覚書』を利用しますが、お読みになることをお勧めします。この著者は、所謂正統派の人です。しかし、彼は宗教が正しく思考することを妨げないとする人です。恰もこの種の人間は、信仰の責任で考えられる全ての偏見を脇に置いて、経験とは別ものでしかない〈理性〉の具体的使用において全く自由でさえあることで、自らを見出しているかの如くです。

この状況は、それが全く奇妙である者にとって、理解するのは極めて困難です。そして体系的な探究にとって認識されることと、まさに本当らしくないこととの間にある壁として残すのを強く主張するこれらの思索家たちの誠意を、私は一度ならず何度も疑っていました。しかし思想における術策や二枚舌の仮説は、何ものも導きません。例えば、実際に欄干があるにも拘わらず眩暈が起きる如く、人間は全く不条理な恐怖を感じるのを私が理解する時、それを喜劇役者の悪意とは決して思いません。というのも私自身もその様な恐怖を感じるようになるからです。それは私が想像力の纏れた糸を解くのを望んだのもこの道によるからです。しかし、お伽話の粗筋が私たちに与える馬鹿らしい考えを最も見事に説明するのも、幼年時代にあることを私は今は納得しています。私はこれからそのことを何故であるのかを、詳しく説明したいと思います。

私は一人の友人に話すように、何人もの友人に話すでしょう。申し訳ないのですが、説明する前に結論を引き出すことも、私は大変良くやって来ました。この表現方法は、論敵に対して具合が良いのです。見せかけであったり突然の切断であったりする方法で臆や、次に他の処を切るのは論敵であるからです。しかし、人はそこで楽しむ結果になるだけです。全ての臆を切られて中風患者のベッドで眠る彼らは、同じことを今でも口籠もります。私はそれ故に、論争中の証拠を整理しないでしようし、単に周知の事実について注意を傾けながら、まさにそれらの証拠を遠ざけます。そして、もしも私が常に曖昧さを避けなかったなら、それは良かったことなのです。というのも、その問題は大きくそして困難であり、全てが明らかになると信じる儘にさせて置くことよりも、思考する機会を与える方が役立つからです。

私は先ず手短かに言いますが、実証的認識と理解力と世界には、二つの源泉があります。理解力による認識で、最も有名な典型は幾何学です。そして世界に応用する幾何学は、形と距離と、それらの関係に関する真実の知識です。探究者の全事業は想像力を除去することにあります。それは最初の素朴な認識において、理解力や現実世界の影響に関する規則は大変見事に無しに済ませます。そして全ての困難は、私たちが如何にしてこの状況から抜け出るか、その術を知ることにあります。ここで私はビランに注目します。彼の分析は既に全く新鮮です。

触覚という感覚は、他者を教師とするものです。全ての人々がそれを知っています。しかし、触覚において注意すべきことは何かあるでしょうか。正確には次のとおりです。決して人に教えられないで我慢する傷口や苦悩は別にして、私が進んで自分に与えるのは凸凹感、硬さ、艶、切れ

具合、ざらざら、粉末状の認識です。例えば、もしも私の頭に石を喰らえば、その石の硬さや切れ具合を探究することなど、それこそ言えるどころではありません。しかし同じその石を調べるために、手で軽く触れたり、多少なりとも押したり、傷を付けようとしたり、削ったりしようとしたり、砕こうとしたりすることは出来ます。でも、その作業はこの探究の実践でしかありません。ここでは私は感覚の主人であり、私が望む時に自分に与えるのであり、それは私が望むのと同じ位に良く与えますし、私が望む程度に与えます。

もしも私が今、触覚から視覚へ移ったなら、この種の探究は最早可能でないことに気付きます。私は両眼を閉じたり開いたりして、多少なりとも対象を明らかにすることが出来ます。しかし視覚によって、多少なりとも手で触ったり押したりする方法は私にはありません。こちらの紫色もあちらの赤色もあるが儘で、避けられません。私が扉を開けるや否や、それらの色彩は私の中に流れ込みます。私はそれらの流れから避けられません。石の切れ具合は大変に単純で、私が多少なりとも感じるのと同じです。視覚のこの性質は、聴覚ではもっと顕著です。それは聴覚それ自体によって聞いたり聞かなかったりする感覚ですが、音を石のように押しつけることは少しも出来ませんし、間接的な方法を除けば、それらの音を選択することも全然出来ません。少なくとも注目すべきことは、私があらゆる種類の音を生み出す器官を持っていることです。そして、私が声によって生み出すそれらの音を、大きくしたり小さくしたり変えたりすることが出来ます。更にこの方法で、理解したり判別したりするのを学ぶ私の耳に、それらの音を届けてくれることが出来ます。視覚に対しては、私がその様な方法を持っていないのは明らかです。もしも視覚が触覚からは教えられなかったとするなら、それは視覚が私たちに完全に認識させてくれないのを人が認める時に言って欲しいことです。以上のことから分かるのは、私たちの真の認識は私たちが自らの意志で自発的に探究することによって獲得するものであり、例えば触覚が無ければ、視覚とは言葉ではまさに幻影と呼ぶものしか私たちに与えていないことです。

全ての英知は幻影を拒否することにあります。人が望む時そして活発な手足の動き、取分け両手の動きによって望む限りは、人が求める認識を自ら与えることにあります。これらの考察から十分に理解されるのは、幻影を抱く人のことです。そして、この言葉の意味を敷衍しながら私が幻影を抱く人と呼ぶ者とは、受けた衝撃から自分の理解によって学び、創造しない者のことです。それは結局のところ、決して絶えることのない経験の雨によるのであり、全ての上に大量にあって如何なる知識も決して与えません。その人間は自分の力を、それで試みようとする時しか学びません。又、その力の行使についての考えを持つことしか学びませんし、それが労働です。そして、積極的な意味でその言葉を長く考えて下さい。それは有効な行為と関わり合い、連続したものとなり、再開するものになります。というのも世界を明らかにするのは、労働であるからです。(完)

私は次の様に言いたかったのです。つまり子供は先ず労働しません。子供は食べさせて貰い、服を着せて貰い、害を与えそうなものに近づかないようにさせられます。人が子供に与えるのは、そう望んでのことです。この奇妙な状態は、それでも子供が感じたり我慢したり予想したりすることに変わりありません。私は子供の感じ易い表面の全てを、あらゆる幻想である快かったり不愉快であったりする影によって、つまり受けたり被ったりするものによって、次々に占領されて行く演劇とか映画と同じものである一種の眼に譬えます。そこから一種の知識は、プラトンが洞窟の囚人たちと言うものに似ています。というのも囚人たちは、これらの影を命名するのを覚え、そこから戻って来るのを予想することを覚えるからです。しかし、彼らはそれらの影を創造したり固定することは出来ません。しかしながら、子供はもっと悪い立場にあります。というのも、専ら叫びとか他の反応を示すのですが、子供にはこれらの影に一種の力が取り憑きます。大人や乳母たちはその時、子供が気に入らないものを遠ざけて、気に入るものを見せます。そして子供は、全くの呪文ですが有名な呪文であるこの奇妙な科学を先ず学びます。この狂ったような方法は、雨を降らせるかの有名な魔法使いたちのやり方に戻ります。それは決まった合図をすれば、雨を降らせるようになると断言するのです。そして囚人たちは、何時も最後には雨が降って、間違えます。同様に、大きなうめき声で新月を呼び出そうとした未開社会の人々も、最後には新月が出て来るのを見るのです。同じ原因によるのですが、子犬は通行人たちに恐れられていると思っています。何故なら通行人たちは通過しているからです。子供も同じ種類の力を行使します。そこから子供は労働には全く無知になるに至り、そしてお祈りに従って単に生きています。子供は、至上の力で人間の姿をしている母や乳母や父まで調べます。彼らに対して子供が自然に仮定するのは、不可能なものは何も無いということです。ここにはお伽話の殆ど全ての題材があり、まさに形式としての幾つかの詳細も見出します。というのも魔法使いの老婆たちも、ここでは動くのが難しい精である老人たちを表しているからであり、彼らの命令は不可解なものであるからです。そして、それらの精たちも屢々召使いの姿になっています。何故なら子供は沢山の召使いたちに支配されていて、台所や厩舎や庭には召使いたち一人ひとりに領分があり、そして権限の分割一つ一つにもお伽話があるからです。

子供の精神においては、従って知識と力量との間の明白な不均衡によって、間違いではないが狂おしい認識が形づくられているのを私は知っています。子供は何よりも実際の自分の力量を、先ずはそれ以上にすることが出来ます。そして、例えば子供は色々な距離も奇妙に認識します。というのも子供は、理解し難いものは身近になったり、あるいは反対になったりするのを良く分かっているからです。しかし車とか人力で走り回って、何よりも労働して職に就かないので、労働に結び付けられる真の距離の概念には欠けています。そして何時も本当の認識の上に間違った認識の必然的な前進があるので、それに付ける薬は殆どありません。パリからル・アブルまで急行列車で行く者には、放浪者が徒歩で行くような距離の本当の認識が決して無いのと同じ様なものです。私はブルジョワを、労働のことを考えずに結果を利用する人間として定義します。従ってこの観点から見れば、ブルジョワは子供になります。勿論、全ての子供が先ずはブルジョ

ワあるとその時言わなければなりません。それは重大な結論です。というのも、ブルジョワは多少なりとも幻想を見る人であると理解されるからです。

私は差し当たってその観念を放って置きます。そして子供の本来の力量に戻ります。子供は手で探究する術を知っています。実証的認識が始まるのはそこからです。しかし、これらの認識も又、自分の知識の些細な部分でしかありません。子供は哺乳瓶や玩具やポリシネル人形(1)やその他の人形についての識者です。しかし、庭の門の何を知ることが出来るのでしょうか。その門は、アリババの洞窟が開け胡麻で開いたように、叫び声で開きます。別なやり方での開く術を知りません。猫は二十日鼠を前にすると突進します。猫は門の前にいる動物のようなものです。子供も又、これかあれかのもののために、ニャーオと鳴く術を知っています。しかし、この猫の鳴き声そのものは実証的勉強の最初の対象であり、同様に一番の嘘つきでもあります。子供は自分自身で創り出すことを学びます。そして喉の働きによってあらゆる種類の音を出すことを学びます。でも、最初の鳥の囀りは、音響世界の探究とは別のものでしかありません。何故なら、乳母たちは同じ対象に対して、同じ猫の鳴き声を何時も子供に繰り返して言うことに大変に注意深く、子供は話をするのを早く覚えるからです。その呪文の認識や形式は、遙かに事物の認識に先行していますが、私が言うのは自分の意志による探究によって認識することです。子供の殆ど全ての思考は、この様に先ずは話すことで一杯です。知ることとは先ず話す術を知ることであり、名称を間違えないことなのです。これらの全ての名称には、私は既にご説明したように、不思議な力があります。従って魔法は、強い召使いたちに力を表しますが、最も愛されている人を除いた全ての人にとって自然に最初の認識になるのです。

神秘はそこから始まります。あるいはもっと正確に言うなら、私たちの全ての認識、又は殆どの認識は先ず神秘的なものです。コントは、些細な理性に身を落とすことなく、私たちの知識は第一に神学的になるこの法則に従っていることを大変強く説明しました。そして人間の知識の歴史というものは、少しずつ変化して、形而上学の霧の中で澄んで来る神学の雲を通して事物を発見するための努力しか物語りません。私は、今でも極めて僅かに理解されているだけのコントのこの教義において、少しも間違いを見ません。今ではそれを土台にして明らかにしようと努めます。何故ならデカルトの言葉によると、私たちが大人になる前は皆子供だったのであり、間違っただけで空想的で、それと同時に最も自然な観念から出発するための解決を、この全ての労働に生まなければならないからです。そして、この指摘は信じ難い結果を招きます。というのも子供の経験は、子供の労働力には遠くから当惑しているからです。もしもそれが相変わらずで例外なく全ての者の中で最も嘘つきであることを忘れていたなら、知識の理論は経験による全ての結果と同じ様に何でもないと同じです。そうして子どもが言うことを自分で認識する前に話し出すというこの単純な事実は、私たちの自然な認識が先ず純粹に言葉だけのものであることを十分に説明しています。私たちの最初の力が説得あるものに結び付くことは、言葉によって全てを行い、全てを手に入れることにあるブルジョワの精神に最も近い観念を与えています。

この考察によるなら、例えば外科医は内科医よりもブルジョワではなく寧ろプロレタリアです。如何なる薬が無くても全て管理している者は、ブルジョワであると理解されます。というのも管理することとは、数々の記号で行動することであるからです。そして、それは子供の仕事にも沢山の敬意があるのです。それは又、抗い難い法則によるもので、貨車推進機は文字の方へ行く

ことで直ぐにブルジョワになります。それなのに事物についての手の労働はそれこそ英知の源泉であるのに、口承の神話は全く狂気の源泉ですからブルジョワとは反対のプロレタリアの努力で、非常に上手に管理されていることと私は理解しています。しかし、全てプロレタリアの国家を形成する計画は、幼年時代の観念や本来の魔法に大変自然に戻ることによって、思いがけない障害に遭遇するでしょうし、既に遭遇しているように私には思えます。全て人々のために薬はあります。しかし、狂人たちによる英知のこの管理は第一に理解されなければなりません。あるいはこう言っても良いのですが、子供たちによって大人たちを管理することが、歴史という光景の土台を作っていると理解しなければなりません。（完）

（1）ポリシネル人形は、道化役の操り人形。

私は想像力を限定し、いわばその範囲を定めました。でも、私は想像力を全然捉えていません。実際に全ての研究で最も難しい部分は、有名になっている言葉で絶えず狂気を生む、この狂った部分の想像力を説明することです。これから私は、子供には固有の情動の感情を考察したいのですが、恐怖はその主要なものです。そして、そこには確かに何らかの弱さがあります。しかし、瞑想的で魔法のようなこの認識も又、考慮に入れなければなりません。そのためには可能事も不可能事も決してないのです。

労働せずに取得する者には、あらゆるものが出現します。私たちの全ての現実世界という概念は、測定可能な力の連鎖に戻ります。労働の中で何時も測定されていますが、それらの力は全てがお互いに結ばれていて、一つの事物がその他の全てのものによって存在しているしかない世界を創っています。そして、視覚から認識までの相違はその中身によるのではないと私は思います。全ての視覚は真実です。水中に漬けた一本の棒が折れて見えるのは間違いありませんし、街灯の柱が大地に横たわっている時よりも立っている時の方がずっと大きく見えるのも間違いありません。棒が折れているのは光の物理学的法則によるにしろ、街灯の柱も想像力によるにしろ、全てそれは理解出来ます。しかし逆に、労働及び労働の測定による経験に従って世界を説明しない者にとっては、全てが幻影であり、全てが偽りです。しかし私が、力と働きの関係から太陽系を形づくったなら、大空の諸相も真実に見えて来ます。というのも、そこから私は存在しているのであり、なんと私には両眼があり、日の出も日の入りも見ることしか出来ないし、星々の全ての体系が私たちの地球の周りを回っていることしか見ることが出来ないからです。経験が、つまりこの世界に存在するという単純な事実が、私たちを真実の外見と向かい合わせているのですが、それは最も間違った認識の源泉になり得るという結果にもなります。そして私たちの誤りと最も共通していて、恐らく独特でさえある典型は、一つの外見がいわば分離していて、つまり外見を実際に生む条件も関係なく戻って来ると信じることに存します。そして、事物との関係の観念も労働の法も持たない子供は、手当たり次第に自分を示しに行くことを信じるように勧められます。有名な妄想家たちは、彼らが見ることを恐れたり期待したりしたものを決して理解していなかったと、私は結局のところ納得しています。でも、彼らはそのことを待っていたと、私は少なくとも信じています。そして強盗を見ていると思う場合と、もっと一般的に言うならドアの背後に強盗がいると固く信じる場合と、両者に大きな相違はないのです。恐怖は殆ど全てが想像力のものです。もしもそこに短気、欲望、希望、この種のその他の感情の動きが加わるなら、情動とは全てが想像力であると言えるでしょう。そこには困難な点もあります。それは人が偏見無く点検することを私が望むことです。イマージュに共通した教義は、全てやり直すことです。

(完)



教義がどんなものであろうと、そのイメージはまさに私たちの肉体において、何らかの活動で蘇生させられていなければなりません。ですから私たちの肉体は、それらのイメージを運用する実際の対象です。しかし、間違いとはそれらのイメージが対象を写したものであると信じていることです。私が網膜の要素を主張する眼の本来の活動は、生理学的な何らかの原因によって動揺させられ、次から次に色々な色彩や形を捉える不安定な縲や斑点のようなものによって黒い視野に現れて来ることであるのは知られています。内視性（眼の内部）と呼ばれるこれらのイメージは、時々人が見た処の対象と同一のコピーであったり、又その対象を補足するイメージの中で変化したりします。

麦藁帽子が日に当たっていたとしても、その内側の中身は大変に暗く浮かび上がります。私は両眼を閉じます。私が見た麦藁帽子と同じ様に輝いている短い瞬間を見ますが、敏感な網膜の要素としては明らかに黄色いものが揺れ続けます。そして次に、私には殆ど直ぐに紫色の斑点のようなのが見えます。つまり黄色の補色であり、黄色に敏感だった網膜の要素が疲労したためであるのは明白です。それは他の要素に優位を与え、その動揺が私たちに補色を知覚させます。これらの要素が全て一緒になって振動すると、白色を見せるのが認められます。私はこの理論を強調しませんし、それに殆ど議論もしません。それらの事実は事実であって、誰もが観察出来ることです。例えば朝とか夕方に、非常に暗い部屋から明るく見える窓は、何よりも格子が窓ガラスよりも暗い儘続くイメージを与えます。そして、格子は明るさの中で浮かび上がっている補色的なイメージを与えます。これらの効果は長続きしません。でも、様々な対象の知覚は、直ぐに相次いで補色的なイメージに混ざるのが容易に理解されます。それ故に視覚による想像力が、はっきりとした対象による知覚に続く、どんなイメージであっても私は信じません。

寧ろ私が信じるのは、明かりが消されて眠る前に誰もが知っていることですが、ぼんやりとして変化し易い形に従って想像することです。私としては、夢の対象としてその様な斑点の変化を二度ばかり観察しましたが、私は寧ろその変化が形づくられていった瞬間を把握しました。一度目は、明るかったり暗かったりする幾つもの斑点で彩られた一種の球でしたが、それは瞬間的に人間の顔に見えました。しかし、その顔は直ぐに消え失せました。二度目は、瞬間的に村の家々が一列になって、その縁がばらばらに刻まれた一種の明るい一本の帯を私は見ました。しかし、この種の幻想を観察することは不可能と理解されています。それらの幻想は決して長続きしません。それは他の原因に起因する解釈、正確には私たちの肉体の他の活動に起因している解釈が一部にあります。例えば、もしも話者の声が家という言葉とか、強盗や泥棒という言葉を発音したなら、そして私の肉体全体が一軒の家とか逃走する動きを少しでも示したなら、私から私へのこの証言は多少なりとも感動的で、それらの証言はぼんやりとした視覚のイメージを何も変えないけれども、信仰には相応しいものが多くあると理解されます。ここで私が間違っただけで知覚する多くの場合も、私は同じ様に見たと信じます。何故なら怖いからです。あるいは私が期待しているからです。風に吹かれた一枚の葉でしかなかったのに、一羽の野兎が走って行く姿に見えるのを信じなかったのは誰でしょうか。何枚かの葉影に見える切株を、雌鹿とか狼に見違えなかった

のは誰でしょうか。

私たちのこの間違いに関する探究は際限がありません。誰もがそれらの機会に応じて体験が可能です。礼儀正しい哲学者であった偉大な人間は、彼にとっての新発見であった幻想に或る日出会いました。鉄道の列車に乗りながら風景をゆっくりと両眼で追いながら彼は、丘の中腹で何となく離れた所に動物を見ましたが、それはひよろ長い脚をして、二枚の羽があり、大きな頭をしていて、結局のところ何か恐ろしい怪物に違いなかったのです。それは列車の格子縞の窓ガラスにいた一匹の蠅に過ぎませんでした。こうして賢者になると、彼自身における盲目の信仰や、それに我慢しているその種の恐怖の一瞬を彼は喜んで驚嘆しました。それは彼にも説明しましたし、人が語るのは全て幻想であると彼は言いました。もしも少しでも注意したなら、この種の経験は私たちの誰にでも訪れることであると私は思います。速読する者たちは、莫大な読書量によって幾つもの間違いに気付くことができました。私はその一つを示してみます。看板の文字が少しばかり枝で隠れていたことがありました。私はジャムの店 (salon de confiture) と読んだのです。そして私は、その点について熟考しました。紅茶やケーキの店を表示していると信じて仕舞い、何かイギリス風の店と仮定したのです。しかしながら場所を移動して読むと、美容室 (salon de coiffure) と読まなければいけなかったのです。その様な間違いは、まともな感覚であれば誰でも容易に気付く筈です。あらゆる場合において十分に読んだとか十分に見たと、先ず確信するように注意しなければなりません。もしも最初に見たものを直ぐに修正する機会に恵まれなかったなら、人は断言して仕舞います。もしも大変な恐怖とか欲望、あるいは決まりきって少し性急な期待が、直ぐに私たちの間違いを立証しているのはどういうことなのでしょう。子供自身の労働を事物に試みる力も無く、事物が現れたり消えたりするのを見る腕を使う子供に事情を考えることに今戻るとするなら、人が少しは理解する状態とは最も弱い印に倣って全てを信じ込んでいるのです。あるいは全てを恐れているとか、現状の全て、現状の外観の全て、そして現状の切迫さを全て受け入れているのです。(完)

疲労、血流と気分、瞑った瞼を通して四散する光の働きによって、私たちの眼はそれ故に夢の緯糸の一部のようなぼんやりとした外見を生んでいます。思ったよりも少ないです。しかし、はっきりと見えない場所とか、葉の付いた枝とか、壁の亀裂において私たちが見るのと殆ど変わりありません。その時、私たちの夢が屢々遙か彼方へ行くのが分かります。しかし次のことに注意しなければなりません。注意深い人間は、彼が想像した何らかの狂気が見えるものを見ないでいたり、少しも見なかったことです。私は、壁の亀裂にも人間の顔が見えると思います。しかし、その幻覚はそこに良く存在していると思いたいのですけれども、決して視覚的様相ではないのです。私は決して亀裂としか見ません。私が人間の顔に見えるのは、他の原因から来ているのは確かです。

私はここで子供の恐怖について話したいと思います。大通りに面した部屋の中にいる少女は、眠れませんでした。私は彼女を怖がらせているものを探しました。結局、彼女が白状したのは、街灯に投影された葉の付いた何本もの枝が動く影だったのです。私は彼女に言いました、「それが何であるか、良くお分かりですね。それは葉の付いた枝でしかないのですよ！」。そのことは彼女も知っていることを私は理解しましたが、それでも彼女は恐かったのです。それは彼女が他のものを見たと思ったからです。それは他の原因によるものです。大変に単純なイマージュに、恐ろしい意味のあるものを与えていた彼女の肉体の働きによるものでした。

人間の肉体のこれらの働きには空想的なドラマを生みます。私たちの思考と絶えず同行する言葉の働きを、私は正確な場所に整理します。子供が如何にして、何よりも言葉によって生き、そして何故言葉が幾つもの事物を告げていてそれらを示し、自然に信じて仕舞うのかを私は説明しました。昔からのこの習慣は私たちにおいては全てであり、絶対に廢れることはありません。お話は自分を信じさせます。その様なものがお伽話の力になります。私が話したこの少女は、客間を大股で歩きながら、幾つもの話を自分自身に語っているのです。しかし、その点について彼女は何も言いませんでした。そのことには驚かなければなりませんでした。大股で歩くこのことが、演劇的な身振りの一部になっていたのです。しかしそれは、視覚を取分け掻き混ぜて混乱させる効果になり、自分自身で創り上げた物語にとって十分な土台を築いていたと私は考えました。そして夜な夜なのお伽話が容易に興奮させるようになるのとまさに同じ理由です。一本か二本の蠟燭、納屋の暗闇、明るくない壁、これら全てが想像力を掻き立てました。日中や働いている最中であれば、想像力が軽々しく信じられることはなかったでしょう。もしも読者が夜のイマージュを自分に与えたいなら、バルザックの『田舎医者』を読むことです。そこには様々な多くの観念が今でも発見される筈です。しかし、『勇敢なせむし女』の物語に発見するのは、本当らしいことが入り混じった巧みで空想的な想像力の非常に良い典型であり、恐怖を掻き立てていると私には思えます。この例によって読者は、信じることは何か、信じることを掻き立てているのは何か、を吟味することが出来ます。そこに子供の恐怖や子供の心を見出すでしょう。私が考えに従って信じることは、全てにおいて同じです。お互いの相違を生むものは、それを信じることで包み込む実証的認識と、それを制限している実証的認識との様々な比率です。月に人間の顔を

見ることが出来ますし、同時に人間の顔が無いのを知ることが出来ます。人はそれを理性の長い連鎖によって認識しますが、それは全てが直接的で習熟した探究と一緒に支えます。もしもこの土台が無ければ、信じることは醜悪です。この土台は全ての思想を占めています。

何よりも子供に欠けているものは、この実証的な認識と同じものです。それは一人ひとりが自分の両手で労働して獲得するものであり、他にはありません。両手での労働が抵抗する事物や絶えず探究される事物を、面前で私たちに許されなくなるや否や、私が解明したいと思うのは一つの観念であると思います。そして自然に関する瞑想が、もう一つ別種の妄想家を生むのであると思います。ブルジョワの頭の中には言葉による認識と純粹に視覚的な瞑想の比率が、大変に大きくあります。従って、殆ど全てが妄想に耽った思考から生じるに違いありませんし、そこからの結果を今後は見ることになります。これは幼年時代の続きでしかありません。私たちの全ての思考の調整者である実在するものとしての世界は、人間を導く者たちに最も欠如しているものです。戦争は数え切れない多くの証拠をそこに与えました。というのも隊長たちは合図で、ぎりぎりまで指揮する術を持っていたからですが、実際の状況に関しては曖昧な認識しか持っていなかったからです。その点で彼らは、信じたいと願っていたことを信じたのです。子供も同じです。何故なら子供も先ず最初に学び、そして大変早く自分の役に立てるからです。これは子供だけの知識ですが、最も役に立たないのが勉強であることを、子供が学ぶのは大変遅いです。そして同様に、もしも子供が自分自身で勉強することがないなら、そのことを良く学ぶことも決してないのです。(完)

私たちを納得させる人間の肉体に関する活動の全てを、私は未だ述べていませんでした。一人ひとりがこの限らない観念を追って発展させるように、即ち人間は事物を思考する前に自分の話を思考するための言葉について私は十分に言いました。情動という感情の活動が残されていますが、それは些細なものではありません。誰もが知っている情動は純粋に生理的なものです。理性はその次に来ただけです。様々な情動のその活動の正確な記述は、非常に困難な行いです。もしもこの主題を導く何らかの道筋を見出したいなら、デカルトの『情念論』を読まなければなりません。少しでもそれらの探究に向かうために、私は先ず私たちが実際の攻撃とか実際の驚異を前にして行う活動を考えます。階段とか小石だらけの坂道を降りる人は、石のように降りません。全く反対に、様々なやり方で動きます。これらの活動の中で私が見分けるのは、齧り付いたり、身を守ったり、それらと似たようなもののように自発的なものです。学んだ活動がそれらに加わりますが、眼を守ったり、障害を前にして足を曲げて構えたり、その他に体の一部を激しく捻ったりするように、一定に定まったものではありません。全てこれらの活動は筋肉によるものです。同様に、人がびっくりした時、身を守ったり反撃したりする動きは、一方では自発的なものですが、他方では教えられたり無意識であったりするものです。これらの筋肉の活動の両面において、血管の活動、つまり私たちの肉体の流体の循環に関係している活動と一緒に随行させられています。誰もが、息切れ、心臓の鼓動、赤面、蒼白、強い不安の結果である暑さや寒さの感じを経験します。筋肉の酷使が必ず呼吸困難や血液の流れの深刻な乱れを起こすことは容易に理解されます。その努力において両腕の筋肉で支えられている胸部の部分は、空気を吸って膨らんだり、呼吸が止まったりするのが分かります。もう一方では、筋肉の緊張は血液を柔らかい部分の方へ追い出します。神経系統が全てのものに繋がっているのを除いても、例えばちくっと刺す痛みが跳び上がることなどを生まないとしても、一つの変化が一つの部分だけでは行われないうように見えます。このことは無秩序な部分に、有用な部分としての動揺の一つの観念を既に与えています。

今は思考することが出来ますが、それはデカルトの観念です。それは大昔からの習慣に従って大部分の活動が有用によって規制されており、本能と呼ばれるものであって、それなくして人生は不可能です。例えば、不愉快な情動は嫌悪の動き、つまり拒絶する者にあります。単に筋肉の動きだけでなく、栄養の反応があるのも本当です。不安に陥れるものは全てが各々のやり方で、嫌悪が胃に来たり、有害な食べ物を前にすると持っているような気分になって、拒絶するのです。反対に快適な情動は、食欲や吸収の動きが伴います。そこからデカルトは驚くべき結論を引き出しています。憎悪や恐怖は健康にとっても最悪で、その代わりに愛や希望は栄養的にも有利な働きを倍増するという事です。この観念は際限が無く、何時までも続きます。しかし私たちは取分け恐怖を考察しなければなりません。恐怖はあらゆる世代にあり、私たちの情動の中で最も共通したものです。取分け幼年時代には最も共通したもので、その時代の殆ど全ての変化は突然で、思ってもいなかった時に叫びや涙や嫌悪の動きの原因になります。

声を大にして言えることは、仮定された対象による恐怖はその対象が現存したならば、それは

私たちに生まれる嫌悪や逃亡や防御の原因になるということです。勿論、私はもっと言いますが、これらの動きは想像力そのものであると私は言います。それはありもしない対象を想像することであり、まるで現存しているかの如く行動したり反応しているに過ぎないのです。そこから理解出来ることは、私たちに想像上の対象を恐いと思わせて、姿を見せるのではないかと思わせる原因は恐怖心そのものであり、それ以外に他には無いということです。恐怖は何でもない原因によって私たちの裡に不意にやって来るのである、とまだこれから理解しなければなりません。というのも、何でもないことが私たちを動揺させるからです。印象が思いがけないものであるなら、どんなに小さなことでも私たちは全身で警戒します。あるいは更に、落下の始めは子供においては恐らく更にもっと一般的です。何故なら重力に対して巧みに戦うことは学んでいなかったからです。あるいは小さなものでも喉に詰まれば激しい情動になるのは子供には良くあることで、全身で大騒ぎです。似た様なものとして伝染病をこれらの原因につけ加えてみましょう。それは大人よりもより一層子供に作用しますし、恐怖が伝染することも生じ、送り返され、子供の集まりにおいては突然で法外のパニックが生じます。

そのことについて論じ尽くすことから程遠いこれらの観察によるなら、赤ん坊においては波と同じ様に生まれる恐怖の震えが、子供にも非常に良く体内を走ると言わなければなりません。それを私たちは痙攣や顰めっ面と呼んでおり、叫んだり泣いたりして終わります。叫びが筋肉の衝撃そのものの自然な結果であること、それから涙は他の分泌物と同じように血液を柔らかい部分へ追い出す一連の動きです。そして全ての腺においても通常の時より多く濾過するものであることに、序でながら注意しましょう。この種の研究を続けたい人々は、タイトルを『情動の表現』にしても良いダーウィンの見事な本を読むに違いないでしょう。

私が今理解しようとしたいことは、如何にして情動がありもしない事物の存在を信じさせられるかということです。そして、それを最初に見ることは余りに単純です。もしも人が恐れを抱いているなら、この恐れを説明する対象を探すよりももっと自然なものは何でしょうか。夜に物音を聞き、想像し、仮定します。何故なら何よりも恐いからです。そして、この恐怖は決して無くなりません。というのも恐れを抱くことの恐怖は、それ自体が恐怖であるからです。そしてその人は、一つの対象を仮定した存在に、私たちの肉体の動きとの関係に、より一層追い詰めることになるかもしれません。行動及びその結果の情動は、対象の現存による通常の結果であり連続です。それらは私たちにとって主要なものと同じになり、私たちがあるが儘の対象として認識するのに適用されない限り、最も興味あるものになります。それは私たちの裡で生まれる印象、取分け大きく揺れる印象の部分を抽象して言いたくなるものです。ところが子供にあっては、対象の中で自分だけの行動と情動に関心があることによって始めるのは大変に明白です。寧ろ子供は二つのものを混ぜて仕舞います。馬と、馬に乗ることを決して分離しません。犬と、逃げる動きも決して分離しません。以下同様です。ところが想像力の働きは、もしも障害が現存していたとしても、私たちが行うあらゆる種類の動きに連動することで常に熱中することになり、それが現存しないとしても見る事が出来る限り、それは見せる一つの方法になります。

見ることは、単純な視覚による意味をその時沢山乗り越えます。そして姿を見せることの全てにおいて、見ることは単に霧とか大変眩しい光の連続によって生じる視覚の幻ではありません。

その時に見えるものであり証拠立てるものは、私たちの肉体において行動と情動が一体となったまさに実際の動きです。そしてその結果は子供や、子供たちの精神においてはより一層著しいのです。何故なら子供たちには彼らの情動そのものよりも、もっと強力な現存の証拠を幾つも見付ける習慣が無いからです。これらの結果を良く理解するためには、夜の中に逃げる人間を考えなければなりません。彼は逃亡そのものによって、追跡していると思っっているのです。

以上が子供の身振りの意味であり、それは対象に対して極めて容易に身振りそのものに夢中になります。それらの遊びには証拠があります。というのも車を動かす子供たちは、幾つかの椅子の助けを借りて、単に登って、座って、手綱を持って、あるいはハンドルを回して、それらの動きを行います。紐とか椅子の背とかの補助的な対象は、その動きが行われる機会とか支える時にしか役立ちません。その姿勢が対象の代わりになります。一本の棒は馬になり、一本の細い棒は剣になります。そして言葉がこれらの全ての身振りに加わります。その時の各々の対象は最早、あるが儘のものではありません。行動が、眼に見えない対象の世界を満たします。遊びにおいては眼に見えないものが殆ど全てです。そして全ての遊びは、生じた結果が雑であることから労働とは非常に異なります。行動が何かを変えるボール遊びにおいても同じです。行動が世界の主要な証拠になる度に、人は遊びます。反対に事物が行動の根拠となる唯一の証拠と受け取る時に、人は労働します。畑の畝溝は引かれ、人はそれに明日を見出します。人はそれを続けて行きます。遊びには継続するものが何もありません。遊びはやり直すばかりです。

この概念は考察することになっています。というのも子供の観念は、大部分の大人たちにも未だ十分に力を持っていて、その行動は行動だけでやって行けて、それらの結果を十分に保証しているからです。例えば、勝利を得た者の身振りは勝利を保証しています。かくして不条理な言葉も人は理解することが出来ますし、その言葉は信仰で堂々とした人物によって繰り返し私に言われました。ある中隊長が飛行機を射撃させました。すると問題のその人物は距離を測定するのが役目でした。彼は重大な誤りに気付く、修正するように告げますが、中隊長は叫んで言います、「それでも私は射撃するのだ！」。ここでの幻想部分は巨大であり、殆ど信じられるものではありません。ところがその他の大袈裟な演説の多くにもこの幻想はもっと多く隠れているのであり、常にその源泉は同じです。活発で自由な一歩が、数多く勝利を信じさせてくれました。そして同じく言えることは、頑強な人間というものは皇帝の身振りに反するものが何も無いのであり、そのことだけで古くから勝利者になっているということです。彼は動き回ることで行いを信じます。

以上は、それ故に自主的な想像力の働きです。そしてこの働きは、子供たちは自分自身で塗りたくった仮面を恐れるとモンテーニュが言うように、酷く恐れるものの探究において何か意志的なものをそこに持つことが出来ます。しかし人間の本質としてのこの特色は、十分に理解するには非常に困難です。人は不安と恐怖を如何にして探し出すことが出来るのでしょうか。それは最初のうちは自信があるが、次に激しい恐怖に陥る勇気の試みでしょうか。それは拙いことになる一種の賭けでしょうか。私は、読者の思い出に他の数々のことを探し出すために、読者を導く一つの経験をここで持ち出したいと思えます。姉と私は女中と一緒に、狼ごっこをして遊ぶのが好

きでした。姉は狼の格好をしてベッド・マットを被り、吠えながら四本脚で走りました。私たちは逃げ出し、そして姉は狼よりも大きな声で吠えていたので、直ぐに恐ろしくて死んで仕舞ったのです。最高権力者の父がこの遊びを終わらせました。しかし、私たちは再び始めました。そこから分かることは、恐ろしい神話の話も最初は遊びで、遊びと同じ結果から恐ろしくなるのかもしれない。大人は他のことを怖がらせたり、時々強い恨みを表すために、遊びによって子供に信じ込ませることが出来ます。或る偉大な数学者は、彼の敵が死んだことを上手い具合に確信を持って言った、と人は私に語りました。「彼は廃れる、彼は廃れる」。そして恐怖が襲って来ると、その様な遊びを行う者にとって、その遊びが突然の悲劇になることも大変に良くあり得えます。というのも私が指摘したように、恐怖がそれを明らかにしているからです。宗教には、人が喜んで信じて仕舞う多くのことがあるからですが、それは不死、最終審判、現世の摂理、お祈りの効験及びこの種のようなものです。そして私は、大人を恐がらせる思いの方が、快適な事物よりも信じるようになることに時々気付きました。しかしその恐怖は、その時には遊びの中に入っているのですが、その変化は悲劇的です。私はイエズス会修道士たちの中の一人の先輩と知り合いになりましたが、彼は地獄を除いて、教えられたものの全てを最早何も信じていませんでした。私の考えでは、それは恐怖による虚弱な発作が直ぐに示したものであり、恐ろしい対象を思い起こしたからです。正式には人が恐いと思うことが、地獄を信じる理由になりません。地獄を信じるのが、恐い理由になるのです。そして、もしもそれで事実が何であるかを知っている人間たちに出会ったなら、事実を如何に探究し、如何に測定し、如何に取扱い、如何に再現するのか、この探究を何も知らずに何時も自分だけの感動や自分だけの行為を信じている子供が、誰も見なかったものを信じる原因になっているとしても、何故人は驚くのでしょうか。

ところで信じることは何でしょうか。ここでは細かく見なければなりません。何故なら私の狼の遊びでは、私が実際に狼が現れたと信じていたのでしょうか。それが狼であって、犬とは違うことを何かによって、少なくとも私は分かっていたのでしょうか。森の中を父親と一緒に散歩した少女は、偶然に猟期を迎えていたことに気付きましたが、短い時間ですが一人きりになりました。その時、彼女は本物の狼を見ました。犬だと思っていましたが、辛うじて狼だと分かりました。シャムにいた或る博物学者は、ふんっと気にも留めないで無視していたような大きな猫を、不安も無く見たことを人は私に語ってくれました。そして、それは消えました。それは虎だったのです。反対に、虎に恐怖を抱き、虎が全然いない時でも、歩く音を聞くと虎だと信じることは大変容易に理解されます。恐怖が解明されると、少しも危険ではなくなるのです。爆発後に或る男が、松笠の形をした爆弾を警察署に持って来ましたが、爆発しませんでした。彼はそれが危険であったことを知っていましたが、決してそんなことを信じませんでした。人は理性によって恐くなります。従って不条理であると同時に、不可能と判断した物事にも恐怖を抱きます。あるいは不条理で不可能なことにも大変正確な観念を持たなければなりません。それは子供には無い観念です。反対に子供は、自分なりの経験によって自然にその観念を形づくるのであって、父とか母とか乳母という最高権力者たちが望んだり許したりするや否や、何でも構わずそれが可能になります。

これらの理性によって子供は、強制された神話を何でも構わずに信じます。勝手と偶然がここでは際限がありません。しかし私は、例え誰も子供を騙そうと決して試みないとしても、子供



にとって自然なこの種の神話を、何よりも対象として論じたいと思います。子供は労働について間違えます。そしてこの間違いは、全生涯に亘って一つの影として子供について来ます。（完）

桃源境は子供の観念です。そしてそのことを良く考えてみるなら、或る人にとっては恐らくミルクの泉やチョコレートの岩を信じるのも、そんなにも無縁ではないことが分かります。そうでないと彼らは、欲しい物と同じようにミルクやチョコレートを買うのに必要な極めてつまらない労働を時々は受け入れることになって、より一層驚きます。しかし大人の間違えは、ここでは理解出来ないことです。大人の間違えを明らかにしなければならないのは、子供によってです。ところが労働の値段やお金について子供に間違いがあっても、子供には自然なことです。それらの間違いは、最初に子供が必然的に生産することなく受け取る生活のお陰です。実を言うと、常に驚かせる急速なこの成長によって子供は労働の力を生みますが、そのことには決して気付いていません。反対に、成長の結果である過剰な精力と信じられない行動力は、子供が疲れを知らないようにもなります。その上、行動するのは決して強制されないので、疲れたら眠ります。従って大人になるということは、起きて両足で前進して疲れを感じるのですが、子供にとっては全く理解出来ないのです。

ところで何歳になっても、労働は何時も疲れを乗り越えていることを前提にしています。有閑の女性たちが自らを啓発するために、壇にラベルを貼るような、上辺は容易に見える何らかの女性の仕事をしようとした話を幾つも人は読むことが出来ました。ところが高貴な血筋のこれらの女性たちは、体の節々が恐ろしく痛いのを先ず感じて、二日後には熱が出てベッドに這入るのを強いられて大変びっくりさせられました。更に、もっと自由に気儘に見える農民の仕事も本当にこれと同じです。真面目に収穫しようとする以外には、仕事を確信していないと見做せます。ところが子供は、少なくとも最初のうちはその様な労働を少しも行いません。もしも将来に触れ合うようなことがあれば、それは遊びによってです。そうして子供が、機織りの糸を結び付けるように実際の労働をするに至ったなら、死ぬ程の危険を負います。いずれにせよ子供は、労働とは何であるかをその時に学びます。幼年時代を抜け出たのです。子供はそこを抜け出たのであり、幼年時代を横切ったのです。子供は、数々の現実が願望の時代の中に、あるいは単純な要求の上に、あるいは礼儀正しさの報酬のようにやって来た一つの時代の、多少なりとも正確な思い出を守ることに出来ません。これらの思い出が全てであり、黄金時代の虚構を支えています。その虚構は至る所で実際の歴史に適さないとはいえ、至る所に再び見出します。〈エデンの園〉の観念は同種のもので、それは如何なる労働もなく、欲求が満足し、野生の動物が人間の友となったような無垢の状態の観念です。無垢と無為というこれら二つの特色は、幼年時代そのものの特色です。というのも幼年時代は十分に早く終わることが出来ますし、早過ぎることもあり得ます。しかし、それは全ての第一歩の最初の状態です。かくして経験が先ず私たちを騙し始めます。そして黄金時代のこの前例は、幼年時代の思い出が私たちの大人としての観念の中に戻っているのを理解させてくれます。

私の考えによるなら最初の疲労も同じで、それは病気と同じであり、実際の労働の観念を未だ与えていません。その疲労は長くなって行かなければなりませんし、まさに労働と遊びに相違をつけるために、続けざまに労働を詳しく歩き回らなければなりません。愛好者と上手く折り合い

を付けることが出来る人には事欠きません。私はその全て、あるいはその殆どを行ったことがあるのが自慢です。しかしそれは強制も無ければ道筋もありませんでした。それは喜びと一緒にでしたし、新鮮さと創意工夫する喜びで引き寄せられていました。これは何時も職業にはありません。職業とは辛いもので、そして大変に信頼出来るものと言われていました。一人の労務者がいます。私たちは地中に石炭や石油を探す人々の存在を幽かですが想像します。あるいは又、棒を振り上げて屢々目覚めさせる真鱈の漁師たちの労働を想像します。しかし読者は彼らよりももっと身近で、〈私の職業〉と見倣せるタイトルをもったピエール・アンの本の中の菓子屋の職業のような、見た目には簡単そうなものについての情報を見出します。彼がそこで見せているのは、走らずにあるいは急がせる大人の前で脇に避ける見習いが、如何にヘラでの一撃や痛みを与える一撃を受けるかです。子供の遊びには活発さや残忍さが無くもありませんが、実際の労働の連続した単調さや厳しさはありません。実を言うと、労働にも僅かですが遊びの部分がありますが、それは好奇心や新しさからです。しかし、この部分は長続きしません。この部分が存在するのを止めた時に労働が開始します。労働の本来の意味とは調整されることです。

私はその点を強調します。何故ならそれは労働の本質であり、この星の人間にとっての実際の連続した状況でもあるからです。四季や自然の力や労働による同一の連鎖が、強制によって頓着されずに人間に作用しているのを人々は知っています。障害や驚異や失策が現れなくなるのも、倍加された労働によってです。そしてこれらのことは、人間が退屈しているとか疲れているとかは決して考慮に入れません。疲労の極限にあっても、地崩れや洪水や火災は突然に襲って来ます。災害と危険は受け入れられ、気に入ることさえ出来ます。しかし、例えば戦争にあっては一兵卒にしか十分に分からない労働の部分があります。プザールの本においてその一つの観念が理解されることでしょう。『我らヴォークワにあり』(1)です。参戦した人々は立った儘で眠ることを覚えます。この強制は人が想像出来ることを常に越えていますし、これが実際の現実そのものであり、世界の実体です。

生活にはこの厳しい現実と、連続した労働の必要性以外の特徴は何もありません。労働以外の瞑想において、私は現存する事柄と、単なる仮定された事柄とを区別するものを見ることがありません。人間は、眼の前に見る光景よりも、存在しないものや想像するものも同じように屢々強く頭の中を一杯にしますし、確信して仕舞います。観念論者で最も有名なバークレー(2)は、最も無分別な人の一人で、夕食は出来合いのもので大人に成長した司祭でした。そしてこの司祭が最も力を入れたのは、伝道の基礎を築くためにアメリカへ行くことでしたが、決して成功しませんでした。ざらざらとした現実の生活に何時も疑いを持ちながら戻って来ました。しかしながらその現実はやはり、決して彼が水兵ではなかった船によって齎されたのです。それなのに彼の司教の仕事は、言葉によって人を説得させることだったのです。従って彼は、この幾つもの現実の世界は現実という一つの世界ではない、と言言葉によって自分自身を納得させたのです。この事例は風刺画を生みます。しかし現実決して待っていてくれないし、同情もしてくれないことを、何人の人が知らずにいることでしょう。観念論は幼年時代の儘です。奥深いメーヌ・ド・ピラン(3)は、この奇妙な学説を視覚の訓練に結び付けます。眼は観念論者です。でも、何故でしょうか。眼による印象は、如何なる労働も行わないからです。如何なる実際の探究も行わないからです。そしてこの指摘は他の指摘にも通じているのですが、それは私たちが幻想によって自然で

快い状態に目覚める性格になることです。そして私はこの点について少しばかり強調したいのです。何故なら人が見ることによって得る認識の容易さと魅力は、屢々教育者を騙すからです。その上、教育者はその役割によればブルジョワですし、私は連続した幼年時代をブルジョワと理解しています。何らかの薬はあります。しかし、先ずはその間違いを良く認識しなければなりません。

ビランはそれ故に、生まれつきの盲人たちでも幾何学が出来るようにするには如何にするのか、色々と考えた挙句に自問しました。そして確かに彼が良く理解することが出来たのは、容積や面積や距離の概念は、実を言うと単にそれに触れることで学ぶのであり、見ることでは間接的な記号によってしか判断出来ないということです。勿論、盲人が幾何学に奥深くなるための洞察力には最も良い状況にあるのを知る術を、ビランはより良く見出していました。というのも視覚による空間は全てが創られたものであり、自明の拡大によって私たちに教える直観の中で姿を見せて来るのですが、屢々偽りであることも彼は知っているからです。その代わりに触覚による空間は、部分部分によって存在するだけですが、事物の建設によって支えられていて、建設が次々に継続されて支えられています。幾何学において、それは理性の働きが継続して生まれることであり、それ無くしては真の証明もありません。かくして真の幾何学は、自分の眼を信じないで盲人になることです。

私たちは、理解したいと信じている子供が瞬時に見たものには防御態勢を取ります。直観により証明する器用な人々と知り合いになりますが、それは間違った証明です。ビランの考えに倣うなら、長く瞑想しなければならず、恐らく何故という質問を理解するようになるかもしれません。結局のところ絶対的には現存し、私たちに教えるのに抵抗する世界しかないのです。そして私はプルーストを読むように、全ての知的働きはその対象が無くなる時に大変容易になるのです。それは幾何学においては僅かな存在であり、それ故に指先で動かすことでしかないのです。未だ不十分なのです。でも、全ての科学には存在への欲求が大きくあります。しかし、私はその点に戻ることはないでしょう。

私が述べたように、子供はそれ故に人々が発見するのは別の沢山の理由から、労働の世界にとっては異邦人です。子供は遊びによって労働を模倣しますが、そこに這入ることはありません。同様に学校での労働は未だ半分しか労働ではありません。例え労働であっても、それらの物事は学習のために用意された一部分でしかありません。壺の中の本の一本の小麦の茎は小麦畑ではありません。トリチュリ(4)の管は、雨や風や嵐を生む大気の谷と山からはまさに区別されています。学校の経験は外部との接触を断っています。そうでなければいけませんし、私はそのことを分かっています。だが、その上更にこの種の認識は、もしも私が言えるなら、世界に子供を預けることではありません。これらの認識は見世物であって、世界の厳格な法則から逃れた儘にしていますが、一人ひとりには全ての事物が圧力を加えている、と恐らく言わなければなりません。そして、その重圧を感じ取るのは道具です。

私は職業というこの部分の中をやつとのことに進みますが、大きな論争が問題になります。一方には私がブルジョワと呼びたい学問で、外界と接触せずに閉じ込もって話や経験によって納得

させるものがあります。生まなければならない長い回り道で、幾何学的な回り道を、増大する複雑さを認識するための順番に取り組むために、学ぶことになった唯一のものがあります。その上で私が戻るのはオーギュスト・コントであり、次の基本的な一連の学問領域です。数学、天文学、物理学、化学、生物学、社会学です。ここから分かることは、次に来る学問は、先行する学問の後にしか有効に取り組むことが出来ないということです。そしてその厳格な教義は、反駁することよりももっと容易に忘れるものであり、社会学者たちの中に隠れて仕舞っている沢山の歴史学者たちを根絶します。要するに私が少なくとも言いたいことは、ブルジョワの知識は常に唯一の体系的なものではないのに、唯一の体系的なものになっているということです。私が高く評価するのは、天文台や黄経局（5）にいる皆が自然に行っている普遍的崇拜がまさに創り出されていることです。しかし他方では、世界を実在するものとして認識するものはプロレタリアの仕事しかないと思います。プロレタリアが取り扱うこの世界を、プロレタリアが知っているとは決して言いたくないのです。そのことはプロレタリアが知るのに必要とする準備を長くとらないからです。まさにそこからは無縁です。しかし、少なくとも実在の重さがプロレタリアには分かりますし、それに慣れるものです。そして、もしもこの田舎的な見方が嘗て体系的認識に加えられたなら、それは議論されている夢想とは全く別の学問を生むでしょうし、その中では物理学も消えて仕舞うのが私たちには分かります。

従って私の主題をもう少し間接的に明らかにするなら、私はその他のあらゆるものの源泉で子供の肉体にも示されるようになる主要な神話に戻ります。大雑把に最初の外見から言うと、それは次のように、事物は見詰められて人物のように取り扱われることがあります。次のことからこの間違いは極めて一般的で何回も指摘されていますが、それは例外なく全ての人間は世界の中で人間として生きることから始めますし、人間の世界を通してしか非人間的宇宙を見ていないと説明します。それには恐怖や欲望も加わりますし、遊びから虚構も加わり、森の精たちは木々の中に隠れていて、泉の中には泉の精たちが隠れていると頻繁に説明されています。そして、全ての良い妖精と悪い妖精が私たちにパンやペストを与えるのですが、誰も妖精たちの姿を見ませんでした。でも、妖精たちは近くにいて、至る所に隠れているのです。

私は小人たちに関係している迷信を幾つもハインリッヒ・ハイネ（『ドイツから』）に再び見出しましたが、それらの迷信は子供が想像することが出来る大変に良い例です。これらの小人たちは眼に見えません。しかし、その単純な行為は強調されている処です。というのも想像している人間そのものは、実現可能な経験の対象ではないということであるからです。小人たちは子供たちのイマージュであって、これらの虚構の始まりを示しているものです。そしてこれらの小人たちは偶然の出来事や物語の中でしか決して眼に見えませんでしたし、家の仕事も引き受けているのです。小人たちによって台所は掃除されて、きちんと整頓されます。皿はきれいになっていて、柄付き鍋が幾つもぴかぴか輝いています。実を言うと、子供殿はこれらの仕事のことを決して真面目に考えませんし、実際の如何なる種類の仕事のこととも考えません。子供殿はこれらのことを夢見るのです。何故なら行わないからです。働かない者にとっては全てが夢です。その上、子供の注意は必然的に子供自身が欲しいものを手に入れるために使われる方法に齎されます。子供は人から好かれ、納得させ、自分に役立つようにします。子供が見る処、全く困難なことがそこにあります。権力者たちがウィ（はい）と言った時、奇跡的に事は進みます。そして遂に事

が不可能な時、子供にとってそれは厳しい何者かがそれが行われるのを望んでいないことを意味しているのです。事物の世界はそれ故に、実際には幼年時代の初期の年代は、男たちや女たちの世界によって支配されているのです。以上のことからこの観念は、大変自然に有益とか有害な事物は人には分からない何らかの妖精によっても支配されていて、祈ったり納得させたりすることが重要であると信じることになります。ここにはどんな物神崇拜も現れますが、それはご存知のように如何なる人間にとっても奇妙でなく、どんな人間も形づくることが出来た人生で最初の箴言集を大変正確に説明します。

肉体はそのことを嘲笑します。それはそうですが、恐らく余り嘲笑することはありません。というのも既に神も妖精も仙女もない神話があり、それが如何なる事物も考察するのに確実な方法を齎しているからです。何故なら眼に見えない妖精たちは各々に権限や固有の財産があるので、かくして各々の事物には特性があります。森の特性としては燃えることであり、ナイフの特性としては切ることです。そして思考するために、これら二つのやり方には大きな違いも無く、人が見るのは単なる事物であるので、妖精たちが眼に見えないし触れることも出来ないことを良く承知しています。それでは間違いは何処にあるのでしょうか。次のように事物の所有権はその中に隠されていると仮定されます。例えば木の中には炎があります。そして思考するこの方法は、仙女とか物神による説明同様に、神話的であると私は説明したいと思います。人が間違っって信じることには、炎が出て来るのは木だけであるということがあります。この種の間違いとしての一つの例が次のものです。戦争の時期に十分に訓練された人間は、爆弾が一基のガス・タンクを燃やせると考えて、火災がパイプに沿って広がって行き、町全体を焼き尽くすのを以前に見ました。それは照明用のガスがそれ自体で燃える特性を持っていると彼は信じたということです。しかし、そうではありません。そこには空気がなければなりません。ところが事物に隠されている特性に関するこの間違っった観念を明らかにするには大変に難しいのです。何故なら、それは私たちの幼年時代の観念の一つがあるからです。そして隠れた性質を理解しなければならぬことも良いことです。それに対してデカルトは、運動が類似した事物の中よりも動き回る事物の中には最早無いと言うまでになって、先に立って戦いました。運動とは観念であり、今日でも私たちの実際の思想においては困難な地位を占めています。

マッハの『力学』がありますが、その点を読むと大変に有益です。その上、高度な難しさもありません。但し、人間が持っている何らかの特性を私がここで説明したいことから生じるに違いないのは、人間が高度な困難に対して少なくとも戦うようになる訳ではないということです。実際の困難は彼のもっとより近い処にあります。私は、マクスウエル(6)が蠟燭を柔らかい固体と決定したり、封蠟を固い液体と決定したりする時が好きです。そして私は、彼が私たちを何処へ導くのか良く理解しています。それは幼年時代の観念を砕くことです。幼年時代の観念に従うと、銅とか花崗岩のように肉体はそれ自体としては固体です。実際には温度や圧力に依存しています。しかし巨大な圧力による水のように、数々の固体を流して行く経験は誰もが理解出来るものではありません。私としても、それらを決して理解しませんでした。幸いなことにもっと単純な場合があります。酸素を含んだ空気の中で一気に水素を燃やした後で、あなたは水素の大気の中で酸素を一気に燃やす術も良く知ります。これは燃焼性の性質を持った物体と、燃焼させる性

質を持った物体を引き離す一つの方法です。燃焼とは結合です。これは肉体そのものに属する性質ではありません。二つの関係がなければなりません。ここには相対性の観念が現実的で困難な取扱いの中に生じています。衝突する力の全体として世界の観念から移らなければなりませんし、それは結局のところ神人同形のものであり、それに関係した体系としての世界の観念のものであります。もう一つの例は更にもっとはっきりしています。地球は物体や月を引き寄せている、と私たちは言います。しかし、この思考する方法は幼年時代を示しています。地球が眼に見えないロープを引っ張っているように私たちには見えます。実際の引力とは、二つの物体の間の一つの力です。それはお互いが依存しているのであって、最早一方の中にも、もう一方の中にも無いのです。

私たちは物理学という怪物を創り出します。そして沢山の人がそんなものは少しも分からないと考えて絶望しています。私の考えによるなら、何かの専門分野を良く知る者で、特性のある言葉が魔法使いや魔力を持った人々の言葉を率直に説明する幼年時代の偏見からそこでは自由に解放されている者は、原子が揺れているのを見たことがなくても正確であり、十分に物理学者です。あるいは寧ろ、物理学者たちの影法師であると言いましょう。デカルトが見たような間違いは、私たちの情念に倣って判断することにあります。そして物理学へのあらゆる努力は、私たちの恐怖と事物との間違った混淆を解体することです。その混淆とは、事物の中に神が隠されていると先ず私たちに仮定させて、次に熱や電気のように眼に見えないものを仮定させて、それはある物体の中に隠れているとか、他の物体の中に流れているというものです。コントは、より抽象的で神学でしかないその様な仮定を、形而上学的理性と共に命名します。私は少しばかり早く結論を言わなければなりません。世界は現れる儘にあります。というのも、如何なる外見も歪んでいないからです。そして考えられる学問全体は、一つの外見をもう一つの外見の代わりにするために必要な仕事の計算です。例えば麦畑を空地の代わりにするためであったり、あるいは鋼鉄の一部を錆びた色の沢山の石の代わりにするようなものです。その様な学問は神話を除去しますし、他の目的を少しも持ちません。その様な学問は、魔法使いや妖精たちの世界の代わりに、私たちが仕事によって変えられる大きなメカニズムを用いるのですが、少なくとも仕事によって変えられるのです。この見方によってプロレタリアであると言われなければならないように、世界はその対象の全ての重さを再発見するのです。すり減った舗道が真新しい舗道に変わるのは、西洋南瓜が豪華な馬車に変わるように、ブルジョワの眼で見るからです。又、実際に二か月間海へ行って帰って来ると、舗道が変化しているのを眼にします。変化させた苦勞は重要でなくなります。私は、大変に奉仕されている人間をブルジョワと理解しています。そして私たちは全てがブルジョワです。いずれにしても幼年時代の私たちは、一人ひとりが完全にブルジョワでした。私たちは、私たち自身の行動によって肉体から大変に多くを教わります。誰も祈りによって舗道を動かそうとしません。しかし、契約や財産や利子の世界が問題になると、私たちが再び子供のように判断しているのに私は気付きます。もっと適切に言うなら、大人たちは沢山の金を手にしたり、貧乏になるかもしれないことを理解しません。それは金による購買力が独立した特性のように、金に閉じ込められているように見えます。金には重さがあるように貴重なものです。そして、金貨を取り扱っていた人々は指先で金の密度を確実に感じます。だが、それでも間違え

ます。金塊の重さは固有のものではありません。極地よりも赤道の方が軽いことは知られています。全く同じように、金の価値も決して金に本質的に属する固有のものではなく、取分けその商品と金の比率にも依存しています。勿論、グランデ爺さんは金に接吻します。彼は金を愛していました。金を崇めていました。将来性のある人物は、次にはその中で経済学のデカルトになり、労働に従い、かくして社会学を物理学に結び付けてその価値を計算します。

私たちは労働のことを十分に思考したとは言えません。電気はまさに〈妖精〉と言われています。多くはその様なものです。しかしながら電気は何も生みません。全てを生むのが人間であるのは明白です。しかし、大変容易に光と熱、そして運動さえも手に入れる時に誰がそんなことを考えるでしょうか。大変に高価であるなら、その人は少なくとも嘆きますし、吝嗇で要求の多い魔法使いを告発します。彼は何でも何時も間違っていないのです。しかし、電気がだんだん安くなっていることを彼は心に思います。彼は限界を見ません。それは人間たちの苦勞です。食べ物を食べ、服を着て、暖房を取り、人間の手で電流を生み出して多くの人々の世話をする必要性です。つまり坑夫たち、溶鉱工たち、栽培者たち、ゴム採取者たち、仕上げ工たち、組み立て工たち、グリース工たち、運転手たちです。同じ様に、飛行機が手で運ばれるとも考えられません。皆が飛行機で行けば、もっと安価になるだろうと人は思います。もっと安価になるでしょうか。全体の労働が少なくなればなる程、その電力は多くなると言いたいのです。しかし電力は表面上は輝いていますけれども、仕事に従って大変正確に調整されます。その観念は難しく、私はそれを認めます。反論は沢山ありますが、重荷を上げる機械のクランクを回す人間のことを考えて下さい。確かに彼は歯車とか滑車の世話になりますが、組合せをどうするかであって、仕事を増やしません。彼は、十杯のバケツの水を全て一緒に運んだりしないで十往復して運ぶ人のように、短い長さを大きな努力で行わずに単に長い長さを小さな努力で行うように変えるのです。単一機械のこの学習は、仕事の学問のイロハのようなものです。燃焼とか爆発を伴う化学的機械が不可思議であるのは本当です。石炭や石油はそれら自体で労働します。目一杯に引っ張った発条のようなものです。しかし兎も角も、私たちの必要性に従って労働するための発条に導くためには、まさに人間の労働そのものにしなければなりません。それらを移動させなければなりませんし、もしも言えるとするならそれらを繋ぎ止めて置かなければなりません。きちんと繋ぎ止めて置かないと、メリナイト(7)は全く単純に燃えて仕舞います。それが行う働きは、対立する抵抗に応じています。機械がある日、全く独自に動き出すような大変一般的な観念においては、確かに幻想的部分があります。それらの機械を如何に話すのかを単に知っているとしても、私たちのために苦勞も限度も無く労働する力という子供っぽい幻想をここに認めないのは誰でしょうか。労働や財産という積極的な一つの見方は、既に私たちの手の届く範囲にはありません。しかし、それらの探究の高度な複雑さを無視することがなければ、私たちの偏見は肉体と同様に全てがそれらの物質の中にありますし、私たちの両眼を塞いでいるものでもあると私は思います。これらの偏見は、労働とは違ったやり方で世界を変えることが出来ると信じる結果になります。

経済学の世界は、私たちを騙すためには見事な行為であると認めなければなりません。数々の記号で管理するものであるブルジョワの人は、これらの記号が不思議な美德を持っていて、そして単に金ばかりでなく、サインで飾られた書類さえも持っていると言えようになります。



。私はロー（8）の有名は冒険以来、私たちは大して変わらなかったと思います。そして相変わらず労働を忘れていますが、しかしながら労働は財産にとっての唯一の源泉です。しかしブルジョワの精神は、その中に子供もいますが、その様なものである実際の世界までは決して遡りません。彼は、信じる行為が多く価値を変えると単に気付くだけです。私たちにはここにもう一度呪文があります。言葉によって手に入れたいのです。そして、信用と交換という人間の世界においては、この幻想が僅かな時間を支えることが出来るのです。しかしながら、記号の交換は他方を犠牲にして一方をまさしく裕福にするのですが、それは私たちの必需品を満足させる労働条件に一キログラムメートルも増やすことが出来ないのは明白です。空想上の財産があり、アラディンの洞窟を大いに思い起こさせます。

自由な人間は観客の席に座ったり、大変な繁栄から惨事までが通る空想的な時期に生贄の席に座ったりしても満足出来ませんが、それは豊かさそのものと同じ様に空想的でもあります。困難は、記号の働きを理解することではなく、信頼が記号による眼に見える価値を如何に増やすかです。重要な点は次のとおりです。一方では記号の働きが贅沢である産業のあらゆる英知を外れて発展し、ここで給与という魅力によって労働者たちは銀行家たちの味方になり始めます。そして次に、空想的価値の崩壊は贅沢な製造を突然に停止します。かくして必需品が不足しない世界においては、失業が極めて現実的に生じます。読者の皆さんは、それらが取り巻く人間の世界において、次にこれらの不思議な変化の緒効果をまさに細部まで知るでしょう。これらの想像力の全ての間違いの始まりは、事物とか紙という形式そのものに購買力を閉じ込めているそれらに基づいて人が豊かさを考えるから齎されることに、私は少なくとも気付いて欲しいだけです。その代わりに豊かさは、お金が記号でしかない協同や交換から成っています。そして金貨から引き出す精神の働きは、購買力がそこからの重さと他の全ての質を引き出すことと同じものです。デカルト主義者の活動とは、まさに行わなければならないということです。しかし独立した力で形づくられているものとして、あるいはもしお望みなら少なくとも開ける術を知るのが重要な豊かさという幾つもの容器で形づくられているものとして、世界を理解することの子供っぽい習慣によって、容易に行われるものではないのです。（完）

（1）ヴォークワは、フランス北東部ムーズ県にある町で、ヴェルダンからヴォークワの小高い丘の麓までは、一九一五年に第一次世界大戦おいての激戦地となった。

（2）ジョルジュ・バークレー（一六八五～一七五三）は、アイルランドの神学者・哲学者。

（3）メーヌ・ド・ピラン（一七六六～一八二四）は、内省的方法で主意主義を主張した哲学者。

（4）トリチュリ（一六〇八～四七）は、イタリアの物理学者で、ガリレオの弟子。ガラス管に水銀を入れて満たして、同じく水銀で満たした皿に逆さに立てると上部は真空になって約七六センチメートルにしかならないのを発見し、水銀気圧計の発明者と言われている。

（5）黄経（こうけい）局は、フランス革命時代に創設された天体暦、航海暦、航空暦などを作成する機関。

（6）マクスウェル（一八三一～七九）は、英国の物理学者。

（7）メリナイトは、ピクリン酸を含む強力な爆薬。

（8）ジョン・ロー（一六七一～一七二九）は、英国出身の財政家。財務総監となり、兌換券発行銀行を設立し王立銀行としたが、紙幣乱発により経済恐慌を招き、イタリアへ逃れた。

ところで私は、取分け肉体を強調しなければなりません。何故なら、この領域において私たちが容易に知ったり説明したりするのを信じる時は、少なくとも瞑想家になっているからです。私はスピノザから決して思想ではない思考として二つの事例を理解します。それは塩の彫像に変えられた口の妻(1)と、話をする樹木です。それに少女のためのイギリスのお伽話をつけ加えます。それは少女たちが輪になって一本の樹木の周りを踊って回ってばかりしていたので、バターの塊に変えられて仕舞ったというものです。この種の思想は、子供っぽい独自の経験を先ず仮定します。そこでは追ったり再び見出したりする力もなく、現れたり消えたりする事物であるのが分かりますが、それらが何処から来るのか、如何に作られるのかを知りません。両親や乳母の習慣として、子供が殆ど何時も欲しいものは、例えば人形は子供がいる部屋以外の戸棚の高い処とか、鍵のかかった抽出の中にあることに気付いて下さい。そして最高権威者が決めた時に、これらの事物がそこに戻って来るのです。子供の世界は殆ど全てがこれらの暗黒の部分で一杯です。玩具や甘いお菓子は突然に出て来ます。そして、これらのことが原因して、財産はその他の全ての事物に結び付いていて、労働によって手に入れる観念は非常に遅くなって形成されます。この観念は何歳になってもそれらの財産の中で間違っただけで形成され、労働の条件によるものでないことを私は既に説明しました。そして実際にそれらの原因の一つから子供は一つの事物が、何でも構わずに他のものになるのを簡単に認めるようになります。しかし、視覚の亡霊や疲労の影響にも斟酌しなければなりません。それらは絶えず色や形を変えています。

実際の事物そのものは視線によって同一の様式でもその姿を屢々変える、と今は言わなければなりません。虹は、その出現の顕著な典型で、何ら新しいものを他に示すものではありませんが、見る位置から単に一つの変化を説明するものです。そこでは太陽と雲と観察者を仮定してみてください。観察者が虹を見るためには、これら三者の位置が関係しています。それでも現象としては同じ説明で証明するのですが、二人の観察者が各々異なった二つの虹を見るので、虹は一つの事物ではなくなります。この説明を見出したのはデカルトです。それは至る所にあります。人はそれを参照することです。そして良くご存知のように、虹を一つの事物と考えないのは大変に難しいことです。もっと適切に言うなら、全ての事物を虹として思考するのは、つまり宇宙の様々な諸相の中の関連の表徴として思考するのはもっと難しいことです。そして人間たちは、虹と同様に輝いていて確実性のある視覚に映る幻によって、難しい状況に置かれていることも認めなければなりません。見世物のような経験は自然と偽りであるという言葉は私は繰り返します。

私が到達したいのは次のとおりです。所謂楽しい経験とは屢々、私が妄想家と呼ぶ者の精神による習慣を堅固にするための性質のものであります。例えば、あなたが無色の二つの溶液を混ぜると、直ぐに鮮やかな赤い色になるとします。そこには私が物理学による虚偽の部分と呼ぶものの観念がありますが、それは大変に長い間の探究の道を迷わせた化学上の変化を知ることでもあります。それからその上でバルザックの長編小説『絶対の探究』を読んで下さい。バルザック自身は、決然とした仕事振りで比べようのない驚くべき素晴らしい豊かさに早く信じて仕舞うのですが、小説家の叙述する力によって全てがそこにあります。誰もがすっかり明瞭に理解して自慢も出来

ないこの難しい主題を、私はその多くを必然性によって要約しなければなりません。要するに学校の実験はそれ自体において奇跡的な性格を大変良く齎していると私は思います。何故なら肉体、金属、酸、そして大きな働きの生産物である類似のものが集合されているのが分かるのですが、その働きは実験において全然表されていないからです。それによって子供は騙されます。騙されると言っても色々です。何故なら子供に提供されたこれらの変化は、長く唯一の経験になっていた不思議な魔法のような見世物と非常に良く似ているからで、子供の実験にとっての主要な部分であるとも言いましょう。

以上から私は、科学の最初の教育が私たちの迷信的な部分を余りに直接的に興味を持つのは不幸である、これらの方法から顔を背ける必要のある観念をやっとの思いで引き出しましたが、人は完全に殺すことが出来ません。その時、何処から始めなければならないか人は尋ねます。その解答は、コントの百科事典式の項目によって、たっぷりと十分に与えられています。そして自分を哲学者と言いたい純粋な文学者は、コントのしつこくて堅固な思想から免れられません。それ故に私たちが真実の秩序に近付かなければならないのは、算数、幾何学、力学からです。そしてコントもそのことを言っていましたし、更に繰り返し言っていたように天文学のような科学でさえも、既に位置の変化に還元されないものからは我が身を守らなければなりません。昔は恐ろしい現象であった日食は、結局のところ三つの天体が一行に並ぶことで証明します。しかし星々の色や温度やそれに類似したものについての物理的な天文学の研究が、私たちの幼年時代の魔法に立ち戻らせる危険を負っているのは明らかです。そして、この指摘は大部分の人間に係わりがあり、恐らく全ての人間に係わりがあります。

私が光の一定しない星を観察する時、私は一つの単純な位置で向かい合っています。私が光の変化を説明するためにそこに付け加えることの全ては、直接的な経験とは関係が無いものです。何か強い偏見によってしかここに導かれないのかもしれないかもしれません。そして、確かに光の点滅が生き物の呼吸によるリズムと類似したものではありませんし、同様にこの星にとって通常の温度が三千度の生き物の一種であっても少しも構いませんが、それらを証明することは出来ません。学者は、その様な仮説に気を付けます。何故なら学者はもっと単純で、もっと身近で、もっと取扱い易い他の実験によって形づくられる精神を持っているからです。データそのものは遠方のために神秘さを残しています。数々の先入見を抽象しましょう。色々に変化する星の目撃者は、樹木を見たり声を聞いたりする子供が話をしている樹木を想像するのと同じ状況にあります。その場合は単に実験が手頃なだけです。奇跡的な外見に興味を抱くのを前提にする良識ある人間は、直ぐにその近くとか、あるいは多分幹の穴で樹木に話をさせている人間が誰なのかを探究します。幽霊たち、幽霊の出る家、花々の雨というようなこの種の場合においては、何時も人間がおります。私はここにフラマリオン(2)の術策を思い出しますが、彼は大量の花々の面前にいて、実験の前後で奇跡を起こす人の目方を量り、そして花々の目方を量るに止めます。ここには重さを量ったり、長さを測ったりして、そして前の状態の中で次の状態の解明を求めるように養成された人間の偏見が大変強く認められます。塩の彫像になった女性の変化に関しては、物語でしかありません。しかしながら、化学的次元での変化や突然の結晶作用は、この種の物語を信じないための精神を準備するには十分ではありません。研究者たちは、二十日鼠が古い雑巾から生まれたと長い間信じていました。

私は、確認することが不可能であっても、仮定するのが過度な今日の物理学者たちを決して疑いません。チンダルやファラデーやハクスリー(3)の物理学のような、古典的物理学は子供の精神にとってはより一層健康的である、と私は単に言いたいです。何故ならそこでは多くのことを確認し、仮定は少ないからです。そしてある解明において仮定されるものは、全てが子供っぽい想像力からの習慣と非常に良く合致しているとも思います。算数や幾何学や力学の経験や実験において素晴らしいものがあることは、私が如何なる存在も決して仮定しないからであり、実験を免れる如何なる物質も仮定しないからです。幾何学においては全てが広げて見せられ明らかにされます。従って数学においても同じです。批判精神の最初の武器が生まれるのもそこです。批判精神には信じるものが何もありません。液体静力学や音響学のように物理学に相当する分野も、現象を分析して再び組み立てることが出来ますし、いわば全体を空にすることが出来ます。私が、水の中に空の柄付き鍋を突っ込めるように水面に押しつける時と、水で一杯になった鍋を持ち上げるために行う労働と比較し得る労働を行います。両者の場合、私は水を移動させているのです。物質が浮かんでいる時は何も不思議なことはありません。梶子や滑車の時も同じです。ところが巻揚げ機の特徴が、もしも子供の体験で示されたなら、先ずは不可思議でびっくりするに違いないことに注目して下さい。少なくとも巻揚げ機は分解して再び組み立てることが出来ますし、分かり易く言えば全てを引き出すことが出来ます。

ルクレティウス(4)は理性の一種の狂信者ですが、彼の本を読むのには何時も適しています。私たちが好んで真理と呼ぶものを彼は重んじていないので、あなたはびっくりするでしょう。というのも星々が昇ったり沈んだりすることや月の位相や日食を説明するために行われる仮定は、如何なる神もそこに入らなければ全てが適確であると彼は言います。彼が知っていたことは、私たちよりもずっと少なかったのです。しかし彼の狙いは正確でした。どんな物理学の対象も、子供たちに特有の世界を認識する想像力を先ずは綺麗にすることにあります。私が指摘したように、私たちは並外れた間違いや永遠にそれらを消し去ることに存する実証的な認識から全て出発します。そして人が信じる事が出来るのは、そんなにも容易ではありません。何故なら妖精たちは眼に見えないものと仮定されているからです。私はその理由を少し説明しようとしたのですが、この広範なテーマを論じ尽くすにはとても及びません。それ故に、その門の背後には何も無いことを見に行ったり確認したりすることでは十分ではありません。門そのものに、ぞっとするような恐ろしい外見を随意に操るまでに至らなければなりません。例えば、その門の上に作用しながら、恐ろしかった騒音を正確に生むことです。そうして一般に、その働きによって事物を取り扱うこと、その様にあるが儘に感じる事、つまりその働きに忠実に取り扱うことは如何なる悪意もありませんが、如何なる特別待遇も無いと私は言いたいのです。そして、農民の労働は精神のこの洗濯が指物師や錠前師や鍛冶屋や石工のものよりも特有のものでないのは明白です。プロレタリアの疑い深さは、農民や話をして生活するブルジョワのものとは別ものですし、既に別種であっても驚くものではありません。私はここで、私たち一人ひとりが乗り越えなければならない巨大な間違いの山を、単に呼び起こしたいだけです。そして、それを乗り越えれば乗り越える程、物理学が行われるのであると私は言います。人が電気の働きに驚嘆する時、電気のことは何も知りません。変換された労働をそこに再発見しなければなりません。損失もありませんし、

利益もありません。そして、その他の部分も全て学問においては子供っぽい好奇心が連続して私に現れて来て、常に新鮮なものを渴望しています。神話とタペストリーの糸を解いた者は、事物に関する実証的認識というものが絶対的に無宗教であるとの合理的結論に到達しているように私には思えます。

この大胆な主張は、子供の儘でいる者たちによって激しい怒りをもって何時も反対されて来ましたし、これからも反対されて行くでしょう。彼らが祈りや礼儀正しさや脅威や奉納によって、必要とするものを手に入れるのも私には分かります。でも、私は彼らを説得する気もありません。その様な職業にも形而上学にも期待しません。私は形而上学と同様のものを意味しませんし、即ち言ってみれば宗教です。全く何も存在しない道徳にも恐らく宗教の真実があり、それは些細なことではありません。これらの頁を読む読者諸氏に私はこのことを説明しようと試みるかもしれませんが、しかし、一度に全てを言うことが出来ません。私は次のとおり言うに留めます。もしもあなたが、あるが如くの〈宇宙〉を認識したいなら、想像力から幽霊たちを全て消して、隠されている如何なる妖精も決して想定しないで下さい。妖精に似たものも想定しないで下さい。以上が成年男子の原則です。

これから私は、人々の性癖を穏やかにする何らかの観念を、更に提示しなければなりません。取分けロック(5)の『人間知性論』に見出されるこの教義を、私は昔から評価して来ましたが、それに従っても私たちは各々の事物の本質を把握出来ませんし、あるいは所謂事物がそれ自体としてあることを把握出来ません。私たちがせいぜい知っていることは、事物は私たちのためにあるということです。そして私たちが、金とか水とか電気とか何でも構いませんが、それらが私たちの感覚に基づいて生み出した結果以上であることを決して知らない時、私たちは如何にしてそれらのものを認識することが出来るのでしょうか。さて今度は私が自問するに到りました。事物の本質が何であるかを探す時、人は何を探すのでしょうか。アカデミー風に型に嵌まって思考したブリュンティエール(6)は、「樹木の背後には何ものかがある」と好んで言いました。子供の思考です。最初の探究は非常に自然であって、如何なる魔法使いであるのかを探すことにあります。私はそのことを十分に説明して来た処です。しかし、如何なる道によって人は魔法使いを消し去るに到るのでしょうか。事物の中を探してもそれらの特性の源泉は無いのです。というのも別の名になって、魔法使いや妖精や仙女は何時もいるからです。そして私がランプの説明をする時に、「これは電気です」と言う時、「これは仙女ウルジェールです」と言うようなものです。私は、電気の明かりが光る前と、その間に前提とする工場や労働の全てにまで遡って行って、ランプの中に仕事の総量を見出さなかった限り、私は何も知らないのです。私が労働や、労働と等価値のものを見出して判断した時、私は全てを知ります。そうです、全てです。何故なら私はランプから、明るくすることの特性を引き出したからです。何故ならそれはランプであるからです。私は重いものであるという特性から金を引き出したようなものです。何故ならそれは金であるからです。金の重さを量ることは、金から地球まで、月まで、太陽まで、全てのものまでの関係です。そして、そのランプが照らしているのには、その地区の電線と発電機と蒸気機関と石炭が関係しています。現実の事物の変化というものは、結局のところ移動に帰する労働を前提としています。空想的なものは、お伽話に見るように容易に移動します。宮殿は細い棒一本でふいに現れたり消えたりします。実際の事物は移動に抵抗します。〈宇宙〉は移動に抵抗します。そ

の通りに出来ていますし、少なくともその通りに出来ているのが現実です。〈宇宙〉の現実とは、魔法使いと魔法を否定することです。それは全ての事物との関係によって、全ての事物に依存していることであり、それ以上は何もありません。それ故に事物の中には何もありませんし、事物の中に探究すべきものは何もありません。そして、最新の原子という最新の特性は、既に移動を抑制させる他の全てのものと関係しています。電気という原子は、電気ではありません。電気という数々の原子のお互いの関係体系が電気なのです。あるいは別な言い方をすれば、電気の重さは関係がありません。つまりお互いの物質の段階の相違であって、重さは意味がありません。それなのに私は、幼年時代の魔法使いには絶対的な重さを認めていました。私は単にその観念を示すだけです。その観念は形にするのが困難です。現実の〈宇宙〉を思考することも困難であるということです。

アラディンは、魔法のランプを擦らなければならないだけです。忽ち黒人奴隷が現れて、あらゆる魔法が掛けられて行きます。ダイヤモンドも金も望めばありますし、そこにはあらゆる種類の財宝があります。かくして一段と単純な動作で、私は光を作ります。しかし、それは決して本物ではありません。私はそこに〈宇宙〉の法則を認めませんでしたし、その法則に従うなら一定の労働によってしか取得されないものです。そうすれば私はその労働を良く知るでしょうし、もし私が大人に生まれたなら、そしてもし私が実際の状況に先ず従っていたなら、私はそのことしか知らないでしょう。もしも人間が解放されて僅かなお金に含まれている精力で自分の役に立てることが出来たなら、大変な権勢家になると言った者は未だ子供の観念を育成していたのです。というのも、僅かなお金でも沢山集まればその精力は巨大な価値を生むと仮定してみましよう、兎に角この精力があるが儘の僅かなお金を保有することしか出来ないのは事実であるからです。もしもこの精力が働くのを人々が望めば、矢を放つためには弓を引かなければならないように、そして自分の塔で働くのを望めば、振り子時計のゼンマイを巻いて働くようにさせなければならぬように、先ずはその精力に打ち勝たなければなりません。そして肉体労働が〈宇宙〉についての私たちの観念の源泉であったなら、これらの事物は全ての人々にとって自明のことになります。そして空間についての事情もこの通りですが、個人はそうではありません。幼年時代の個人はその反対で、私がブルジョワの観念と呼びたいものを形成することから開始しましたし、それらの観念に従って人を説得するための弓を獲得するのが主要な方法です。しかし、前者の肉体労働の観念を全て根絶させるのが困難なのも人は分かっています。私は昔、ジュール・ヴェルヌを読みましたが、彼はノーチラス号のエンジンについての覚書で楽しく教える意図を持っていました。発明家は骨折ることなく速度を増す艇子の方式を発見したように、それをこの覚書も言っているように見えます。全く静かに水を上げたり、再度大量の水を下げたりする方法を発見した素朴な発明者を私はそこから思い起こしましたが、結局のところ彼は使用した力以上の労働を生むことであると言いました。多くの人々はその様に考えていますし、明白なことです。何故なら、何よりも単純なそれらの事例について、決して騙さない計算や幾何学の助けを借りて労働の変化を研究しなかったからです。しかし何故この労働の法則を騙すに至ることが、克服出来ない希望なのでしょう。何故なら、幼年時代は直接的にこの労働の法則に反する経験によって育てられましたし、これからも常に育てられるからです。私たちは、真理を発見すべきではなく寧ろ愛

されて尊敬されている間違いの全てに、打ち勝つべきなのです。

私は、その観念の果てまで行き最新の変化まで子供っぽい神話について行きたかったのですが、その変化が今日の豊かさの観念を歪めておりますし、現代の迷信状態を正確に考察しなければなりません。もっと昔の観念に戻るなら、厳しいと同時に母親の介入によって取分け親切な父親がその儘許されている、信心深い宇宙の概念における子供にとっての家族の経験を正確に思い出すのは大変に容易です。それは組織の中に置かれた子供の術策でしかありません。そして、その組織が私たちの最初の感情で調和がとれているにしても驚く必要はありません。だがその上更にこれらの寓話は、有益か有害なものであるかが分かる子供っぽくもある一つの方法によってしか信用がありません。それは毎日食べるパンが与えられているのではなくて、その組織が稼いで獲得されているのであって、言葉によっている訳ではありません。そして、言葉を使用する沢山の商人たちにお金を支払う人間の労働に、もしも莫大な黒字がなかったとしても、給料という現実的な観念がもっと容易に形づくられるでしょう。この場合においてさえも、その観念が形づくられるのは未だ困難です。その人間には自分の幼年時代である黄金の年齢が背後にあるのです。しかし私は少なくとも幼年時代が幸せとは言いません。というのもディケンズの『オリヴィエ・トウイスト』に見るように不幸な幼年時代は、もっと適切に言うなら、恐らく力のある魔法使いと悪意のある魔法使いに支配されているからです。そして激しい恐怖が、幸福よりも私たちの思い出の中に更にもっと示しているのです。この小説が私に何を考えさせるかと言うと、盗みは労働を騙すための試みでしかないということです。（完）

（1）ロトは、聖書でイスラエルの族長アブラハムの甥。神がソドムの町を滅ぼされるのを知り、妻を連れて逃げ出すが、戒めを破って後ろを振り返った妻は塩の柱にさせられた。

（2）フラマリオン（一八四二～一九二五）は、天文学者でフランス天文学協会の創始者。

（3）チンダル（一八二〇～九三）やファアラデー（一七九一～一八六七）やハクスリー（一八二五～九五）は、いずれも英国の物理学者。

（4）ルクレティウス（前九八～前五五）は、古代ローマの哲学者・詩人。

（5）ジョン・ロック（一六三二～一七〇四）は、英国の哲学者で、『人間知性論』の著者。

（6）ブリュンティエール（一八四九～一九〇六）は、「両世界評論」の主筆で、文学史にジャンル進化論を唱えた文学史家・批評家。

私は夢のように美しい年齢に遡る二つの観念をもう一度指摘しますが、それらは特別待遇の幸運な観念であり、二つとも一人ひとりの人間にとってブルジョワ部分が余りに強いのです。子供は気に入る時に手に入れますが、この方法は容易に忘れません。そしてこの方法は更に雄弁家や助言者や医者にとってさえも正しいものです。以上によって人は特別待遇を自慢しますし、そうすべきであるが如く恥とは思っていないのです。この観念には全体を再検討しているところです。そして私は、有名な歴史のお気に入りたちが役に立った人間になって行ったことに納得させられます。少なくとも歴史の詳細は私たちにとって屢々不明ですから、私たちは幼年時代の一つの観念で満足します。人は合図でしか生活しなかった宮廷人たちの愚かさにびっくりします。彼らは何ものでもありませんでしたし、何も出来なかったことを人は余りに気付いていません。しかし現代生活においても読む術さえも知らない時、歴史を如何に書くというのでしょうか。特別待遇は殆ど何ものでもありません。人はそれが全てであると信じるのが好きなのです。

特別待遇というこの観念と、それに結び付く幻想には、興味あるものがあります。それは〈神話〉が偽りであり、人間の世界に適用させてもいることを人はここで発見するものです。幼年時代の経験に倣って若者は、好意的な意志を持つ人々に属しているのか、あるいはその反対の人々に属しているのかのようにして、成功を考えるようになります。彼は友人や敵や競争相手たちを見抜こうと試みます。取分け想像力や夢想の中で遊ぶゲームでは、一方とは和解し、もう一方とは不和にするものであり、告発したり正当化したりするのです。要するにそれは自分の周りで一種の家族を作り直すことであり、それは保護者の助言のようなものです。これらの策謀計画にも真実はあります。しかしながら経験が複数の事柄に注目するように導きます。先ず、利益は決しておべっか使いたちのものではない労働者たちによって容易に手に入れますが、おべっか使いたちも役に立っているのです。その次には甘やかされた子供の親切を当てにする人間以外に、最早軽蔑される者はおりません。そしてそれは全て人間が神話的に生活出来ないことを意味しています。外部的必然性はそれらを極めて緊密に保持しています。如何なる人も、お気に入りの者たちを食べさせるために、そんなにも裕福になつたりしません。しかし、熱烈に否定したいこれらの余りに厳しい提案を明らかにするのは何故でしょうか。人間の姿をした奇跡を事物の本質から追い出した後で、人が労働と対決しない独自の日を裕福の記号に委ねるや否や、その記号が相殺されるのを理解するまで人間の世界そのものをもう一度撃つのが重要です。そしてその記号が最早生き生きとした労働で深い影響を与えられなくなるや否や、その記号は直ぐに自説を、つまり空想的で不安定なものを価値あるものにしてしまうと私は又も言います。私はその観念を素描します。私はそれを発展させることが出来ません。私は、子供が知ることが出来ない事柄を、幼年時代から抜け出ようとしている子供に単に教えただけです。それは与えられた業務に大変厳密に報いることであり、その外のことには何も報いません。但し、それが行われることは不可能ですし、この観念を何時までも続けて行くことは困難です。最初は事務所を掃除したこれらの裕福な人間たちの伝記には曖昧なものがあります。この忘れがちな街路清掃人、お喋り、軽薄者、妬み深い者を、従って全てを観察し全てを保持して一つの秩序を迅速に忠実に実行する能力があ



と思っているその他の地味な清掃人と、比べなければなりません。この種の業務は常に重要ですが、業務を行う方法は裕福と力に感嘆する代わりに、その人間に押しつけていた外部的必然性が貫いているのを反対に人が見ているのを前提にします。そして、その必然性に対して礼儀正しさは何ものでもありません。

この荒っぽい職人は多分次のように言うでしょう、「私にはチャンスがあった」。揺り籠の周りでは、妖精の神話は私たちのお気に入りです。何故なら、その神話は子供の状況を大変正確に表現しているからであり、何者かの善意によるしか発展出来ないものであるからです。しかし、その状態は常に継続しません。人間の気分は彼を取り巻く人々を前提とする善意と悪意の総量次第です。少なくともこれらの前提は常に幻想的です。そして不機嫌は立身出世するやり方を同様に幾つも与えます。不運や幸運にさえも打ち勝たねばならない積極的な観念は、まさしく物理学的観念です。全ての切迫した労働には優劣が無いのを知ることであり、先見の明がある人間は大金を動かしているかの如くに最も目立たない労働を行っている人になります。これと同じ観念は、労働の継続期間が労働の尺度になる形式に基づいて姿を見せ始めることになります。お金持ちになる人々は、人が知る限り、ある種の労働が彼ら以下であったとは決して判断しなかった人々です。それは彼らが本物の観念を身に付けていたということです。従って彼らが子供たちの一つの世界の中で王になったとしても、私たちはびっくりしません。反対に、人が賭けによってお金持ちになれないことは一種の自明の理です。富と労働の関係においてすっかり明白にして理解するのは幸福なことです。その様な認識は子供の経験においては少しも無いことを指摘しただけで私は十分です。

私は重要な観念を限定したいと思いました。細かい点は読者諸氏の考えにお任せした儘にさせて置きます。子供が他者の労働によって養われ、服を着せられ、保護されるのは自然なことです。子供はそれ故に、気に入られなければならない権力のある人間たちの従う者としての人間の運命をありありと思い描きます。そして私たちの神話がこれらの幼年時代の観念を正確に写し取ったものであるのは明白です。「私たちにパンを与えて下さい」。そこには子供の観念があります。自然は衝撃以外のものは何も与えません。その他のものは全てが労働によって獲得されます。しかし労働の現実的な条件も、子供の時に深く隠された儘になっています。以上のことから第二段階の神話は、大人の世界にも覆っています。驚くべき間違いから見せてくれるのは、他人の労働によって生活する特権を持つ人々が裕福のためのこの神話を持ち続けたことです。何故なら本来的に宗教的な観念が、これらの経済的誤りのすぐ傍に占めていて、多少なりとも幼年時代を思い出す方へ傾いても私は驚かないからです。それに反してプロレタリアの無宗教は、自然の果実のように厳しくも獲得される成熟によって現れて来ます。しかしながらプロレタリアたちが別の神話に従えば、生産性と必要性が増大すると同時に労働時間が減少して、その神話によって解放されるのかは確かではありません。この誤りは幼年時代にもあります。それは他の源泉と同じものです。私は誤りであると言います。それは幼年時代の誤りであり、生産の中で労働を思考しないことは誤りである、と私はまさに確信しています。私には、ある時は透明で又ある時は不透明な人間の未来の展望を前にして、少なくとも人は容易くプロレタリアになれませんし、決して十分にプロレタリアでないとお知らせして、後は読者諸氏にお任せします。(完)



## II 大人の神話

この大きな主題は先ず、あり余る内容の宗教史を含みます。幾つかの重要な時代を見分けなければなりませんし、各時代の精神を把握しなければなりません。精神とは、希望したり心配したりする確かな理由や運命を祓うための漠とした方法と理解して下さい。その背景として私たちは、子供っぽい神話の全ての特色を集めている〈お伽話〉を再び見出します。そして最も注目すべきことは、外部の自然はそこに少しも無いということです。魔法使い、鬼婆、魔法の杖、合い言葉（開け、胡麻）は、自然のものを手当たり次第に創ります。砂漠の中に池や泉を創り、廃屋の場所に宮殿を造り、そしてアラディンのランプとか、何か他の秘密を発見した貧しい者のためにしか創る術を知らない宝物です。あらゆる国で殆ど同じであるこれらの〈お伽話〉は、何よりもドアを開けることも歩くことも出来ない子供の状況を、表すこと以外に行わないのを私は説明したかったのです。そして要するに僅かな合い言葉は、労働によって沢山の事物を変えることが出来る前に、それらの事物の幻影を持っているのです。

私は、神話的な全ての表象を、田園の宗教とか自然の宗教と呼びます。それは〈お伽話〉とは反対に、自然が克服出来ない不可解なものとして現れます。四季、植物の力の定期的な目覚め、天体の変化や周期は、その他の全ての変化を告げていますし伴っています。つまり動物の習性や移動、雷鳴、稲妻、彗星、食、暴風雨、火山であり、結局のところぞっとする全ての例外的なものです。泉も同じで、映し出されたイメージや餌やその他の反射したもの、森の闇や沈黙、それら全てが一緒になったものは祭の崇拜であり、絶好の機会の対象です。そして異教とか農民の宗教は、未だ沢山の形式で存続しています。復活祭は常に春とか復活の祭でしたし、これからもそうでしょう。聖体の祝日も常に花々の祭でしたし、これからもそうでしょう。同様に死者たちの式典も常に全てのもものが死に始める季節と同じ時点のものでしたし、これからもそうでしょう。反対にクリスマスは、春の祭として理解されなければなりませんし、枝の主日や復活祭よりも遙かに先行していて、太陽の帰還に関して最高の観察に基礎が置かれていなければなりません。その他の神話も、これらの全ての祭に重なり合っています。しかし、自然への崇拜がそれら全ての崇拜を齎しているのは決して明白ではありません。フレーザー(1)は『金枝篇』の中で、宗教の活動が鳥たちの歌よりも人間にとって決して自然ではないことを十分詳細に示しています。しかし、ここでの重要な問題は単純化することです。そして子供っぽいお伽話と比べてこの宗教に最も心を打たれた人物にとって、その宗教は大人の仕事と沢山の方法で結び付いていることです。ユダヤの復活祭は、家々の儀式的な掃除によって最初に行われます。四旬節の断食が説明しているのは貯蔵された食糧が目的を達していることです。子羊の血を貴重な泉に混ぜる奇妙な習慣は、水を澄ませるのを目的と見倣すやり方です。労働と崇拜の関係は何時も見抜くのが容易でないのを示すために、私は後者の例を引用します。ホメロスやヴェリギリウス(2)に見るように、動物たちの生贄でさえも確かに慎重さと清潔さの決まりがあり、そこから人間の食事は犬の食べる分け前と区別しています。しかし、ここでは既にもう一つの神話が異教徒の儀式と重ね合わせられます。一つの事例とか他の事例について誰もが見出すのは、この種の注目すべき機会であり、それらは未来の無い観念を解体するのに少しは貢献していますし、諸宗教が不条理な組織であ

るということです。

農民たちの祭というこれら全ての偉大な絵画において説明されているように、私に見える観念は〈自然〉を待たねばならないことであり、自然が望むように行い、異議を唱えず、天国も他の世界も望まず、超人的状況や私たちの好みに応じた進歩も望んではならないことです。以上は、信仰心に見出される服従の部分です。しかし私はそこに希望や信頼も見ますし、それらは確かに適応の印であり、健康の調節器です。というのも大人の状況を嘆き自然を告発する人間は、死に始めている人間であり、死ぬのを望んでいる人間でさえあるからです。

私は、宇宙的で労働とも結び付いている動物への崇拜を自然の宗教につけ加えます。というのも、ここでは既に命令する代わりに服従しなければならないからです。そして、動物たちの印を解釈する技術が猟師や飼育者や調教師の技術に結び付いているのは明らかであるように、牛や馬や犬が思考に多くを費やしているのも自然なことです。しかし、崇拜に固有のもので私たちの全てのものでもある思想は一つもそこに加わっておりません。動物たちには動物たち固有の英知を持っていて、計り知れないもので。そして完成された動物たちの姿さえも尊敬されるべきものです。でも、何よりも真っ白な雄牛に敬意を払うことに人は納得しません。全てがここでは謎です。そして人間たちが行うことを単純に考えて結論付けるには、精神にとっては大きな危険があります。牛の中でも最も太った牛を荘厳に散歩させているのを私たちに見せていた未開人は、この牛を私たちが崇めるよりもずっと早く信じています。この考察は、私たちに迷信的な習慣を行わせるあらゆる物語に適用されなければなりません。しかし、それは殆どが文法の問題です。というのも言葉が行為よりも曖昧なのは明らかですが、それでも私たちは言葉によって行為を説明するのを望んでいたからです。人間が自然を征服して進歩させるのは、指一本の移動では決して行えないと人は念のために言うことができます。そして以上が恐らく田園の諸宗教の鍵になるのです。昔の儀式が望んだのは、突然に大きな平手打ちを食わせた幼い子供の存在がなければ、如何なる境界線も打ち込まなかったことです。それは正当な証人を確認することでした。それは記憶を定めることでした。そして、その境界標は神（神テルム）であり、この神が苦痛を喜ぶことも人は良く言うことができます。これらの美化は同時に、それらの背後にある永遠のお伽話に依存しております。そして他の手の込んだ神話も又、隠れた理由と現れた理由があります。そして、人が驚かせたり驚いたりするのを望むこと、寧ろ教えたり学んだりするのを望むことは、ありふれたことです。（完）

（1）フレーザー（一八五四～一九四一）は、英国の人類学者・民俗学者で『金枝篇』の著者。

（2）ヴェリギリウス（前七〇～前一九）は、古代ローマの詩人で、長編叙事詩「アエネイス」でローマの建国を歌った。

田舎においては町に対立します。そして田舎の宗教においても都市の宗教に対立します。都市にとっての共通した特色は、自然を忘れていることです。というのも人間の活動は両眼を占めているからです。都市に生活するとは人間に依存することであり、人間に納得させることであり、人間に報いることであり、人間を恐がらせることです。自然の力はここでは夜警によって、肉屋、パン屋、配管工、行政官、弁護士、大尉、司祭に代えられます。そこに人はお伽話の魔法使いたちを見出しますが、あらゆる事物や行為を決める価値と結び付いている金儲け主義の制度によって、殆ど全ての謎をもっと良く知りますし、そしてそれを剥ぎ取ります。市場は私には都市の魂のように見えます。しかしながら切迫した必要性を考えるなら私は、交番や事物の職人が住居する能力を持った宮殿を無視したくありません。何故なら人間は、これらの限りない人間の集まりの中で人間を恐れ、そしてもしも人間の秩序を信頼出来ないなら、眠れなくなります。時には食べることよりも眠ることの方が切迫しています。ここに君主が現れます。そして市場の君主が彼を裁きます。もう一つの自然は自らを示しますが、それは人間の全てであり、そして政治的宗教が現れて来ますが、その完全なものにオリンピックがあります。しかしながら私はそれが天国から降りて来るのを望みません。私はそこに自然の根を探したいのです。そしてそれは難しくありません。政治的宗教は全てが記念祭です。それは家族や祖先たちの宗教です。この崇拜は普遍的でもあり、そして自然や真実の中で大変上手に築かれます。ここには無信仰者はおりません。同様に、自然の宗教の中にもおりません。しかし祈る人間が信じるものを知ること、望んでいることや期待しているものを正確に知ること、以上は困難なことです。元老院が神々の階段で亡き皇帝を立てて寺院建設や数々の祭を発令する時、それは未だ一つの要約に過ぎません、通常の場合になることや記念祭が習慣になることを考えなければなりません。

信仰心は、最も積極的な意味において死者たちと共に社会性が生まれることや、自分たちの一種の人生を取り戻すことを望んでいます。信仰心は、それらのしるしや記念祭に支えられていますし、忘却には反対する義務を自ら与えています。忘却は屢々信仰心よりも力があることを誰もが知っています。これには死者たちの間違いが少しはあり、私たちにも少しあります。死者たちの間違いなのです。何故なら、もしも死者たちがその忠告や事例によっても殆ど価値がなかったなら、死者たちと共に過去を保持したり、彼らの判断をもっと探究したり、彼らの困難な場合に委ねたり、如何なる望みを持つことが出来るのでしょうか。宗教はその時、形式としての礼儀正しきになるまでに細くなりますし、継続した約束もありません。しかし死者たちが二度目に死ぬとするなら、それは私たちにとっての間違いでもあります。そして、ここでは念入りに見詰めなければなりません。というのも親しい人の死という自然な思い出は、老衰という非常に強い印象を与えるイメージと死そのものによって、第一に恐ろしいものであり、私たちを馬のように怒らせるものでもあります。この働きは人が思っているほど重要ではありません。しかし取分け注意することは信仰心とは全く反対のことであり、それを乗り越えなければならないことです。というのも死者たちを泣くことも一種の方法としてありますが、それは死者たちへの侮辱でもあるからです。そこからは戻ることです。そして、それは確かに力強く美しくさえある死者たちの

イメージを呼び起こすための真の愛情です。大変に自然なこの働きは、大変に遠くへ行きます。何故ならこれらの人々に死や病気や高齢や衰弱のしるしを見るのは好きではないので、人はもっと強く、もっと平静に、もっと勇敢に、もっと不変に、結局はそうではない彼ら自身にもっと似るように想像する必要があります。それは文字でそれらを永遠に思考することです。しかし、それらと同じ原因によって、彼らがそうでないことよりももっと賢明であることを人は見て理解します。それは人がそれらを愛していると全く単純に言うことです。少なくとも私は、死者自身がそれらを大きくすることに気付くようにそのことに配慮します。何故なら彼らは最早そこにはいないからです。それは気分や不正や暴力や、もしも単に虫が生きている人間を刺したなら、その人が作るあらゆる渋顔によって感嘆が齎される大変自然な私たちの信仰心を不安にさせるためでもあるからです。その様にして私たちは、決してありもしなかった美德を敬っているのです。しかしながら、それは専断的なものでもありません。一方には勇気があり力がありました。他方には繊細さと慎重さと助言がありました。全てに美しい瞬間がありました。従って愛は生者たち自身に対する以上にここでは間違えません。というのも愛は最良を探しながら、結局これらの脈絡の無い影の中に現実のものがあるのを求めているからです。そして確かに、私たちが酔った人間のことを思考する時、私たちが思考するのは彼ではないのです。あるいは、もしも彼が他の人の影響を受け、導かれる儘になっていたなら、それも最早彼ではないのです。自分自身で探しても何も見付からないことはあり得ます。酔った前者は死んでいるのです。他の人の影響を受けた後者は存在するかもしれなかったか、あるいは存在するのを望むように再構成しているのです。その時の信仰心は検討し、模倣し、継続して行きます。

この教義が全てです。そして、コントにおいては十分にその原則を、人はそれ故に認識しています。「死者たちは生者たちに管理されている」。私はそのことが如何に理解されなければならないかを説明します。死者たちが管理されるのは最良のことです。つまり死は選択によって大きくなるのであり、死は選択されたものです。以上は進歩という主要な発条です。何故なら、もしも人間たちが常に不完全という同一の荷物を持っているのが本当であるなら、彼らが意図する規範も現実の人間よりもより良い価値があるのは本当であるからです。死者たちは超人です。そして私は、少なくとも家族の崇拜を重んじますし、その様なことは何処にもあることです。私たちの自然の神々は、大きくなって清められた私たちの死者たちです。卓越した人間たちで作品が残された儘なのが問題である時、その崇拜はその時には大衆のものになり、長く続きます。もっと適切に言うなら、根拠のあるものになります。しかし、その浄化の働きはそこでも行使されます。ユゴーに、か弱い詩や子供っぽい処があっても、私たちにとっては何でもありません。それは永久に死にました。反対に寛大で偉大で崇高なものが、自ら進んで行う選択によってそこに貯えられます。もしも詩人の詩に記念となるものを読むとするなら、最悪なものは選択しないだろうとあなたは良く考えます。大衆によるナポレオンは、真のナポレオンの姿ではありません。勿論、胃癌も真のナポレオンのものではありません。そして、レーニンを記念して崇拜する人々は半分麻痺しているから彼を見ませんし、落胆することもなければ、口籠もりながら言うこともありません。それでも彼らは正しいのです。何故ならそれはレーニンではないからです。偉大な人間たちとは思い出の中で、自然よりも偉大です。私たちが彼らの中に見るものは、彼らの最良と私たちの最良が同時であるということです。以上は崇拜の本質であり、そのことを良く考えまし

よう。

伝説は語られるに値することを、文字通りに意味します。そして記念になることが繰り返されるに応じて、その人物が更にもっと偉大になるのは明白です。そのことを人は致命的と考えることが出来ないのを、私は次に強調します。というのも致命的と考えることは、小さく考えて仕舞うことであり、減少し、攻撃され、負けることであるからです。その様な思考は誰にも面白くありません。偉大な人間たちは彫像であり、神々です。彼らは尊敬するに足る父たちであり、巨人です。ヘラクレスは怪物の狩人であり正義の味方であり無敵であり、地上から神々のいる天へ昇った人間の典型です。これらのことを信じた古代人たちの考えが、不十分であったと言うことは出来ません。反対に古代人たちは十分に考えていましたし、十分に思い出しておりましたし、十分に尊敬もしておりました。そして、ヘラクレスが哀れにも愛する者のように、あるいは足が不具者のウルカヌスのように、更にオリンポスの神々がウルカヌスを笑うように、神話が持ち続ける幾つかの特色に私は腹を立てたりしません。というのも、これらの偉大な人物たちは実際に人間たちであったことを思い出すからです。そして、それは彼らに似ている希望に目覚めることであるからです。このオリンポス山の宗教は、それ故にまさしく〈人間〉の宗教です。これを形に表すものは、更にもっと高く上がって行くことでしょう。しかし先ずは光輝いて美しいこの宗教の幾つかの特色を、注意して見なければなりません。（完）



宗教というものは、寺院や彫像や象徴物によって語られます。そして芸術と宗教は二つの別々のものではなく、寧ろ同一の織物の表と裏であるとの観念を、用心のために形づくるのは正しいことです。芸術としての諸宗教は屢々不可思議なものを与えますが、それは有名なスフィンクスに大変良く要約されています。エジプト人たちにとって狼の頭にいる神の如く、人間の姿も他のものの姿に混淆して見出します。あるいは人間の彫像は、腹部の神々とか仏像の何本もの腕のように、力や動物性の氾濫を表しています。これらの奇妙なイメージが大変に古い文明とか、単に現代の文明と異なる荒々しい文明と関係があるのは、もしもその人間に人間全体のあらゆる階級やあらゆる時代の全体を見出すつもりであるとしても、殆ど大したことではありません。オリンポス山の宗教は、混沌としていたり異常な自然の土台の上で、最早明瞭に浮かび出るだけです。それは競技者が異常肥満者とか顔を顰めた者とか、高齢によって不格好になった者たちの間で、規範とか模範と思われるのと全く同じやり方です。ギリシア芸術には、神秘的な処や恐ろしい処は何もありません。寺院にしろ人間にしろ、並外れたものは何もありません。全てがきちんとしています。人間の動物性は決して恥をかかせませんし、少しも恥ではありません。決して優っていなかった幸福の形によって、その特性である完成へ到達します。そこに自らを抑えます。これらの肉体美は、体操と音楽の調和を意味します。そのことが言いたいのは、足の指先から髪の毛まで彼らは全体が思想であり、意志なのです。しかし、これらの言葉に従って、激しい怒りや野心の声は決して聞かないようにしましょう。如何なる種類の不安も聞かないようにしましょう。頭の中での如何なる濫用も、その他の如何なる暴君の声も聞かないようにしましょう。もっと正確に言うなら、如何なる職業の人も、他の職業の人々に暴政を行わないことです。それ故に、そこには恥ずべき人々も高貴の人々もないのです。寧ろ全体が、部分部分の人々を統治するのです。それ故に足は、顔と同じように意味深いのです。それはギリシア人の顔が、殆ど表情を表していないことを時々私たちに考えさせます。顔は肉体と同じように、釣り合いが取れているものです。人は鼻の形で一種の鼻面をそこに見出しませんし、食料に合わせた口からも見出しませんし、上部が張り出した額からも見出しません。悲しみとか後悔とか、少なくとも反省によって現れる皺からも見出しません。況して現代人の顔においては、髪型とか服装の奇抜さが強調されることもなく、それは一種の反逆であり、過剰さであり、氾濫であり、結局のところ私たちが優れた人物たちに喜んで許している一種の暴言です。その上これらの性格は、実際よりも表面的であると私は信じます。そして、もしも人が悲劇とか喜劇を捨てて、要するに役者の役を捨てたなら、私たちのあらゆる顔がギリシア芸術に似ていることを容易に見出すでしょう。そしてロダンが、裸体の〈考える人〉で表現したかったのも、これらのことの一つです。そこには実際に、如何なる慣例的な表情も現れていませんし、それらの表情によって思考する人物が異彩を放っているのであり、いわば自分でメーキャップしているのです。しかし〈ギリシア人たち〉は、もっと適切に言うなら、人間と芸術を再発見したのです。何時ものようにここでは書かれたものよりも、より良く語っていたのです。

取分け〈自然〉の〈諸宗教〉において示されているのは、世界の力を前にしての服従と断念

です。それ故に、それに照応した諸芸術において人間の姿が動物の姿と混淆されているのを私たちは屢々見ます。そして、これらの象徴が意味するものは余りにも明白なことです。人間も動物そのものであり、自然の一部です。人間は自然から分離出来ません。自然の上で自分自身を勝ち取れるとは考えませんでした。ギリシアのヘラクレスやその他の神々が、人間の王を表しています。それは体操や音楽によつての王であり、政治的組織によつての王です。それは自由の瞬間です。そこでの人間は、有名な円盤を投げる人が大変上手く言っているように、主として人間に所属しているのです。

この宗教の聖書とも言える『イリアス』によれば、人間たちは全く単純に神々によつて導かれていると信じられています。しかし、そんなにも単純ではありません。神々も又、政治的均衡の法則に従つて、お互いによつて制限されています。そして人間に反対する全ての神々を持つ人間というものとは決しておりません。いや寧ろもっと近くを見詰めるなら、忠告したり助けてくれる瞬間と思えたのは神であるのか、あるいは戦友であつたなら英雄たちの想像力が何時も見付けるべき人間たちに、神々が非常に混淆されていることを人は気付きます。神々が変装し、大地を走り回り、時々乞食の振りをすることは神話の驚くべき特色の一つであり、それは今でも廃れていない箴言集に導きます。人間にとっての最高の価値は人間です。外見や服装は、人間の姿が原因で尊敬しても、決して騙してはならないことを人はもっと良く少しも説明しませんでした。異教徒やキリスト教徒が貧しさに出会うシャトー・ブリヤンの『殉教者たち』の一節を、私は何回も引用するでしょう。キリスト教徒が自分のマントを与える時に、異教徒はキリスト教徒に言います、「これが神だつた、とあなたは多分信じたのでしょうか」。キリスト教徒は答えます、「いいえ、私はこれが人間であつたと信じたのです」。この簡素な言い方の間には、私が知る最も美しいものがあります。人はキリスト教徒がどれ程異教徒に勝るのか探求しますし、人となつた神の隠喩が既に偉大な未来を持つていたことを理解します。

神々を人間の姿に基づいて示すのは、大きな間違いであることを一般には考えられています。この考察は、形而上学的であつて生理的ではない宗教を思考する一つの方法としてのしるしです。もしも外部的必然性と人間の足跡と諸情念に同時に依存しながら、宗教が人間の発明したものと理解するなら、民衆を導いた進歩を、そして民衆の伝説や芸術における価値として最良の評価に全て崇める狂つた宗教を、人は反対に課せられたでしょう。そして結局のところは人格への崇拜であり、今では普遍的崇拜なのです。私は今、大変誇張していますがけれども、神人同形説が諸宗教の根本的な間違いでは全然ないことに、恐らく人は気付くでしょう。しかし、数々の隠喩を理解する術を知らなければなりませんし、それが問題の全てです。（完）

私たちがそこまで達していれば如何なる宗教も虚偽ではなく、そして私たちが気に入ろうが入るまいが従わなければならない自然の力による偉大な観念は、まさしく如何なる人間の宗教によっても廃止させることが出来ないと人は既に理解出来ているように私には思えます。それ故に古代の自然の宗教は、一目見て余りに曖昧な絵画を形づくるように、他の宗教と混じり合っていることを思わなければなりません。ご存知のようにジュピターは運命に従いました。彼がトロイの壁の前で運命を齎す者を知りたいと思う時、人間たちにも神々にも決して依存されない金の秤を調べます。人間の自由と力から如何なる観念が生まれても、それらの人間の企ては盲目的な力に依存していて、一部分は事件の原因になることに何時も十分に対応していなければなりません。運命を考慮に入れるのは容易でないことを人は知っています。しかし、全てを運命に委ねることにまさしく夢中であることも、あらゆる人間は良く知っています。諸宗教は思想に満ちた身振りのようなものです。それらは芸術に特有のものである隠喩的言葉遣いの中で私たちの諸問題を生んでいます。諸宗教は終了します。そして、それらを的確に生むことによって私が示したいものがあります。そして、ある方法で諸宗教は彫像師が既に思考することが無くなっても、心の医師であることを人が理解するが如く私たちの思想を調整するものでもあります。

この様にして古代の自然の宗教は、ある意味では永遠であり、廃することが出来ません。そこから人が理解するのは、政治的宗教が自然の神々に、つまり大空や太陽や惑星たちや大地や海に取り込まれることです。ですからジュピターが大空とか大気とか光を元来指し示していないかどうか人は言うことが出来ません。それ故に、ある種の神話が太陽の数々の神話になっていることを証明しています。そして諸宗教に関係している幾つもの作品は、解決も無くその様な問題に溢れています。人が言葉や言葉に関するもの、それらの征服されたもの、植民地化、そして崇拝の混合を思考する時、諸宗教が錯覚していてもびっくりしません。しかし自然の中の人間の位置、人間の組織そのもの、そして人間の中の動物を知るための大きなデータであり、その他の混合を考察すると、諸宗教が何故錯綜しているのかを理解することに近付きます。死すべき人間は、全てが自ら管理されていると感じながら大変合法的に不死の人間によって、つまり悪徳も老化も病気も無く存在しているような人間によって、その人間を忘れることも出来ずにそうなることがなかったのは、太陽や四季や潮や植物や動物たちによっても管理されていたからです。そこから理解させられたことは、とりとめの無い考えをも集めるものとしての政治的なジュピターであり、海の神としてのネプチューンであり、以下同様です。変身を別にしても、そこでは人間と動物の古くからの混淆が生き残っています。そして、動物そのものは二次的な属性を屢々表していますが、その様にしてジュピターの横腹には翼があるのです。しかし他方では、政治的な神の祭壇上の動物たちの生贄は価値観の秩序と従属を意味していて、それは少なくとも自然の秩序から人間の秩序までの敬意に代わるものです。オリンポス山の宗教の絵画はこの混淆から生み出されたものです。それは全ての動物がぼんやりとしていて神々になっていたりして、天然痘のように厄介な人々でさえもある原始的な混淆とは大変に相違しているものです。この混淆は、既にインドにおいて生き生きとしていて活発です。しかし、この混淆は、ある意味でしか古くはないのです。

。その混淆は、それらのお話が私たちのお気に入りであるので、人間の本質においては今日的  
です。私たちの夢想は、アキレスの夢想よりも理性的ではありません。少なくとも私たちはそれ  
らのお話をより良く理解することが出来ます。

神託は既に、ギリシアの宗教にとって注目すべき特色になっています。そこに大変古い信仰の  
遺物を見なければなりません。そして部分的には理性的であるその信仰に従う動物の純粋な活  
動は、間もなく生じて来るものについての知性よりもより良いものを屢々教えてくれます。鷗た  
ちは嵐を教えてくれますし、鳥たちの移動は冬とか春を教えてくれます。動物たちの足跡は泉へ  
導いてくれますし、雌牛は食べられるキノコは如何なるものかを知らせてくれます。鳥の観察や  
生贄の臟腑さえも、政治的宗教の一部をなしているのを人は知っています。占い師たちはそれを  
余り信じていなかったことも知られております。およそ神託にも同じ疑い深さが微妙にあること  
に人は気付いています。ピュティア(1)は痙攣を起こす者です。つまり動物の最も盲目的な活動  
によって支配されている人間の姿です。人はその怒号を聞きます。しかしながら神託が常に曖昧  
であり、そこから政治的な見方に従属させられたものであるのは変わらない伝統でもあります。  
でも、最良のものもあります。というのもそれはデルフォイの神殿の壁に有名な公理を書いた哲  
学ではないからです。「汝自身を知れ」。反対にそれはソクラテスが自分の思想の規範を理解さ  
せたのと同じ宗教のものでもあります。隠喩に大変溢れている民衆の自発的な思想には果実が無  
くもありませんが、それを軽蔑し拒絶するのは最も愚かな間違いであると信じるように導くこと  
です。人がそこで真っ先に確実に失うものは人間の愛と、私たちの企ての発条となり、そして私  
たちの全ての思想の発条にもなる人間における希望です。私は、キリスト教革命が数々の神託を  
廃止したのであり、注目すべきであるが考察が不十分な進歩を示すためにしかここでは数々の神  
託に言及しませんでした。(完)

(1) ピュティアは、古代ギリシアの巫女で、アポロンの神託を告げた。

奇跡の問題においては、もっと曖昧なものが多くあります。大胆にも歴史を単純にしなければならぬ私は思っています。神託としての奇跡は大変に古い観念であり、それは物神崇拜に起因し、お伽話と同じです。つまりそれは子供っぽい神話と自然の力の〈宗教〉と同時に起因しています。私は子供の状況や、子供にとっての自然な間違いを説明したことを思い出しながら、労働することも無く手に入れた変化として私は奇跡を明らかにします。全ての定義と同様に、この定義は事前に推敲された諸観念によって引き出されます。私はそれが正しいと信じます。しかし、その定義を応用することが重要であり、もしもその定義がぎっしり詰まった主題において何らかの光を齎さなかったなら、見るのが重要です。この指導的観念によれば、純粹状態の奇跡はまさにテーブルの上にある食べ物を単に増やすことであり、そして水をワインに変えるように、少なくとも必要なものとか欲しいものに応えてパンや魚も増やすことです。それは常にミルクの泉やチョコレート山が見出される桃源境でしかありません。その種の奇跡は、私たちが人間として置かれている状況を知ることと全て反対に赴くものです。食べ物や甘いものが或る命令によって、子供たちとは別にやって来るとしか考えないのは、子供の精神にとっては自然なことです。反対に大人の観念は、私は十分に説明して来たのですが、それは全ての財産か労働を前提にしているものであり、お話は何も生まないということです。それ故に、人がお伽話を信じれば信じる程、全てを純粹な奇跡と信じます。それは常に過去のことであり、常に昔のことであり、常にお話なのです。私たちの夢はこの種の奇跡から生まれます。

現実として、もしも魚が欲しいなら、網を投げなければなりません。少なくともその時自然との出会いから捕れた魚は、奇跡的なことが行われたことになり得ます。そして、この種の奇跡は全然不可能なことではありません。私たちはそれを計算することが出来ませんが、何時も期待することが出来ます。金やダイヤモンドの採掘者や探索者にもこれらの好機はあります。福引きは、これらの好機を制度化した巧妙な発明でもあります。何故なら、もしも一人ひとりが相当の金額を与えて籤を引くならば、誰かが得をするのは確かであるからです。確実性と不確実性のこの混淆は、最も堅固な精神を悩ませます。そして賭け事の情熱は最も力が強く、永続性があるものの一つであることが分かります。しかし既に、賭けなければならぬのです。要するに、これとは別種の奇跡も労働の法則とは矛盾していないのです。従ってその結果は少しも不可解ではありません。もしも魚群や金塊の地層を発見したなら、当たり番号が他の番号と混合していたのであって、それらの番号から一つの番号が引かれなければならなかったのです。これらの奇跡はそれ故に、出来事と欲望との出会いが齎すのであって、滅多に無い出会いです。何故ならその現実そのものは、他の現実よりも最早珍しくないからです。網を投げるには魚の番号はどうでも良く、確かさは同じであって、確かな見込みはありません。もしも全ての出来事をその特異性によって理解したなら、それらの出来事が起こる前にはありそうもないのですが、起きれば直ぐに自然と説明がつきます。私はこの観念に固執しません。それは全ての人々や私にとっても非常に困難であるからです。その意味において奇跡は私たちの望みに依存しているのを私は少なくとも示したいだけです。一握りの塵は何らかの方法で、そしてこの出来事が特異であることを生む何らかの

多様性に従って用意された細かな断片を集めていますが、そこには如何なる興味もありません。

私が配慮するに相応しいと思われるのは、人が自然に言えるこの種の奇跡で、それは祈りや儀式や色々な方法と大変良く一致していることです。出来事が私たちに依存しない時、例えば雨は私たちが祈っても妨げになりません。もしも人がうまく行かなかつたなら、祈りが貧弱であったとか、神々の怒りが鎮められなかつたと何時も言えるからです。結局のところ、もしも人が固執しているなら雨は常にやって来ます。狩猟とか魚取りのように私たちに依存していることに関しては、もしも単に祈りを信じているなら、祈りが何かを変えるのは明白です。というのも信頼が生むのは人がより良く狙い、より良く求めることであるからです。もしも、少なくとも獲物の名前を口に出して言うなら、その狩猟は失敗すると信じる素朴な猟師の特別なものとする事例において、それは明白に見られることです。もしもこの猟師が不注意から規則を破ったなら、自分の家に戻って下さい。従って狩猟が失敗したということが起こるのも、信頼なのです。大変に単純なこの事例は、他にも沢山のことを理解させてくれます。その中で強く希望することは、成功を多く生むのが明白ですが、何時も僅かです。でも、希望が既に喜びであることは別です。或る意味で全ての情熱が宗教的であることに人は気付きます。ところで私はそこに戻ることにします。

私は今、経験の対象がその人間自身である奇跡を、人間の奇跡と呼びます。ここには大変重要な観念が隠されています。それは確信が人間の世界を導いていることです。私たちの情熱がここで考察されるのは又、私たちの労働や自然に対しての企てについての結果に関するのではなく、単にその人間自身についての結果に関することです。人間は、単純な模倣によって喜びから悲しみへ、あるいは悲しみから喜びへ移ります。彼は希望とか恐怖、怒り、復讐、絶望、感激に捉えられ、そして一般的には伝染病にかかったようにあらゆる感情に捉えられます。もしも人がその精神状態を、それらの出来事の主な原因と見做すなら、パニックは奇跡であり勝利でもあります。もしも同一の側に皆が身を預けたなら、その船は浸水を起こすこととなります。恐怖による浸水とか、あるいはまさに勇気による浸水も全く予見出来ないものです。人間は自分が思ってもみなかつた危険の全てに突然に身を晒します。彼はそれらの物事を別な風に見ますし、それらの人々を別な風にも見ます。彼は困難な行為を多少なりとも出来そうに感じますし、実際にその様になります。確かに確信によって病気になる人々がおりますが、それ故に確信によって回復する人々もおります。これらの奇跡は現代にもありますし、あらゆる時代にあります。私は、全身麻痺の初期症状を自覚するに到った病人と知り合いになりました。すると、彼がそのことを話した時、実際に本当によろめいたのです。かなり後になって彼は、リウマチで亡くなりました。眩暈は突然に病気になる事例であり、諸効果によって大変に良く生命に関わるようになり、そして全ての確信になります。人は倒れるのを想像するからこそ倒れるのです。そして狂っていると確信している人間は、やがてそうなります。共通した英知は危険な意見に対して絶えず闘うことによって、自らを訓練することが確信されます。しかし、もしもこの分析をもっと押し進めたいと思うなら、例えば人が言いたいこと、精神とか思想とかを斟酌しなければなりません。この観念は未だ私たちが存在した歴史の観点では明白ではありませんでした。

人はそこに止まることが出来ません。決して止まりませんでした。決して止まることが出来ないのです。外部の神々に対して批判的意見を行使しなかつた人間は一人もおりませんでしたし、

結局のところデルフォイ（1）の箴言に従って自分自身と相談させられなかった人間も一人もおりません。しかし、ここには困難が生じます。私は、怠けずに恭しくしないで信じ込みたくない人々のために書きますし、そこで彼らは独りでいると私は考えます。今は三番目の宗教が私たちの前に生じます。それは聖霊の宗教であり、中身の無い空想とか子供たちの家庭教師の欺瞞に最も良く似ているものの全てです。それは肉体の無い思想や真偽の確かめられない仮定に最も溢れています。最も空想的で、奴隷たちに最も相応しく、主人たちに最も必要なものです。正義の中では最も輝き、そして正義に対しては最良の武器になります。結局のところ私たちに最も近いものです。私たちを欺き、そして虐殺したものです。結局は勲章を授けられた枢機卿や道徳分野の大臣の宗教です。それは聖人たちの宗教でもあります。それは〈貧しき人々〉から〈歓待された〉司教の宗教です。つまりそれは私が最初の動きから全てを信じることであり、何も信じていないということでもあります。何も信じたくない、とは少なくとも私は言いません。私はもっと前進させられます。すると私は全ての人々の言葉を何も信じていません。私が自然に疑ったり、理解しようと思うことは、私にとっては少なくとも一つの言葉です。それは全てではないことを、過去の罪を謝る代わりに良く分かって下さい。全てではないのです。しかし、私は未来の方へ向かいます。私は正しいものを全て貯えたいのです。少しも人から好かれるためではなく、主人や奴隷たちのためでもありません。それは私にとっては全く独りで点検することなのです。そして、恐らくその意味で全ての人々にとっても正しいことなのです。（完）

（1）デルフォイは、ギリシアの古代都市で、パルナッソス山の南西麓にあり、アポロンの神託が行われた所である。

聖霊は怪しいです。聖霊は告発されます。宗教は罪ある人々への忠告者である、とルクレティウス(1)は嘗て言いました。そこから唯物論を用心することになります。この理性的見方によるなら、現実が進行して他のものになり得ないように現実は進行すると言わなければならないので、この薬には苦いものがあります。例えば戦争になるや否や、必然的な原因から生じる戦争に対して私たちは何が出来るのでしょうか。一人ひとりはそのようなもので、善悪の言葉は最早意味がありません。実を言うと、この頃の唯物論者たちは実際の原因や状況を大変近くからすっかり囲みながら、悪いものを変えたいと思う人間たちの中で最も大胆です。思考することと行動することの矛盾は、全ての教義の中にあります。厳しいジャンセニストは、救済は神の聖霊に規定されていると信じなければなりません。しかし、彼はそれでも自分の魂を救済するように大いに骨を折ります。これらの矛盾や困難から出発して、そこから他のことが発見されます。リセの哲学教師たちは恐らく、何か真の教義を発見して教える野心を持つでしょう。実際に教師たちは語彙を教えたり、人が言っていることを全て正確に言うことに帰着させられます。そのことは思いがけない結果に導きます。私は、この職業を良く知りました。私はそれが許されていたのと同時に厳格に行いました。先ずは聖霊に関する幾つもの逆説、避けることが出来ない幾つもの逆説を集めることは有益であると私は信じておりますし、それらはキリスト教革命以後や更にもっと昔からの民衆的思想の不思議で豊かな生産を説明しています。

知ることとは何ものかです。宇宙、風景、星々、人間たち、これらは私が知っている数々のものであり、私はある意味では私の裡に持っているものです。もしも私が知ることを止めたなら、それらのものは何時も何処かへ行って仕舞うことを私は良く知っています。しかしそのことも又、私が自分の裡に持っている知識です。私はそれ故にある意味では、私の裡にこの宇宙の全てを持っているのであり、その様なものが主体性に関する簡潔な観念です。そしてこの知識の全てが私の裡にあるので、私は他のものに隠れることが出来ます。このことを何も言わないことが出来るのです。そして、例え私がそのことを話したとしても、世界中の人々は誰も私が今の場所から見るようには見れませんし、その場所は私のものでしかありません。従って知覚とか学問とかあらゆるものの知識は、私と共にある私の秘密です。人々は一般的にはそこまで行きません。しかし、人々が所有している幾つかの思想は、彼らが望めば望む程、秘密のものになります。暴君もそれを知ることも変えることも出来ないことを、彼らは全て知っています。かくして一人ひとりの思想は自分の裡に閉じ込められています。それは彼のものである肉体の中であり、そしてそれらの思想が他者からは隠されているという観念を一人ひとりが持っています。生きて行動するのは私ですし、私は見られて認められます。しかし、思考し判断し決心するのは私です。私は私が独りであると認識させられます。この内面世界には意識があります。あるいは、もしも別な風に言いたければ、各人の思考、各人の精神、各人の魂があります。しかし如何なる魂で、何処にあるのでしょうか。如何なる精神でしょうか。私と一緒に散歩もするのでしょうか。胃のような器官なののでしょうか。

私は、そうですと答えたかったです。何故なら私の精神、私の思考、私の判断の全ては私がい



る処にあり、他の処には無く、そして人々が内臓の激しい動きによってしか私の心の中を見抜くことが出来ないなら、私の内臓に閉じ込められているからです。しかしながら、私の精神が胃のように私の中にあるとは決して言えません。何故なら私が見るこの世界は、確かに私の精神の中にあるからです。あるいは換言するなら、私の精神は確かに星々にまで及び、そして星々を知るからにはそれ以上に及び、更に思考するにはそれ以上の別の世界であり、別の世界に続けたいと思うのと同じ位に何光年も別の世界のことでもあるからです。もしも私の精神が一種の胃であったなら、私は肉体の中で事物を思考するでしょう。しかし実際には反対に、私は事物の中で私の肉体を思考します。それは事物の一部でしかないとは私は考えます。私の精神は寧ろ全体そのものです。そのことは明白でもなければ納得の行くものでもない、と私は良く分かっています。私たちが自分の思想のことを考えるや否や、拒絶出来ない冒険の中に這入ることを私は只指摘したいだけです。それは常に日常用いる語彙を説明することですが、非常に難しいものです。人間の状況を正確に描写すること以上に行かなければ、精神は私たちの肉体の中にしろ外にしろ一種の事物として表すことが出来ないように私には思われます。精神には高さも広さも深さも無いのですが、その全てを含んでもいます。例えば、精神は何キロメートルも沢山あると言うことが出来ません。そしてその何キロメートルに、望む限りのキロメートルをつけ加えても意味がありません。換言するなら自己は思考する者であり、小さくもないし大きくもありません。それは肉体の属性にさせられる儘になっていません。精神は思考するものである、とデカルトのように言うことから私は自分を良く守ります。というのも私は、長さも広さも深さもある肉体の一種のように精神を思考する危険を既に負っているからです。精神は、私が描写出来ない一つの機能です。私は精神が生むものを言えるのであり、そしてそれを正確に言うことが出来るのです。それは語彙の問題です。私はそれ以上の処まで行くことには用心します。

それ以上の処まで行くことがなくても、精神には限界が無いと言わざるを得ません。というのも精神は限界全体を思考するからです。それ故に限界全体以上のことを思考するからです。しかしこう言って良ければ、既にここには精神のもう一つの姿があります。私が齎すこの種の証拠は私にしか価値が無いと判断されます。しかし、他にも証拠があります。算数や幾何学は人間が生んだものです。数学全体の数列、素数、割り切れる可分性の性質は、あらゆるものにとっての真理です。人は同一であることを進んで信じないように決心します。しかしながら、この決心には率直さが無いと私は思います。十二の次の数字は十三であり、それが素数であることを私は知っています。かくして唯一のものであることを私は知っています。しかし、それを否定したい間は数字が連続したものであることを知らないのであり、十二であることや一であることを知らないのです。最も単純な事例がここでは最良のものであります。しかし、どんな人間も空間と時間が同一であることを知っています。でも、これらの思考が全ての人々の中で等しく発展されて行く訳でもありません。一人の人間からもう一人の人間へ、必然性という性質で共に伝達され得る空間と時間の特性があります。仮に疑いを広く知らせるために、この必然性には予め何らかの慣例があると仮定してみましょう。それでもこの慣例は、その結果がどんな人間にとっても必然的になるのは確かであると認めています（定義とか第一原理と人が言いたいようなものです）。それは精神が、全体において同一であることを仮定しています。そこには既に不思議な冒険があり、私たちに拒否出来ないものです。要約して言うなら、精神とは内面が主題であり、所謂主観性であると

私は言います。しかし精神は宇宙でもあります。つまり客観性です。それ故に精神を思考するや否や、精神は人間たちを危うく悩ませようとする筈がありませんでしたし、それは実際に起きたことだったので。 (完)

(1) ルクレティウス (前九八～前五五) は、古代ローマの哲学者・詩人。

宗教というものは眼に見えないものを閉じ込めています。一人ひとりの思想は屢々他人にとって大変に興味があります。しかしながら思想そのものによって眼に見えないものですから、それは自然なことです。如何なる宗教も、眼に見えないものが肉体の外を散歩しているのを閉じ込めますが、それも自然なことです。思想は肉体の中に閉じ込められないからです。全ての宗教は眼に見えないものが肉体の後に続いていることを仮定します。そして、思想家の真実の思想が（素数十三の如く）その点に関しては絶えず真実であり続けるために、思想家が破壊するのも自然です。聖霊の宗教は何時も他のものと混淆し、そして諸思想は肉体に無い感情が如何にして夢想という経験と共に結び付かなければならなかったかに気付きます。しかしそこで人が見るものは、死者たちを真の存在者として嘗て考えることが出来なくても、戻って来るということです。それに言葉の経験をつけ加えると、弱い方法でも遠く隔てて大きな変化を生んでいます。人は眼に見えないで名状し難いこの物理学を殆どその様に理解するでしょうが、それは最も遅れた未開人たちの物理学でもあります。以上の様に私たちはあらゆる発展において、聖霊の宗教を理解するためには十分な準備が出来ていると私は信じています。私たちは最も良く知っている幾つもの事例に止まらなくてはなりません。

ユダヤの民はヘーゲルによって聖霊の民と名付けられました。聖書や諸詩篇の権威はそれによって理解されます。この民の諸思想においては明らかに政治的宗教の混淆が行われています。ここでの〈神〉は〈偉大な祖先〉であり、眼に見えない無限の宗教として至る所にあり、全てを見て、全てを行っています。際限が無く名状し難いこの無限の対象は、恐らく何時もの砂漠の光景、そして果てしない丸天井と惨めなテントとの対象によって暗示されていました。しかしこの対照において、世界のイマージュは隠喩の状態に制限されていました。そして、常に聖書的思想が有限への蔑視を通して〈偉大な人々〉を求めています。反対に、人々の意識の中では最も小さくて最も惨めなものは、それでも謙遜や崇拜によって精霊と通じています。ここで注目に値するもので大きな結果にも値すると私に思われることは、無限の精霊と恐ろしい指導者との混同です。何故なら、混同そのものによって最高に価値あるものとしての精霊の観念は、世俗の力の観念を含まず不足しているからです。寧ろ追い出しています。しかしこの区別は全く近代的ですが、恐らく又近代的でもありません。政治は、精霊を政治の業務に還元する習慣を持っています。そして、ユダヤの宗教においてもこれが主要になっています。精霊は権力によって少しも小さくなりませんし、精霊は思うように行動し、その力は旧約聖書の創世記の中でぎらぎら光っています。この神人同形説はそれ故に、それ自体を自ら乗り越えますし、思考する力しか神の属性を留めておりません。その力とはヨブの儂い意識の譬えで押し潰すものです。以上のことから殆ど他に例のない服従があります。そして「伝道の書」の完全な軽視は、その軽視さえも軽蔑しています。如何なる価値も無いこの生活は義務によって続けられており、既に今ではこの民の力を生んでいて、最も目立たないものの中と同じであることを注意しなければなりません。偉大な大物に照らせば、その前では何も偉大ではありません。それが私たちに虚栄心の無い最も驚くべき真摯な事例を与えます。偉大さはここでは崇高であり、それは茫然とした幸福を与えます。用

心のために私は、精霊に関する幾つかの逆説を先ず分析するための手懸かりを手に入れます。私は私たちの状況と同様に、私たちの風習にとっても馴染みの無い回教徒たちによって再発見された一神教という、この稀有な例を理解することが出来ます。しかしながら世界中で最も良く読まれている本である聖書を生んだその偉大な観念は、結局のところ〈本〉であり、全てを可能にして全てを行い全てを理解する精霊のものではありません。しかし、それは私たちにとっては肝要な観念であり、精霊を敬わなければならないものであり、精霊には最も高い価値があります。勿論予測して言うのですが、最も壊れ易く、最も脅威となるものでもあると言いましょ。

それとは逆の方向へ向かう振動であるもう一つの観念は、最も驚くべき隠喩で、最も正確で、私たちの実際の状況に最も良く適応されたものによって、キリスト教革命の中で自ら発展して行くものです。要するに神の子キリストの力が、神の力に代わって行くのです。つまり死すべき魂と不死の魂の再興であり、有限と無限の魂の再興です。一連のこれらのキリスト教思想は素晴らしいものです。何故なら、少なくとも常に伝説という方策に従って、全ての伝説を自由に解放しているのはまさしく人間であるからです。そして、それは建築や絵画や音楽という表現によって解放しているのです。平等、解放、平和、人間性も又、そこからやって来ます。その哲学は大胆には発揮されず、不足しています。哲学はやっとの思いで行きます。全てが終わった時に、やっと到達するのです。ヘーゲルは言います、「ミネルバ(1)は黄昏時に飛び立つ」。美しい動きに私は耽る儘です。何故なら私はそれを少なくとも美しいと受け取っているからです。実際に宗教についての考察は哲学であり、些細なことではありません。というのも宗教のあらゆるイマージュは、習慣によって無言になるからです。従って十字架とは何であるかと自問するのは誰でしょうか。しかし、それは政治的力によって体刑を加えられたまさに奴隷のイマージュです。そして本当にキリスト教徒になるためには、恐らくキリスト教徒であることを拒絶しなければならないのです。(完)

(1) ミネルバは、ローマ神話の技術・職人の女神で、ギリシア神話ではアテナのこと。

私は前もって話します。ユダヤ教からキリスト教への移行について戻らなければなりません、ユダヤ教も確かにそれ自身で生まれませんでした。新約聖書は一冊のギリシア語の本です、古代の初期教会の教父たちは全員がプラトン学派です。オリンポスの神々の心象を越えた真実を見付けるソクラテスの思想を、大いに斟酌しなければなりません。それは良心に従って判断し、有用な善を解明し、形而上学とプラグマチズムの二つの深淵に学問を導きますが、結局のところ最初のものに代わって今では愚かな儘でいなくて、最後まで私の考えに従って精神を思考して判断するのです。少なくとも微妙でこやかで釣合いの取れたこれらの行為は、極めて明白に強制を拒絶しているので、民衆を動かすことは出来ませんでした。その代わりにユダヤの詩は、この若々しい自由を私たちの処まで熱狂的に届けましたが、それは騒々しく列を成していても力強いものでした。ルソーはキリスト教精神から非常に靈感を与えられています。彼は恐らくあなた方の気に入りません。記憶を辿れば私も何回も気に入りませんでした。しかし私がルソーを読む時、ルソーはイマージュを騙しませんし、大事な真実へ真っ直ぐに向かって行くのが私には分かります。ルソーは言いたいことを大変に良く言っているのであり、救済は少しも必要としていません。それ故にあなた方も彼の本を読んで下さい。

宗教は救済を必要としています。宗教が言っていることは力強いのですが曖昧です。近代的思想はキリスト教を注釈したり、隠喩的言語を解釈することよりもっと良く生み出すべきであるとは私は思いません。キリスト教的観念とは良心にとっての絶対的価値であり、それは同時に平等と慈愛を確立しています。平等は、神の広大な偉大さを前にしている神学者たちの眼には見えませんが、それでそのことが私を動揺させるものでは決してありません。私はユダヤの観念を認めますが、それは古くて当惑させる観念です。慈愛は、唯一の神を対象と見倣して、最も哀れな良心には神の恩寵によってしか愛の対象になりません。そしてそれは既に予備的であり、時代遅れの観念です。重要なことは価値観の移行と、同類の再生です。それらは大事な観念であり、それらの隠喩は何も変形されません。マルクス・アウレリウスは、全ての人間は同じ神の子であるから兄弟である、と言っております。それは全ての人間が思考するためには同じ可能性を裡に所有しているから兄弟であると、もしも私たちが言うなら、結局のところ幾何学の何でもない命題も一つの証拠になるのと同じことを言っているのです。ここで重要な観念とは、(メノンにおける)ソクラテスを手本にして幼い奴隷に質問しながら、私たちが親切や忍耐を身に付け、この人間の姿が大人であることの証拠を幾つも前面に出して信じなければならないことです。私の友人の教師たちはそれ故に、毎日何をしているのでしょうか。

ヘーゲルは言っていますが、キリスト教の価値は新しい価値であり、ご存知のように無限の革命が始まったのであり、革命に終わりは無いのです。それは果てしない〈主体性〉です。それは精霊とは別の姿をしています。というのも、一人ひとりの精霊は弱く、優柔不断であるからです。しかし、そんなにも精霊が弱いものであっても、それが精霊そのものなのです。例えば数列は学者に劣らず、無知な者にとっても無限です。神の精霊は全て一人ひとりの裡にあります。精霊の宗教は、この困難な方法で多くのものを、宇宙であれ政治的なことであれ、常に古代の神話を

混入しながら発展させなければなりません。そして、その哲学は別な風にはなり得ません。何故なら、一人ひとりの自由な精霊の閃きを配置するのが非常に高い処であったとしても、既にこの秘密の自由を世の中の必然性や政治的緊急さと妥協しなければならないからです。人間の中で最も自由な者の組立てや妥協は毎日用いられますが、彼自身や厳しい友人たちにとって常に憤慨が無い訳ではありません。その宗教の中に偶像崇拝の一部が残されていることには驚く結果になります。信じたり信じるのを止める術は大変に大事ですが、大変に隠されていることをモンテーニュは屢々理解させてくれます。要するに全てを放擲することなく信じなければなりません、思考することとは疑うことです。私はこれらの方法を少しは明らかにしたいと思います。私が行く処を少なくとも分かって下さい。（完）

もしも私が今、宗教の直接的表現である諸芸術に倣って常に、運動選手を聖者と比較したなら、注目するに値する相違に幾つも気付くことでしょう。ギリシアの精霊は体全体を動かしました。反対にキリスト教の精霊は体の後へ引くように見えます。いずれにしても人間が神なのです。しかし完全な人間は別な風に理解されています。一人ひとりの思想そのものは、一人ひとりが独りで認識するものです。その様なものが新しい価値となり、新しい聖所になります。人間は肉体の中で強いのか弱いのか、そんなことは殆ど構わないのです。救済しなければならないのは魂であり、肉体ではありません。同様に、人間は動物と区別されます。同様に、人間の思考は人間の動物性とも区別されます。従って外部の形は最早崇拜されません。石の聖者たちが表しているもの、そして宗教画が最も良く表しているものとは、顔付きに関する全ての思想をいわば戒めさせています。私は芸術のこの言葉を強調します。何故なら宗教の真の意味を見出すのはそこであるからです。先行したり創意工夫したりすることからは極めて無縁です。民衆の思想から余りに遠くかけ離れてついて行く神学者たちにあるのではなくてそこにあるのであり、反対に芸術家たちは生まれ始めた状態を把握していました。民衆の思想が芸術的表現を先行していたと言えるかどうか、私は知ることさえありません。でも、それは本当らしくありません。聖母マリアへの崇拜は聖母マリアのイマージュ、奉納物、祈りによって発展しました。その古代の物神崇拜が純化されていますけれど、全てに行き着きました。私たちは美的瞑想の体験を持っています。美しい物は飽きさせません。人はそこに沢山の意味を見出します。そして通常言葉で表すことが出来ない観念の世界を見出します。コントは、この無言の瞑想と素朴な祈りに一つの奥深い類似を見ました。人はこの観念について行くことができますが、模倣であったり見かけだけであったりする宗教のこの側面から既に疑わしく思っています。模倣によって人は音楽や絵画や大聖堂を自分勝手に崇拜出来るからです。全体としてはここで、饒舌で狂った意見を持つ暴君的力を私たちは感じますが、それは狂気よりももっと内容が無いものです。それ故に感情に戦いを挑まなければなりません。しかし用心して人間を捕らえて放さない行為が幾つもありますし、一人ひとり遅かれ早かれ本当の新事実を知ります。私はアテネの学校の生徒で非常に学識のある男の子と知り合いになりましたが、彼はそれ故に割り当てられた文章を復習して、恐らく敷衍しながら感嘆させているものにも全て感嘆していました。ところが彼は近頃新しく掘り出された力強い頭と向かい合って、美には何ものかがあることを考え始めていると私に言いました。彼は殆ど同じ冒険を私にも起こしました。何故なら私はいわば全てのための芸術に抵抗していたからですが、時々には自分に従わなければなりません。私が宗教を考察したのも全く同じ方法で、模倣したり上辺を取り繕ったりしないために十分に注意しました。そして私はそこに重大な真実を遂に発見しましたが、それは生まれかかっている状態の真実です。それは結局のところあらゆる種類の考えにとっての素晴らしい出発になりました。観念の始まりや最初の状態を民衆の自発的な表現に従って、建築や絵画や音楽あるいは詩であろうと、見出すものは何処でしょうか。要するに私は信じているのですが、それも一つの大変に古い観念であって、感情は全ての現実の観念の出発であるということです。少なくとも幾つもの感情を高めなければなりません。それは自由な思考によ

って、それらの感情を試すことです。換言するなら、二つに切る必要はありませんし、抽象的な言葉にそれらを見出すような観念を追う必要もありません。その様な観念は何ものも生みません。文化とはまさに教育とは別のものです。詩人たちにはそこに幾何学と同じ必然性があります。というのも遠くへ押し進める幾何学は、一種の抽象的疑問に到達するからです。そして、大変に良く理性を働かせる同一の人間においても屢々、感情が幼年時代や狂信的状態に取り残されていることに人は気付きます。その戦いは一つの事例のみならず、その姿を現しました。文明化しなければならないのは精霊ではありません。文明化しなければならないのは未開人です。憐憫と恐怖と怒りは危険な混合を生みます。熱狂は盲目です。それは虐殺や廢墟を生みます。それ故にこれらの混乱した感情から観念までに遡る道を見付けなければなりません。従って私が指摘したかったこと、例えば諸宗教が思想の始まりを見出して課していたことに、既にお気づきのことと思います。この動きには大変な注意力を必要としますが、今後は何故私が編曲者のような神学者たちに宗教の思想を求めに行かないか、お分かりになることと思います。家の片隅にある聖母マリア像が、精霊のお告げに関係している微妙すぎる滑稽な言葉よりも、私には遙かに興味があります。聖母マリアのイマージュには、父親の齎す荒々しい力を前にした母親の執り成しを可能にする観念があります。そして、注意深くて誠実な表情が真実の信仰心を見詰めているその像からは、恐らく女性本来の特性を別に感じますし理解するでしょう。処女性に関して言うなら、それはそれでもやはり力強い観念です。というのも冷酷な幾つもの事例によって、女性は男性の塔に引っ張られて行くような動物的な力によって極めて容易に捕らえられることしか見ませんし、それしか知らないからです。この転倒は余りに下品であり、上品な計画には事欠いていました。ところで抽象的観念であり、神学的観念でもある処女の母とは、只単に滑稽なだけです。反対に、喜びをもっと高い目的に従属させている母性の観念は、本来的に崇高です。人はそれを際限なく発展させることが出来ます。勿論、発展させなければなりません。というのは、もしもこの神秘が神のものであって、人間のものでないとしたら、私たちに何を望むのでしょうか。女性の復権はキリスト教革命の一つの結果であるという話に人は気付きます。それは常に平等でしかなく、個人的な意識というものへの過度の価値によるものです。しかし、それは画家や彫刻家の感情によって聖母マリアの文化が自発的に発展したこと、及びそこでは一種の新しい異教を疑う神学者たちの大きな響響に発展したことが同時に形成されたのは明白です。彼らは間違っていないでした。諸宗教の最も古くて未開の部分が、最良であることは良くあることです。

しかし同様に、それらのイマージュをめちやくちやにするのも容易ですし、その様にしてプロテスタントも生まれたものと理解して下さい。めちやくちやにすることよりも助けることの方が良いのです。しかし僅かな言葉で一言で言えば、イマージュをめちやくちやにすることは未来を憔悴させますが、それでもそれは純粹に哲学的な規範という古くからの実践に代わるものです。私は現在の女性の復権の一つの見本を見出しますが、それは抽象的であり、単純な直線に止まっていて、この問題の上方を通過して行くものです。多くの男性も女性もそのことを感じていますが、そこに頑固なまでに止まっています。発展しなければならなかったのはこの感情そのものです。要するに私たちは沢山の時間を無駄にしていますし、聖母マリアを前にして心から祈る者たちを思い止まらせるのを望む沢山の怒りのことを忘れています。その女性のことを考えなければならないと彼らと共にいますし、同じイマージュの前にいます。それらのイマージュは決して



挫折しませんでしたし、挫折したのは司祭たちです。でも、未だ私は全てを言っておりません。いずれにしても神学は、人間的に思考するのを司祭たちに思い止まらせています。そして一度ならず、それらの権威は宗教が大変な危険にあると判断しました。彼らが宗教を力の順番で整理したように、それは驚異です。教会の政治史は私たちにそれ以外のことは語りません。そして盲目的進行は恐らく、力強い自然の儘の感情から生じるのですが、はつきりしていません。それは感情によって自然に力を確信させられますが、納得することは出来ません。その観念は失われます。しかし偉大な観念である魂の救済は今後のことであり、今後の緊急事です。そして私が注目すべきものと思われるのは、その点について一人の司祭が言うことは全くの真実でもあるということです。というのは、不正、軽薄さ、権力、自惚れ、遊蕩、飲酒癖、怠惰によって自分の魂を見失うのは極めて真実であり、その司祭もそのことを言っているからです。そしてそれが今は本当であり、最新の判断という脅威はそこに何もものもつけ加えないと余り言いません。私は少し先を急ぎすぎているようです。

哲学的な特性や宗教の精神は、それらと同様に重要な造形的特性よりももっと容易に注意すべきものです。しかし正確な見方をしなければなりません。そして、もしも文明の分析においては少なくともオーギュスト・コントに従うなら、既に遙か遠くへ導かれるように私には思えます。カトリック教徒は普遍的なことを言いたいのです。そしてこの特色は全てのキリスト教に共通しています。人間世界の一部でしかなく、一人ひとりに覆われていないこれらの小さな宗派は無視されることでしょう。しかし普遍性は全てのものの中にあります。それは全ての魂を救うのが等しく重要であり、それらに共通している観念によるのです。幾何学者が普遍性としての三角形の理論を思考する時、全ての人間がその理論を知っているとは理解しませんが、人は全ての人に教えられることを理解しますし、全ての人に教えなければならぬとさえ理解します。しかしながら、この最後の考えは屢々思いやりが無いものであり、人は単にそれを試みるだけであったり、不注意とか明らかな愚かさを前にして余りに早く断念していると私は言いたいと思います。そして、ここでは上手く証明された観念の弱点が把握されます。少しも助けにならないものです。それは自明の事柄が拒絶されて驚くことです。類似のものを認めようとするのです。人は出来ないで諦めます。そして無知な者に対する学者のこの軽蔑は、人間を多く別々に分離しました。人が教えられる観念は十分ではありません。教えなければならぬ観念は、確かに余りに忘れられています。「石工たちにとっては、まさに経験に基づく幾何学で十分である」と言われています。ところがまさしく経験に基づく幾何学は、諸精神の平等を少しも示しません。反対に直ぐに理論的証拠が浮かび上がって来ることありません。かくして教育は最初と最後の識別によって本当の目的から逸れるものです。私は、人間と人間の間で作られるこの識別が本来的には一つの罪であるが、単に一つの間違いではないと考えるのが好きです。私はキリスト教の伝統に従って罪と名付けますが、この精神の忘却は精神にとっての間違いでしかありません。人は間違いを償うのと同じ様には償いません。間違いは、その固有な行為によって傷付けられた人間に戻って来ます。その罪はもう一つの秩序のものです。それは決して傷付けませんし、役立つことさえあります。それでもなお罪に違いありません。それらの結果の秩序とは別のものや、償う他の方法がある人間たちを信じさせる一つの理由です。兎に角、絶対的価値や魂への神の移動が教育する

ことの義務へ導き、逃亡することとは非常に無縁です。いわば障害を探求する義務を導くのは事実です。そのことは前もってその様な宗教が普遍的であるように見えます。そして人間性がその時は本当の社会として理解されます。私たちがこの無限の観念を求めるのは結合や交換や伝達の中であり、ついには引き出すことが出来る業務の中ですが、そこには無限の観念が少しもありません。人間性が従属するのは決して他人の人間性ではなく、その独りの人間がそれを生んでいるのです。犯人が人間であるかどうかを知ることとは私を見詰めることであり、人を見詰めることではありません。それを明らかにするのは私であり、人ではありません。それが人間であるというのは人間の義務ではなく、それは私の義務です。以上がキリスト教の観念です。これはまさに一つの観念であり、人が良く望むかどうか、そして人が始めるかどうかでしか確かめられません。もしも最初から信じないなら、人はその証拠を見出さないでしょう。

信仰と知性との関係には大変注意しなければなりません。コントは確かに疑い深い人の見本でしたし、〈模倣〉の文章について毎日考えていました。「知性は信仰に従わなければならない、先行せず、又少しも害するものでもない」。この種の公理は人間性に応用されます。そして、もしも国民や民族には常にある政治的諸宗教と比べたなら、人間性の中にある信仰には証拠が無いし、証拠にも逆行しているのですが、キリスト教の最も注目すべき特色です。そして、この観念は生まれかけの状態で考察するに適しています。というのも歴史の出来事において人間性を求めることに存する抽象的方法は、例えば村や小郡の結合が国の結合を齎すのに倣って期待することに存するのであり、それは大変に学識が深いと仮定され、少なくともその村全体に人間性を広げる人間が殆ど見当たらないと考える時、少しばかり狂っているからです。私は自分を騙します。主任司祭がいるので、決してそのことを疑う必要がありません。少なくとも彼は似た存在を高めるための方法が欠けています。でも、何故でしょうか。コントが言うように、それは彼が余りに証拠を無視しており、脅したり強制したりすることに余りに良く満足するからです。格言では、「知性は信仰に従わなければならない」と言っています。しかし、ここには従うものは何もありません。この間違った道を通る者はまさしく政府であり、人間性は単に置かれた儘で行われません。僅かな言葉による不当な適用によって、権威がその権力を取り戻します。「せねばならない」は自分自身よりも、他の者に言え。聖職者たちは可能になるや否や、強制することの間違いばかりを行っていました。それ故に、成功することが彼らを台無しにしていたのです。(完)

私はかくして精神的力という観念に自然に辿り着きました。それはコントが、キリスト教の最も驚くべき発明の一つとして十分に理性をもって驚嘆しているものです。ローマ教皇には信じるべきことを言う役目が与えられているので、その点では既に沢山の混乱があります。しかし精神的力を良く理解するためには、常に曖昧であっても世俗の力である衛兵や憲兵のものに対立するものの中に多くある、その独自の領域で行使しているものとして考える必要はありません。この点からすると精神的力が行使されることが出来るのはローマ教皇や聖人や賢者によるのです。そして正義の力強い真価で拒む人間なら、如何なる者でも構わないのです。この力は悪しき王の追放によって何度も行使されますし、悪しき王は結果として世の中のために奉仕するのを拒むことしか導きませんでした。ここでは既に、人は未来のある観念に気付きますし、それは反対することの中に既に混じっているのです。何故ならそれ自体で十分に力を持っている意見も、常に強制することには容易に納得して滑り落ちるからです。奉仕することを拒むとか、コントが言うように賛助を拒む全能者は、暴力によって素早く墮落させられます。私が言ったように〈教会〉は主義として決して強制してはならないけれども、強制を拒もうともしませんでした。しかし結局のところ、全く単独に精神を否定することは十分に価値あることの一つであると〈教会〉は教えていました。それは何時もダビデの言葉を敷衍させることでしかありませんでした。「神は私の岩である」。その点について間違いしか見ないのは何時も同じ者です。神が軍隊を送ると信じることには間違いがあります。神を信じることでは十分ではありません。もう一度知性を追わなければなりません。精神が王の中の王であることは厳格な真実です。もう少しそのことを理解しなければなりません。（完）

私は、これらの大きな特性を思い出しながら、神話の内容にもう少し近付きたいと思います。そして、新しい神々から古い神々までの関係にもっと近付いて検討したいと思います。お伽話と自然の宗教と政治的宗教が、精神の宗教と混淆されないということは決してあり得ません。人間は自分の肉体を放擲出来ないからです。しかしながら古い神々は、悪魔を発明することによって、最も精力的な方法を保存すると同時に制限されています。この隠喩には沢山の意味があり、恐らく何ものかに応えるものです。悪魔とは直接的ではない力です。この言い方は、私たちが欲望に専心する下等な術策や理由らしきものを良く説明しています。一寸見たところでは、奇跡には用心のため悪魔の罠が想定されていることを十分に注目すべきです。ローマの門での伝道者と魔術師との威信をかけた闘いが思い出されます。伝道者は助けも無く地面から立ち上がりましたし、魔術師も同じ様に行いました。しかし、十字を切ったのは魔術師でした。この事例について、キリスト教徒としての姿勢を細かく考えてみましょう。説明し難い不可解な出来事が豊富にあるにしろ、私たちの感覚にとって共通した幻覚からにしろ、そして取分け私が主要と思う理由から如何なる宗教にも決して奇跡には事欠きませんし、奇跡の物語が体験の対象ではないことを魔術師は知っています。このことにより数々の奇跡には証拠がありません。証拠になっているのは教義です。極めて正確に言うなら、それは驚異の中の奇跡に歪曲させる教義です。そこから〈教会〉の中で認めなければならないのは、奇跡に関する慎重さと経済的精神です。取分け悪魔の偽造です。それは全ての奇跡が偽りであると思うのを可能にします。

この異教の中で注目すべきことは、神々の一種の平等です。数え切れない程の幽霊たちに関する風習には無関心になることです。それは牧神でしょうか、それとも雌鹿でしょうか。それは水の精でしょうか、それとも単なる幼い娘でしょうか。それは変装した神でしょうか、それともまさに正真正銘の乞食でしょうか。それはメントールでしょうか、それともミネルバ(1)でしょうか。これらの外観には何の異常もありません。これらは全てが一目見て変わる事のない現実的な認識を引き出すことが出来るようなものです。私が子供だった時、雌牛の群の先頭を歩いていた大きな雄山羊を感嘆して見ましたが、少し怖くもありました。もしも私が、茂みを通して私を見詰める雄山羊の陰鬱な眼を見たならば、まさしく懐疑の中にあることになったかもしれませんでした。私の驚嘆とか恐怖が全て素晴らしいものになったかもしれせん。何故なら世界をあるが儘に良く見詰めるなら、決して私たちに騙しませんし、最初の外観が全て真実であるからです。つまり草かきを持つ人間が出現するのです。私はもっと良く見詰めなければならなかっただけです。しかし、恐怖のお陰で間違っ観察します。悪魔の観念の中にさえも新しいものがあります。それは私たちがあらゆる奇妙な外観を偽りと見做さなければならぬことであり、悪魔も同じです。そして、それは力と富によって悪魔が私たちに騙すように誘惑しているので、私の間違いの原因が私の情熱そのものの中にあることが知らされます。デカルトは〈天才悪魔〉と命名して、悪魔を『省察』の水準まで高めて決して軽視しませんでした。そしてこの仮定は、哲学者の全ての思想を徹底的な懐疑によって純化しました。それは如何なる迷信も抵抗出来ませんでしたし、神も抵抗出来ませんでした。デカルトは結局のところ、彼自身の精神の中にしか神を認め

ませんでしたし、外的な神を拒んでいたからです。そして私は、デカルトが夢を信じていたことに気がきます。その夢は哲学者としての彼の使命を告げていました。ところでこの夢が一つの目標とか、もう一つ別の目標を彼に示していたのは殆ど重要ではありません。兎に角、太陽や雪のように両方とも愛しながら、理性を引き出したのは事実です。この偉大な解放はまさに有名で、私は素描するに止めますが、迷信から理性への偉大な道に気付かせてくれるように私には思えます。それはキリスト教徒が邪魔されることなく、女たちの話によって僅かな時間でも歩き回ることが出来るものです。何故なら、これらの話は幽霊や作り話とも似ているからです。本当のように信じさせるものを疑わなければなりません。多くの伝説が私たちに言っているように、悪人や野心家にとっては至る所に悪魔しかおりません。従って符号による悪魔祓いには沢山の意味があります。その時に十字架のことを思考するのは、人間として最も高く模範となる者は貧しく、そして大物たちから軽蔑されて生きたことや、自分の美德そのものによって体刑により死んだことです。それは野心や欲望や悪意を消すことであり、悪魔のような全ての威光を美德自体で消すことです。もしも符号がその中に美德を持っているなら、その結果十字架で武装した悪意は、両手しか持たない単純で骨の折れる人間よりも威光をもっと強力にするに違いありません。それは確かに偶像崇拜です。符号は何時も符号でしかありません。でも、それは威光を消して仕舞う精神なのです。もしもあなたが司祭の教義そのものの中にそれを大きくして行ったなら、如何なる司祭があなたにそれを言っても構いません。もしもあなたがそれを大きくしなかったなら、その様なことは何も言わないのを私には分かります。それは司祭が、自分の教義だけが真実で人はそのことを考えもしないと信じているのです。しかし、それは古臭い魔法に引き下げることなのです。そこで司祭を引き下げることは大変に容易ですし、教会の精神を救済することも大変に容易です。何故なら、それは只の精神であるからです。

私はここで、議論するために確かな方法を明らかにします。それは実証的で、否定ではなく、ソクラテスの例に倣って論敵の党派に飛び込むことに戻ります。そして思考したなら、思考しなければならぬのを示すことに戻ります。両親の宗教を守っていた大事な友人が私に言いました、「ミサは何よりも無宗教のものではありません」。この言葉は心が惹かれない訳ではありませんでした。それらのイメージは、人が行う習慣に倣って全てに威光があり真実があるからです。だが、ミサの対象になっているものに出席するだけで救済されると考えている者は、確かにミサに騙されます。そして、もしも言葉による美德を信じたなら、更に騙されます。符号というものから乗り越えなければなりません。私は司祭にそのことを言うように、まさに強制するでしょう。勿論、お金持ちや権力者にお世辞を言う人から私は立ち去るでしょう。私は彼自身のこととはどうでも構いません。確かに私には十分な思いやりも何もありません。だが、人は全てを行うことが出来ません。私は古い貝殻を残して行きます。それらは外見でしかないのです。しかし、若者たちに関しては、彼らの乳母の信仰に従って全ての力を押し出します。若者たちがその中で間違えていることを、私は彼らに良く示さないかもしれませぬ。何故なら私はそんな信仰を信じていないからです。反対に私は、若者たちが信じているものを考える手助けをするでしょう。常に愚かさとか、自分自身のものとか、他人のものからも抜け出なければなりません。そして確かにキリスト教徒の愚かさも、何よりも同様に愚かであり変わりありません。しかし愚かさは英知にとっては重大で、キリスト教徒も同じです。愚かさは英知よりも自然で、人間の姿であるとさ

え私は言います。そして、それは十分に歴史が証明していることです。宗教の全ての意外な出来事において救済するのは、まさに精神であることを私は少なくとも指摘したかったのです。今、弱き人間を古くからの物神崇拜へ立ち戻らせるには、悪魔が司祭や枢機卿たちの美しい外観を使用しているのは自然なことです。私たちが騙すには宗教を使用することが、悪魔の概念の中では理解されています。人間の弱さに関しての余りに明白な考察によって、符号を信用したり物質的な力を敬う人間は公正に偽善者と呼ぶことが出来ます。反対に、権力を何時も疑う人物であるジャンセニストは、福音を説く魂を見失う危険を負うのを自分自身で思う処まで行きながら、絶えず悪魔的な符号への悪魔祓いをしています。彼はそこに雄弁を身に付けているからです。そして、そこに喜びを見出しているからです。この警告は、聴罪司祭によってジャンセニストの説教師にも与えられました。しかし、この説教師は福音を説くことを自分に禁じました。政治的な人間からジャンセニストの言葉を理解させるのに役立たないような人間まで、説いたのは一人もおりません。しかし、最早信仰が無くなって以後、世界には誠実なものが何かあるのでしょうか。

(完)

(1) メントールは、『オデュッセイア』の登場人物で、テレマコス of 助言者。ミネルバは、ローマ神話で技術・職人の女神である。

神話よりも寧ろ倫理的ではあるけれども、私は序でにこの微妙な問題に触れてみたいと思います。この問題そのものを前にして、率直になるのは困難です。先ずは楽しくありません。そして更に、考察そのものための糸口を容易に見失います。数々の状況を失念します。一つの判断を行う術を知る時に、少なくともその問題に着手する者は誰もおりません。言い換えれば、躊躇が戻って来て、如何なる進歩も利益も無く行われる非難は幾つもあります。すっかり明みにされる公正な証拠が望まれます。何故なら誰もが自分自身に対して極めて寛大であるのと同時に、極めて厳しいのを感じる事が出来るからです。友人とは、最良の打ち明け話出来る相手ではありません。友人を傷付ける考えは幾らも私たちにやって来るからです。友情がそれらを抑圧して、敢えて言わないだけです。そして、もしも友人や母親や兄弟に対して気高く美しくなるなら、それは全て悪いものではありません。それ故に、恐らく決して再会することが無いのに打ち明け話出来る相手を求めたり、その人の前で勘定を払う考えは結局のところ自然なことです。勿論、情念や利害から離れて孤独でなければなりません。でも、殆どお目にかかれません。そしてお目にかかった時には、その実践は既に幾つもの困難があるに違いありません。というのも思考したことや間違いを敢えて言うことは、屢々そこで自分を解放して自由になる一つの方法ですが、勇敢に恥辱に立ち向かうためには常に良いことではないからです。至る所で乱行を行う司祭は、好奇心を消した職業上の習慣にとって何よりもこの実践的問題からより良く逃げ出します。かくして、更に罪を見ながら信用出来る妄想を抑制していたように少なくとも私には思えます。ここで私が注意すべきであると思われるのは、極端な巧妙さです。それは告白した者や弁護士や公証人の巧妙さのように、自然に信仰告白を単純化したり短縮したりするようになります。ある段階の不安が一つの罪でもあります。そして悪魔の罠であることを見分けるためであっても、緻密さを多く必要としません。宗教の核心は人間の構造に同意した田舎の生活の中にあります。つまり一般的な詩や行為の中にあり、それらは常に最も力強い悪魔祓いであり、これからもそうでしょう。熟考は夢を純化してきれいにしますが、行動は夢を消します。

決疑論(1)は大変に馬鹿にされていますが、それは正義です。でも、全てが正義ではありません。告解を行うことは行き過ぎることがあるかもしれませんが、重要なものを持っている一種の真実を少しは明らかにしたと私には思えます。私たちの良心そのものは第一には外見です。何故なら、それらの情熱が容易に私たちを納得させるからです。主観的な精霊の宗教は人間内部の救済と支配を直接的に狙っていて、それらの意図を細かく観察して、最初の動きから率直さを乗り越えなければなりませんでしたが、それは全てを許すものではありません。戦争の体験は、人間たちが自己の内面的矛盾を通して容易に進歩しないことを理解させました。私が知る限り、司祭たちは皆と同じ様に率直に振舞っていました。しかし、ローマ教皇ベネディクトゥス十五世は、現代の政治家たちよりもより一層人間的に振舞いました。その上、司祭たちやローマ教皇が、多くの人々のように自分に引きずられる時、私は醜聞がある処は見ません。それは彼らを人間と見做すことです。単なる人間です。疑い深い人は時々、神の人ではないものとして司祭たちに近付きます。それは疑い深い人にとっては大変に面白いやり方です。反駁することは全ての人々

にとって何ものでもありません。それを理解しなければなりません。そして私が理解していると思うのは、宗教においては生き生きとしていて、大変に風向きの良い思想の部分があるということです。それはその宗教を、そしてその宗教と神の同じ掟によって神までを、乗り越えて追い越すことしか出来ないのです。

この思想の活動は混淆されています。情熱と混じり合い、そして同一のものによって役に立っています。その代わりに少なくとも私たちの合理的な思想は、まさに困難な事柄に勝てません。でも、根拠も無く思考する限り、合理的に思考することに困難はありません。意図を管理するものは何も無いのです。そのことは殆ど私を前進させませんが、私は偉大な思想を蹂躪する危険を負っています。それは個人の自治とは別ものでしかなく、政治的権力がそれに対して残酷さと共に獲得されますし、今日も相変わらず同じです。何故なら政治的権力は集団の激怒を耕して、その中で生きているからです。私は詭弁家たちを良く嘲笑したいと思います。私は何ものにも尊敬しないと誓ったからです。そして私は、全てを検証することを強く望みました。しかしここには私が気に入った一つの話がありますが、それは私がサント・ブーヴ(2)に見出したものです。フロンドの乱(3)の終わり頃に、軍隊がパリ周辺で活動していましたが、良くご存知のように住民のお陰で生活していたのです。ポール・ロワイヤルの大修道院は脅されていました。二、三人の年老いた決闘好きが隠遁していましたが、古い兜と火縄銃を再び見出しました。教会の中に雌牛と村の農民たちが集まります。壁には監視所を設けます。その時に決闘好きの一人は恐れを抱くに至りましたが、彼は弾丸を撃つて良いか、と厳格な良心の指導者であるド・サシ氏に照会します。駄目である、とド・サシ氏は回答しました。そして音を出すだけで満足しなければならないとのことでした。盗人たちを追い払うには、被害を出さない空砲の音だけで十分だったのです。ここでのあらゆる戦いの機会としてお互いに戦うのは、防衛に義務があるからですが、暴力を拒絶することでもあります。そして、その解決は全く素直なものです。その問題が考えられるのとまさに同じように素直なものなのです。ド・サシ氏は既に数々の困難の中にいたのかもしれませんが、何故なら恐れさせるために火薬を撃つことは見せかけであったからです。これらの巧妙さは屢々滑稽に写りますが、それらの単純な解決も恐ろしいものです。そしてその躊躇いが、手を下した動きに止まらずに別の効果を生んだ時には既に何ものかになっているのです。

精神は外見だけで満足することが出来ません。精神が目覚めると直ぐに、自然の儘での自明の思考全てが恐らく悪魔の罠であるとの観念に従って、全てを批判します。今度は彼の番になるこの信念は、信念そのものを破壊しなければなりません。何故なら悪魔が何も出来ず、何ものでもないやり方で思考することが重要であるからです。更に、神に従わなければならない思想は、主観的な分析を前には持てません。何故なら如何なる聴罪司祭も犬がやるように、上の者の力を恐れて従うのを告白するのを強制されても構わないからです。それには何の美点もありません。如何なる内面的な強制も無く愛によって従わなければなりません。つまり自由な選択によるのです。そして、これらの品位がキリスト教の公教要理の中にはあります。神が精神であり宗教が精神であるや否や、服従しか見ない政治的精神の疲れを知らない努力を無視しても、人はそこに導かれます。以上は如何にして、その観念によって私が補助的なものと呼んでいる精神の神や私たちの思想の内面的証拠から、各人に最終的決断や自分自身についての判断を必然的に取り戻されるに至るかです。彼がそこに持つかもしれないのは、誠実さの中の多くの恐れです。そして商



人の慎重さの中の多くの貪欲さであり、勇気の中の恐怖であり、あらゆる美德を実践する中での怠惰です。しかし信者は誰もその点に関して、神を騙すことを望むことが出来ません。神が満足しているか否かを知ることが出来るのは彼だけです。何故なら神が私たちをその秩序の虚飾で覆い隠すために大きな雲から現れる時、そこでは既に外見だけであり、贖罪司祭が現れても疑わしく思わなければならないと言うからです。私は神学的見地から語っているのです。そして子供っぽい信仰に貴重な観念を見出すのが私には気に入っています。その他に何をするのでしょうか。思考する仕事とは外見が同じであっても、真実を再発見することです。例えば太陽系の全体図の上で、惑星の運動を理解することは大変に容易ですが、もしも実際の天空を起点にして、その図を少しも忘れずにいたなら、他にも多くの困難があります。それは空が回転しているのであると、古代の天文学者たちの間違いを先ず受け入れることとなります。同様に、詭弁家たちは最も醜悪です。外的行為とその結果は、秘められた理由が認識されない限り、既に如何なる価値も無いことを、彼らの注意や私たちの注意を後者の間違いに基づいて導いていました。プラトンが『ゴルギアス』の中で、地獄の鬼たちの重大な意見によれば権力者や王たちは裸のように見えると私たちに言う時、プラトンは既に多くのことを言っているのであり、この隠喩は終わりの無い数々の解釈の機会を与えています。しかしそれを理解した者は、それ故に信じません。文字通りに裁きにあつて彼らは、裸のように見えるのです。同様に心の中を読む神はそれ故に自らが、鋭い両眼にも見えない証拠と一緒にあるとは思いません。そんなことは外見上のことであり、先ず注意を注ぐ最初のイメージであるからです。いや、そうではありません。彼らがお互いに理解したのは、最終的な判断を下す理性と情熱の内的な点検です。何故なら、私たちはその時に重要なことを知っているからです。それは如何なる栄光も外部的な赦免も、恥ずべき思考から私たちをきれいに洗ってくれませんし、それは全ての者にあつても大変良く隠されているからです。その他のことは外見でしかなく、知事のお話に過ぎません。

私たちは決して知事が悪人であつて欲しくありません。知事は治安もやりつけています。しかし、私は知事から身を守ります。私は知事が言っている言葉を信じません。それ以上に彼を信じません。何故なら、彼は何も信じていないからです。ここでは伝説が私に教えてくれます。何故なら申し分のない知事であるポンス・ピラトは、イエスに次のように尋ねたからです、「真実とは何であるか」。そして実際に真実とは、彼の成すべき仕事ではありません。もしも諸事情を議論しないで理解することに専心するなら、まさにこの話はきっぱりと司法上の間違いになり、キリスト教を遙かに飛び越えている無言の学習の一つになっています。もしもこの学習が正しいのなら、寓話に反論を述べるでしようか。そして、如何にして虚栄心の強い人々がおべっか使いたちによって操縦されているのかを理解するためには、狐たちが話していることや、渡り鳥たちが狐たちの言葉を理解していることを信じなければならないのでしようか。私が宗教について考えたことを尋ねた一人の砲手に、私は答えたことを屢々引用しましたが、その答えは私には正しいように思います。私は彼に言いました、「それらはお話ですが、何でも無い細かな点にまで重要な意味があります。寓話のように比喩に富んだ言葉です」。その砲手はこの答えを追いかけました。その表面の皮を削りました。そして本当に信頼のある労組員になり、削るべき表面の皮以上のものを既に見出していましたし、これからも見出すことでしょう。（完）

- (1) 決疑論とは、良心問題を判断する倫理神学の倫理神学の一部門。
- (2) サント・ブーヴ（一八〇四～六九）は、批評家・作家。近代批評の確立者。
- (3) フロントの乱（一六四八～五三）は、王権の伸長に反対した諸勢力の内乱で、高等法院と貴族のものがある。

これは注目すべきことです。というのは大変に単純な事物は、精霊の宗教というものが権力者たちに反対しているとは決して言われていないからです。シーザーを印してあるデナリウス銀貨で、シーザーが表されなければならないことを私は良く理解しています。そのことは軽蔑が無い訳ではありません。そうです、それ以上のことがあります。その点からすると精霊の宗教は、政治の宗教と対照をなしていますし、自然の宗教とも対照をなしていて、常に権力者たちの前では平伏させられています。ここでの特徴は数えきれず多くあり、そして全てが一致しています。神の子イエスも又象徴です。しかし、この子は労働者の息子で、家畜小屋で生まれます。多分、キリストが生まれた時に入れられていた秣桶の言葉は、牛用の秣桶であると言いたいのですが、教会の枢機官や司教たちにとってその意味は失われていて、大変に上手く命名されているのです。人となった神も最高の価値を持っていて、二人の盗賊の間に挟まれた十字架ではなくなっていました。これらの偉大なイマージュは、神学が何も出来ませんでしたし、殆ど何ものでもなかったことを明白にしています。但し私が解釈するには、大変に細かくそれらの表徴に従っていたのですが、迫害されたキリストが取分け忍従や死の意味を教えていて、ついには苦痛の真価を教えていたことを言って私に手紙を書いたキリスト教徒たちから私は何度も立ち直らせてくれたのでした。この神秘神学は新しいものではありません。古い自然の宗教は春の祭、つまり復活祭によって何時も説明していたのは、生き返るには死ななければならないということです。この観念には大きな影響力がありますし、当然注意すべきです。勿論、常に自然の必然性に立ち戻るしかありません。そして普遍的生命への目覚めは、確かに死や老化に対する一種の慰めです。しかし、この神秘神学には精神のものが少しもありません。諸宗教が混じっています。そして私は、諸宗教を解きほぐすのが有効であると思います。宗教の最も高い目的そのものは、自然についての見方やその帰還ではなく、寧ろまさに人間における精神への崇拜と諸価値についての点検です。それは自然を風景の状態に制限して、政治的な偉大さを平均化することです。後者の仕事には抵抗を見出しましたし、それは私が指摘して明らかであったように、キリスト教革命の主要なものです。知事は何でもありません。そんなことは全て言われていますし、繰り返し言われています。只、単に個人的人間が自分自身の内部に全ての価値を持っている訳ではなく、間違った偉大さへの公然たる軽蔑によってしかその評価を高められないのです。さもなければ大工の息子であるキリストは、何を明示するのでしょうか。もっと先の頁で、私たちの全ての岐路にあっての気高い体刑のイマージュは、何を明示するのでしょうか。秩序において美德は罰せられるに違いないのです。その様なものが観念であり、それはまさに人がそこに見詰める悲しみに値します。そして私たちのこの観念は、大多数の聖人たちによって何回も繰り返し言われています。そしてそこに、もしもキリスト教の樂園を、勝者たちが受け入れない異教のオリンポス山の神々と比較したなら、幾人もの権力者たちを良く忍び込ませるでしょうが、余り強くありません。異教のオリンポス山とは力を賞讃している言葉です。そして、ギリシアの彫刻はその点について言いたいと思うことを素晴らしく良く表しています。キリスト教の彫刻も同じ様なものです。何故なら外面的にはそこに押さえつけられているからです。人は自分の魂を貧困によてしか救済されません。そ

の様なものが教訓です。司教たちは強くそのことを言いますが、お金持ちたちは強制的にそのことを聞かされます。その様なものは神話的言葉の力です。それは数々の注釈を無視して、何時も同じことを繰り返し言うことです。

今は何を明示するのでしょうか。一方では、権力はそれが何であろうと精神を腐敗させます。つまり人間の裡にはより一層貴重なものがあるということです。この観念が書物の中にあっただろうか私には分かりません。何故ならここには数々の政治的なものが話したり書いたりする、全ての言葉が外見を発展させるからです。福音書の精神を持った貧しい者たちについて、もっと良く読むと精神の中に貧しい者たちがいるのですが、何を人は言わなかったのでしょうか。勿論、あなたはその注釈を見抜いています。人は精神の中で貧しくしていることが出来ます。つまり自分にとっての貧しい者たちの善を守ることです。彼らのためにそれを管理することです。そして他に弱者の思想を守ることです。私は両耳を激しく動かして泉に戻りますが、それは至る所にあります。キリスト教のイマージュへ至る所から出発します。キリスト教の記念物へ至る所から出発します。提出された規範は権力者ではありませんし、富裕者でもありません。神は人間の価値を教えるために、富裕者にも王にも変装しませんでした。全くその反対です。神がそれ自身の力を自ら制限していたと言いながら、私はあらゆる言葉も決して強制しませんし、それが神であることはそれによるのではないと明らかに理解させる機会を与えます。そこには新しい観念があり、既に十分に発展しています。何故なら神の力に従い、神の力を崇拜しなければならない、とあなたは繰り返し言われるからです。しかし、それは当惑させる観念です。自然発生的な神話によって身の程を思い知らされる観念です。何故なら私はこの言葉を理解したいと思うからです。この言葉が意味しているのは、力は自然のものであり、そして古い自然の宗教の神であるということです。その段階では本当のことです。外的な自然は限りなく人間よりも力があり、そのことを知らなければならないからです。そして既にそれを諦めなければならないからです。その様にして人間は嵐や火山に驚嘆出来るようになって仕舞います。そうです、驚嘆するのです。しかし高く評価するものではありません。何故なら尊敬すべきものは何も無いからです。そして私は一トンのものにも感嘆しなくなるでしょう。何故なら一グラムの極めて微量のものでも量るからです。一トンのものも大地と比べれば何ものでもないからです。それでは大地とは何でしょうか。ぴったりと合った測定によって科学は、私たちが古い神々を降ろすのを手助けしますし、私たちはそのことを良く感じます。しかし科学は、新しい時代の神である精神を降ろすことが出来ません。科学は全ての測定によって、その神を大きくしているからです。それらの測定は、精神を前にすると全てを小さくします。一光年は既に普通の一単位でしかありません。

現代の偉人を良く知りたいと思う人々は、デカルトがこの一節を大変上手に飛び越えて、権力のある偽の偉大さを非常に良く思考していることがお分かりになるでしょう。それ故に私は、それらの価値を保持し比較しながら、西洋の神話に倣って私たちの西洋文明を予言して権力者の価値が降ろされるのであると言います。この豊かな遺産を発展させるのは私たちの番です。そして、もしも未だ全能の神のことを人が私に話すなら、それは異教の神であり、通り過ぎて行った神であると私は答えます。新しい神は弱く、苦悩に満ちて、侮辱されます。それが神の状態であり本質です。その点については策を弄してはいけません。そのイマージュについて思考して下さい。精神が勝つとか、権力と勝利、近衛兵と監獄、ついには黄金の冠を手に入れるだろうとは決し

て言わないで下さい。そうではないのです。それらのイメージは大変に大きな声で話されます。人はそれらを変造することが出来ません。人が持つのは茨のある冠です。そして、もう一度言いますが、それは何を意味しているのでしょうか。

私の考えでは、偉大な観念は政治的争いにも政治に止まっています。勝利を収めた力は、如何なる段階でも決して思考の力や正義に適った力にならないだろうということです。如何なる力にも正義はありません。戦争はそのことを十分に示していました。しかし、もっと遠くを見なければなりません。力への服従は何時も必要となるでしょうが、力への尊敬は何時も間違いになるでしょう。多分、唯一の間違いでさえあります。そして大変良く言われるように、それは精神に対する間違いです。全ての人間の悪に、人間は反駁しなければならないと私は理解します。それらは恐らく本質的な喝采の結果です。「結局のところ王が正しいのだ。文明と法の守護者なのだ。正義の軍隊なのだ」。そして、木製の十字架の先頭にいるのです。十字架に架けられたキリストのこの偉大なイメージは、それでも私たちに知らせています。

全ての権力者たちは等しく許せるものではないのです。人間は、嵐やその他のもののように、それに一番良く折り合いを付け、自らを守らなければなりません。従って私は普通選挙を悪いとは思いません。国民投票や労働組合やインターナショナルも悪いとは思いません。これらは権力者たちや彼らが行う悪を制限するための手段です。隠者たちでさえも葉で出来たベッドを自分で作ります。そこで彼らは地面の上よりももっと良く眠りました。私は自分を雨から身を守る如くに、王たちから自分を守ります。しかし人間の生活は厳密に言って、それによって前進させられませんでした。きっかけさえも攔めません。何故なら葉のように整えられたこれらの全ての権力においては、どうにかこうにか私の頭以上に、極僅かな真実の価値も無いからです。私はこの骨組みを崇めるつもりはありません。同じ様に余り信用もしていません。腐れば直ぐに崩壊するでしょう。その様にして暴君も腐敗すれば、私の上で直ぐに崩壊するでしょう。でも、他人によって支えられる暴君は、君主の姿を取ります。少なくとも私の好意を期待しますが、暴君が手に入れることはないでしょう。

この苦い真実を私は全て理解しているのでしょうか。それを実行に移しているのでしょうか。いいえ、移していません。その反対です。もしも民衆の叫びが、芸術という神話的な言葉によってその姿を私に投げかけていなかったなら、私は見ることもさえしなかったでしょうし、敢えて見詰めることもなかったと認めます。何故なら、まさしく私は司教たちを少しも信じていなかったからです。そして、誰もが実際に彼らを信じていないと私は気付いていたからです。私は、十字路の広場にある十字架や、子供と一緒にのマドンナたちや、高齢な聖人たちが、大変に険しく大変に貧しい様子をしていて美德を持つ驚嘆すべきイメージとなっている理由を自問しなければなりません。ベートーヴェンはそれと同じものを歌いました。そして、そこには既に神話の見本があります。それは神話そのもの以上に快活に運ばれるものです。私は、一人ひとりが音楽に付いて行く如く、神話に付いて行こうと思いました。何故なら、全ての人が音楽には付いて行くからですが、音楽が何処へ行くのか知ることがありません（ロマン・ロランはそのことを知っています）。その代わりに彫刻や絵画のイメージは、何処へ行かなければならないか大変良く表しています。そのことを大変良く表す哲学的思考が音楽には少しもありません。人は殆ど全て

を証明しているからです。そして同様に壊しているからです。それ故に権力者たちは哲学を愛します。私は寧ろ宗教を熟考する時には、ヘーゲル風に哲学を定義しますし、只それだけです。しかし私は、それを如何にして理解しているのかも十分に説明したいと思いました。思想家たちのテキストを熟考することは良いことです。しかし一般の思想について、つまりお伽話や寓話や神話について熟考することは、注釈者たちからではなく、無言の作品そのものから靈感を得ることさえすれば、既により一層確実なものになります。それはまるで恰も人間の作る形式が、出来るだけ自然な身振りで私に話をしていたかの如くです。その時の形式は私を騙しません。私はその人間を信じます。それは私が自分に許す信仰の全てです。しかし私は彼の隙も窺います。何故なら彼は術策を弄るからです。諸芸術の中に私は彼を繋ぎ止めます。思考することとは、人間と共に歌うことです。そして、そうであるとして、あなたは何を望んでいるのでしょうか。(完)

異教と対峙する中で、キリスト教の正確な絵画を完成させるために、そして人が一方から他方へ影響を与えることでより良く足踏みをするために、私はこれから観念そのものからこれらの研究の基礎までのものとして示せる一つの観念に戻りたいと思います。しかし、それは私がまさに再発見するのを考えたものです。それは労働という観念です。異教の古代では、労働が行為の前提とされていた次のことによって英知はありませんでした。それは奴隷が思想家やプロレタリアの暇な時間を保証していたのです。自由な人間の力は戦争や快樂に使われました。その様にしてブルジョワの精神が形づくられました。それは下僕の観念によっています。下僕は、服従する人間の観念程ではないので、少なくとも道具によって大地や水や火を動かすのに忙しく、筋肉が疲労した人間であり、次のことが大変強調されていました。極端な力に導かれた労働は、何時もそうですが、観念を抑制して人間を愚かにします。それに反して実際の労働というものが欠如すると、私は現実に対して言うのですが、話や実体の無い証拠で結局は納得させることから、自然の宗教によるあらゆる形式を奇妙な理屈で飾るまでの術を発展させながら、他の方法でブルジョワの魂を見失うのに協力したのを人は余り気付いていませんでした。そしてこれと同一の観念は、納得させる術が純粹状態で示されるので、著しくブルジョワである司祭の精神によって殆ど至る所に覆われているのです。イエスの門人たちは職人でしたが、その親方はイエス自身のように網を放って置くように説得して、長鉋も放って置きました。彼は使徒という素晴らしい言葉を生みましたが、それは例外なく全てのブルジョワの仕事を決めています。そこから教訓が引き出されるのは、両手の仕事で形づくられたものは良いのですが、言葉の仕事にまで高めることが最良であるということです。

私は、この研究の子供っぽい神話に関する第一部で、如何にして精神は事物との出会いに強くなるか、如何にして精神は純粹な思想で瘦せるのかを説明したかったのです。私はこの観念を力の中で描きません。何故なら、この種の文化は常に両手の仕事に結び付いているのであって、経験の中で再び身に付けられたものではなかったからです。私は、職業としてはブルジョワですが、多くの人々と同じ様に一旦可能になると労働者になるのが楽しみです。しかし、二つのものを余り一つに集めませんでした。この観念は、権力や富に対する確かな軽蔑に支配されている考察によって生まれると、殆ど直ぐに福音の中で死んで仕舞いました。何処かを通して人はその観念に背きます。何故なら人は自分を乞食にするからです。そして、その乞食は他人の仕事で生活しているからです。その上、説得する術や襤褸着を纏っていても、その雄弁によってブルジョワであり、その雄弁は博士の縁無し帽子と同じ種類のものなのです。「百合は働かないし、糸にもならない」。これは思想ではありません。「鳥たちは少しも働かない」。これはブルジョワの思想の見本ですが、子供っぽい思想でもあります。反対に燕によってもお分かりのように、鳥は超過分を放置せず、飛行のための莫大な消費を回復するために全く正確に到着しますし、食料を獲得する一種の労働の見本であるからです。有名な映画（自由を我らに！）は、主人と労働者が工場から一緒に逃げ出して、二人の放浪者による楽しい冒険の始まりを私たちに見せています。私は道中の彼らを見ながら自問しました。「彼らは、他人の労働で生きることがなければ遠くへ行け

ないだろう。それ故に必ず他人を説得するとか騙すことになる。そうだ、彼らは全くのブルジョワである」。乞食になる連中は、死に行く連中になることしか出来ません。そしてこの観念は、幸福は死後のもう一つの生活の中にあるという別の観念に結び付きます。

私は先ずこの奇妙な観念を検討したいと思いますが、それは決して私の処に来ないことを私は認めます。この生活には労働がありません。それは浮き浮きしたお祭りのような夢想です。その夢想は、私が注意したように、子供のものです。ここでは曖昧な思い出しか無い子供っぽい神話に倣って、この生活は未来よりも寧ろ過去の中にあるのです。他方、不死は政治的な観念であり、追悼から生じます。息子とか弟子とか召使いとかの敬意に満ちた思いに従って不死は、生きる者たちのためよりも寧ろ死者たちのためです。人が死者たちのことを今でも話したり愛したりする欲求以上に、死者たちの幸福をその時考えることはありません。楽園は、偉大な人間たちのオリンポス山と楽しみの中のものが集められて創られています。分離された魂が、形而上学的観念によって更に明らかにされます。人はここで如何にして形而上学的観念が神話に譲歩したかを理解します。何故なら肉体は楽園の魂と再び一緒になるに違いないからです。そしてこの虚構は、純粋な精神の観念よりももっと賢明です。それは私たちが肉体の中にしか精神が無いことを意味するからです。しかし他方では、労働の終焉や完全に暇な生活は、肉体と同じ観念と一緒にでは順調に行きません。その上、労働の無いこの生活は既に異教のオリンポスの神々のものでした。如何にして信心深い、つまり愛情深い追悼が醜悪な様相ではない純粋なイマージュを求めているかを私は示めそうとしましたが、それは私の考えでは楽園的な数々の心象を十分に説明しているのです。しかし、人間の理想は嘗て何もやらないことであつたと結論付ける必要もありません。追悼とは反対の観念は、もう一つ別の楽園という虚構の中でも力強く表しているように私には見えます。別の楽園とは地上のものです。アダムとイヴは何も生んでいないことを私は良く理解しています。それは常に浮き浮きして楽しいものです。アダムとイヴが現世に合理的に止まることが出来なかったことも私は理解しています。無為についての旧約聖書の箴言がそのことを良く示しています。神は彼らに、額に汗してパンを手に入れるように告げますが、この評価は古代社会では大変に自然なブルジョワの観念を強力に解釈します。

私はここで、この観念を通してもう一つの生活を評価しなければなりません。それは私が指摘したように大部分が時代遅れの宗教のものです。キリスト教はそれをイマージュとして保持していますが、私たちには観念として抱くように導いています。楽園がこの世での節制を補っている快樂の場所であるというのは、キリスト教的には真実ではありません。そして未来の生活で、より良く酔うために飲酒を断つという観念は、キリスト教の神話においては全然ありません。反対に、そこにいるということは、永遠と命名されたもう一つの人生が、肉体の人間にとっては単なる動物である人間として驚くべき喜びを持ちます。例えば、まさに今よりももっと残酷に復讐する観念で敵を許すのは、村の最近の聴罪司祭の眼には間違いであり、罪ですらあります。何故なら、楽園にいながら地獄を見ているからです。他人が地獄にいることを喜ぶのは絶対的に慈悲に欠けています。そして許すことの幸福はまさしく楽園の幸福であり、人はそれが出来得る最良のものをここで許す時に手に入れたのです。要するに下劣な喜びを制しながら獲得される報酬は、これらの喜びからも解放されることです。それは神学であり、哲学的でもあります。そして人が力の宗教に再び落ちることから生じる精神の宗教を非難したくなる、非常に間違つたものを一



度は注意するようになるでしょう。何故なら、あなたが奉仕で失ったものを百倍にして返すのは肉体の王であるからです。しかしイエスは、人が従う儘であったなら何も返しません。イエスは、人が委ねたものを取り戻すことには、最早何の欲望も無いことで報います。その次にあなたは次の言葉を尤もだと思えます。「私の王国はこの世のものではない」。これには直接的な意味がありますし、大変に明確です。精神は、外国貨幣では報われないと常に言っていることです。そしてこの思想は、もしもあなたがそれに従うなら、楽園や死の観念は直ぐに綺麗になることでしょう。何故なら、人とはその時にお金持ちや権力者や閑人や美食家や人を馬鹿にした者や、結局のところその他のどんなものにも勝者になるだろうと考えることは許されませんし、永遠の人生は決してその時代になく、つまり策謀や企てや成功から成るものではないのが見えて来るからです。人生は永遠です。つまりその時代の外部にあるとも言われています。そしてダンテの神話は、立派に聞こえない者には何も言いません。何故なら、楽園の喜びは精神のものであり、そして真に価値あるものの熟考の中とか、別な言い方をすれば、素晴らしいものへの驚嘆の中に存するからです。以上によって、現世の愛が動物の卑小さも無く、結局は愛される対象を知って恍惚となっているようにしか、つまりそれを望み、それを既に愛したようにしか最早表していないと人は理解します。少なくとも素描されたこの絵画は、人間がそこに自分のイメージを認めるためには十分なものです。何故なら、ここでの闘士は富も権力も決して期待しません。そして彼の報酬は第一に、決して両方とも望まないことにあります。彼の幸福は、素晴らしいと思える者、全ての人々がそうあることを望まれるような者に感嘆することにあります。完全で普遍的な真理のものを何か知ること、そして全ての子供や大人の裡で、これと同じ力を愛し敬うことの新鮮な喜びもつけ加えましょう。殆どそこには偉大な理由に生きる人間の楽園があります。そして、この報酬は実際にはまさに他の人生であり、時代から抜き取られたものです。これによって時代を獲得した者からは何も取り除くことが出来ません。その様なものは、茨の冠をつけたもう一つの王国です。それ故に、イメージには少しも違いはありません。イメージが意味するものを人は間違えることが出来ない、と私は言いたいのです。人はイメージに決して反駁してはなりません。何時もそれを説明しなければならない、と私はもう一度言いたいのです。

私は、その前の楽園と同じ虚構によって間接的に近代化された労働というこの観念に今は戻ります。何故なら無為な生活という観念は、そこでは否定されているからです。私が注意したいことは、先ずはブルジョワではない新しい神を誕生させながら、そして仕事の親方たちを敬っている沢山の主人たちによる自発的な工夫によって、キリスト教の素朴な神話がこの無為の観念に打ち勝とうと努めていることです。乞食などはありませんでしたし、それは慈愛を呼び戻すことで説明するものです。しかし、労働する修道士たちはおりました。労働の本質は常に祝福されていましたし、今でもそうです。それは他者を養う人間性の側面への敬意と見倣されるに違いありません。しかし、この観念はぐらぐらして頼りありません。というのも聖職者たちは、この観念を全く理解出来なかったからです。「重荷に就け!」。これは『回想録』にあるナポレオンの言葉です。ナポレオンは、荷物を積んだ男を通すために、狭い小道に並ばずにいた一人の夫人に、その言葉を言いました。それは美しい言葉ですが、既に隊長の言葉であり、彼にとって他人たちの労働には、何時も一つの方法しかありません。下の者を敬う観念は既に、下の者のこの観念によ

って運が良いものにされています。しかしながら、それは新しい神が大工を生んだので、西洋の現代の神話には無いものです。強力な神と大変良く結び付いた一人のアラブ人が、確かに神の観念を軽蔑しますが本当に神であり、匏層の中で成長することに注目して下さい。神学者たちは、十字架上の人が全く下の神ではない、というこのことを大いに強調します。ここで私たちは天啓宗教の曖昧な点に接します。そうであるとしても大変に難しいように見えることを、私は言わなければなりません。（完）

私たちは精神から全ての観念を引き出します。でも、それらの観念から如何なる事件も経験も引き出すことは出来ません。その意味では自ずから自分自身でしか天啓はありません。ところが他方で私たちは、全てがそこにある私たちの精神を糸のように引き出すこともありません。その様に生み出された観念には殆ど何時も力がありません。反対に一つの機会、一つの良き事例、一つの偉大な言葉が時には私たちを救済しますが、何時もではありません。そしてその様にして新しい思想への出発が与えられます。かくして人は教育者や協同組合員や社会主義者になり、ついには何らかの伝播者になるのです。それ故に真実が一人の人間とか一つの事件によって、私たちに啓示させることが出来るのは本当です。証明はされませんが、寧ろ私たちを感動させたり証拠へ導いたりします。ビエンヴニュ神父はジャン・ヴァルジャンに正確で劇的な事実で、何らかのものを啓示しました。新しい観念ではありませんが、寧ろ大変に古い観念であっても信頼の出来る重要なものです。恐らくそれを人は先ず考えましたが、信じることはありません。人間の精神に関する実際の歴史は、この種の出来事から創られますが、良く連結された一連の連続した理由は決してありません。そうでなくとも正義と平等と博愛やその他のものの全てが、きっぱりと証明されたことでしょう。そして恐らく如何なる時代でも全てが発見されたことでしょう。もしも人が良く求めたなら、物語や寓話や詩に全てを見出します。しかし現実には、それが見出されても直ぐに失います。それは社会主義と同じで、百回見出されても百回失います。そうしている間に征服、移住、労働制度、政体、革命によって全てが変わります。それは、謂わば観念の巣窟を生む数々の状況が不意にやって来ます。観念はその時、この世界で大きくなり、そして走り回ります。

これは歴史があるということです。そして、あらゆる問題の中で歴史家の精神は、主要な創造者や決定的な状況に再び持ち上げます。それはまるで、それらの観念が大河のような水源を持っていたかの如くです。何事にも真実と虚偽があります。何故なら、ある意味で歴史は全く何も証明しないからです。寧ろ私たちは、歴史に人間劇の足場を表している一つの観念に関心があります。歴史は私たちに真剣に思考するように促します。宗教的精神はそれ故に自然に歴史家になりますが、当然のことです。しかし、もしもその様な事柄が起きたことの証拠を少なくとも人が引き出すなら、歴史の濫用があります。何よりも過去のこと、前日の出来事とか、証人になる時に至ったことさえも正確に知ることは決してありません。証拠も又非常に稀薄なものです。しかし、例えばパリサイ人のイエスが言ったことは、彼が言ったのだから真実でしかないと考えることは滑稽です。もしもそういうことだったなら、誰が心配するのでしょうか。誰も自分自身しか決して信じません。そして、イエスの伝説が如何に創られているのかはどうでも良いのです。私たちが認めている真理の顔に私たちを投げ込み、多くの人々が認めて広げていたことを私は十分に示しました。そのことは、如何なる状況も無視しないで発展すべき何らかのものを、更に発見する希望と共に、この伝説を新たに一読するように促しています。私にはここで二つの有名な謎が、それらの例として役立つことでしょう。

最後の一時間の労働にも、他の時間と同じ様に賃金が支払われます。この点に関して人が大目

に見ることが出来るのは、聖書の原文が悪く変えられているとか、この種の思想が僅かな注意力にも値しないと言うことです。人はそれを可能にします。その時は他の本を何冊も読まなければなりません。そのことは何らかのものが期待されていると推測します。そして誰も人間の歴史を全て軽視出来ません。それ故に、もしも福音書が更に私たちを教育したなら、もしも私がこの伝説に強い印象を受けて符合した表現に気付いたなら、私はもう一つのテキストに注意するでしょう。しかし、私はそのテキストに挑まなければなりません。テキストは、テキスト自体のことは話さないでしょう。どんなテキストも死体であり、スフィンクス(1)の頭です。進んで謎をかけるのですが、それらの謎に人はその価値を理解します。何故なら人は、それに頑固になって執着するからです。それは如何なる思想も自ずから行かないのです。それ故に私は、労働によって計算されない報いが不公平な、この報いの面前にあります。全てのものがこの世の中では特別なものであることを、人は確かに私に理解させたくないのです。何故なら、そのことを私は知っていますし、誰もが知っているからです。この乏しい外見は破られなければなりません。しかし、私は何を発見するのでしょうか。正確な交換や業務としての計算には、絶対的に価値が無いことを私は見出すことでしょう。良く理解して下さい。交換には正確な制度は役に立たないと私は言いたくありません。正しい骨組みが役に立たないとも私は言いたくありません。その価値は喜びと苦しみとの計算の中に決して無いと私は言います。それは人間にあるのでしょうか。そうです。それは普遍的に鳴り響いているのでしょうか。そうです。何故なら、それは飛ぶための労働を計算する人間であり、その結果が危険を負うに値しないと見出す人間であるからです。前者は一人では立派であると言われません。敵が強くて十分に武装されているからと言って、殺すことを自分に禁じる者はおられません。単に気楽で自分を楽しませる人を愛する者もおられません。この推測は小石のように斜面を下って行くことに戻りますし、換言するなら機会が良くなるや否や裏切ることに戻ります。これらの事柄は偉大な人々の不在により、ぞっとさせられます。ところで偉大なものとは何でしょうか。真に価値あるものとは何でしょうか。確かにそれは自由な活動であり、デカルトが言うように寛大なものです。というのも人間は計算というものを無視して人生が如何なるものであろうと一つの原因で人生を危険にするからです。そのことを私に証明して下さい。直ぐに私は評価しますし、感心します。人がお金を稼ごうとしないで稼ぐ時、お金には清廉になり危険も無かったことを私に証明して下さい。その時には、私は少なくともその人間を認めます。

私はヘーゲルに倣って言いましたが、精神の宗教は結局のところ主体性の宗教でした。それはその時、良識にしか価値が何も無いということです。あるいは良心からの活動が唯一のものであるのと同じです。それはその人にとって全ての計算は自由であり、全ての高利の計算も自由であるのと同じです。それでは公平な主人は、私に何を望むのでしょうか。それはもっと先見の明がある搾取者でしかありません。もしもそれが労働力を維持して女性労働者を何時間も確保するためでしかないとするなら、子供たちを哺乳するために工場に託児所を持つのは、私に何を与えるのでしょうか。それには憤慨します。何故なら、ここでは人間は高価な動物として扱われているからです。反対に辛くて割りの悪い仕事は、人間が目的で手段ではないことによって、賃金も上げられます。この様にして真の価値が明らかになりますが、恐らく求めて無駄でも、常に求めていたのです。人間嫌いはそれを決して求めない、と言う人です。それ故に彼はそのことを大変良

く知っています。ぐらぐら揺れて消えることのない観念であるこの真の正義は、内部の正義です。それは内部の必然性と一緒構成されなければならないことに注意して下さい。そして真の革命というものは、外部の必然性、労働組合、賃金、労働時間にかかっているのです。勿論、その目的は常にどんな人間も自由な見方、自己の克服、内部の精神生活が許されていることです。そして、その目的がそれらの革命を助けているのです。さもないと富裕者たちを手なずけたり、最初の機会に背くことが決まり切ったことになるでしょう。そして判事は十二時間の間と、多分全てを言わなかった一時間との相違をそれ故に消し去りましたが、判事は何か重要なことを言っていました。何故なら、それは人が容易に忘れる何らかのものであるからです。私たちの通常の状態は、背くことにあります。使徒ピエールの恐ろしい話を思い出して下さい。「鶏が鳴く前に、お前は三度私を裏切るだろう」。もしも有名な背教者たちが毎朝この端書きを読んだなら、そうかもしれません。ここで示されている観念は人が毎日背いているものである、と私は言いたいのです。しかし十の裏切りは一つも正当化しません。そしてこの観念を思い出すことが、神秘的な啓示になるのです。ギリシア人たちの神であるこの力は、その啓示には必要ありませんでした。競技者よりも明らかなのは何でしょうか。更に泥棒よりも明らかなのは何でしょうか。（私はこの言葉をクローデルに発見しました。）しかし優雅で靈感のある行動、私はここで正確に話しますが、根拠が無くて必然的な計算も無い行動で、それと一緒にになった優雅で靈感のある状態、それらがお互いに認めている優雅で靈感のある判断力、それら全ては非常に不確かで嘲笑されるものです。でも、そこに戻って決して方向を逸らせた儘にしないための精神のものよりも、確かに多くの勇気がなければなりません。この意味では、精神の宗教は神によって示されたと言われなくてはなりませんし、もしもあなたが可能なら、最良の意味を発見して下さい。

私の二番目の事例は、困難な物事をそこに委ねることに存するこの精神の裏切りに既に沢山の場所を預けています。無花果の木の寓話が重要です。イエスは喉が渇いていました。一本の無花果の木に近付きますが、無花果の実はありません。イエスはその木を呪うと、直ぐに枯れました。そして語り手はつけ加えて言います。無花果の実がなる季節ではなかったのです。極端な考えは不器用で愚かな模倣者のものである、と推測することは大変に容易です。それは全くの孤独に陥ります。イエスは何一つ産まない出来の悪いその無花果の木を萎れさせました。それは、私たちがやるしかないフランクリン(2)の知恵の水準では正しいことです。そして良き労働者に対しては何という賛辞でしょう。人はこの伝説そのものを作ることが出来ます。その様な語法や翻訳は、墓地に立つ十字架像までです。先ず私を不快にさせるご託宣を持ち続けながら、もっと大きな価値があってその上隠されている他のものを私が見出すのを除けば、私が言うべきことは何もありません。これも又同じ観念ですが、今度はもっと良く私を刺激します。何故なら明白な不公平を前にすると、私は先ず腹が立つからです。もしもそれが無花果の実がなる季節でなかったなら、その無花果の木は正しかったのです。もしも私が正しく理解したのなら、それは刑を宣告されるのと同じ言葉です。私は自由人たちの議会におけるこの若者のことを考えます。そして不意の投票後に思い切って言います。「票は獲得される」。私は腹を立てて名誉を手に入れたのです。それは素晴らしい瞬間でした。役人が「もしもあなたが五分早く来ていたなら、あるいは、もしもその可哀想な人がもう一人子供がいたなら」と言った時、その役人は大変に強いのです

。それは話をする無花果の木です。出来るだけのことをして身を守ります。それ故に、もしも人間が季節になると実を付ける一種の無花果の木であったなら、最早人間はいなくなります。単なる一本の無花果の木がいるだけです。私たちは何本もの無花果の木によって一つの共和国を作ります。そして、季節外れに喉が渇くようになる人々には困ったことです。

私の精神に達した木々の社会というこの作り話は、聖書の中にある短い寓話を私は考えます。それらの木々は王を求めます。西洋スモモの木は尋ねられて答えます。「何故私は木々たちを支配するのでしょうか」。林檎の木やオレンジの木にも尋ねられますが、同じ答えです。最後に茨が次のように言って認めます。「少なくともあなたは守ることを考えなさい」。そこには私が通りすがりに検証したい作り話の見本があります。私は、もっと人を騙す神話から接近する一つの段階として、それを見出します。寓話の美德は、それを人が文字通りに信じないことにありますし、それを信じることも出来ないことにあります。嘗ては木々の王がいたことを誰も信じません。かくして文字通りの意味は何もありません。それ故に人は他のことへ送り返されます。そして、何という豊かなものが発見されることでしょうか。何故なら有益な木々は、王になりたくないことが分かるからです。でも、何故でしょうか。悪意のある小部分の状態でなければ、決して如何なる力のある小部分も受け入れない、と私は直ぐに理解します。私には、その状態は余りに知らないことです。そして改めて私に確信させて納得させるために、私は進んで文字通りのテキストに戻ります。何故なら、そのテキストが私を送り返すからです。繰り返すというこの方法は、十分に注意されませんでした。それは確かに思考するための一つの方法です。そして直接的に表現された観念を単に繰り返すことに存するものから、その方法を良く区別しなければなりません。この理性的な繰り返しは、決して精神を目覚めさせません。その反対に眠らせます。思考の活動は決して理性的なものから理性的なものまでのものではなく、寧ろイメージから観念までのものであるということを知らなければなりません。ここは重要なことです。理性的なイメージは、全く実を結ばない不毛のものと理解することです。イメージは私にぶつかり、刺さなければなりません。そして私は思考するように強く命令されなければなりません。譬えの奇怪さはそれ故に大変に古びた術策です。それから私たちの組織は、その様にして神々が先ず現れなくてはなりません。それは精神が肉体にならなければならないということです。この観念は大変に深く隠されています。それは想像力から理性までの諸関係を明らかにします。しかし私は、既に十分に説明されたとは思っていません。私は読むための忍耐を求めます。更にその上で、人は余りに何時も性急であると諸結果によって経験させられます。

恐らく少なくともこれらの観察から、人は理性的なイメージによる危険に気付きます。そして、それ故に私は次の短い言葉を守って来たことを喜んでいます。「それなのに無花果の実がなる季節ではなかったのです」。しかし、信仰心は何処にあるのでしょうか。それは人が理解出来ないことを変える処にあるのでしょうか。あるいはそれを先ず理解しようと試みて、人間のしるしとしての一つの信頼の上で構築される一種の執拗さと共に、そのことを思考する処にあるのでしょうか。いずれにしても一人ひとり、最後の気力で決心するための判断力しか持っていません。もしも私が隣人を信じるなら、神秘的啓示は決して無いからです。啓示は、その謎から解明までの全てが内部的な移行です。そうでないなら、啓示とは何なののでしょうか。理解しなくても信じなければならないと言う人々は、全て何も言っていないのです。茨が木々の王であり、あ

るいは無花果の木が一年中実をつけるに違いないと私は信じるようになるのでしょうか。いいえ、そんなことはありません。しかし、人間は一年中果実を実らせるに違いありません。何故なら人間は、四季を乗り越える者であるからです。戦争は狂った季節のようなものです。戦争を望まないのは誰でしょうか。戦争は良い季節ではなかったし、正しくもなく、良識を持つことさえもなかったと言う人間の顔をした全ての無花果の木々や全ての茨が、そのことに目覚めて赤面させなければなりません。換言すれば思考することとは、自然の神託を伝える人のように自分と相談することではありません。実にそれは一年中のことではなくて、冬にランプをつけることなのです。（完）

（1）スフィンクスは、ギリシア神話で女の顔と胸をもち、翼を生やしたライオンの体をした怪物で、旅人に謎をかけて解けないと食い殺したという。

（2）フラクリン（一七〇六～九〇）は、米国の科学者・政治家で、避雷針の発明者。

私は長い回り道をしましたが、それは必要なことでした。イエスは本当に神であるのか、これを肯定することと向き合った私は、その様な言葉によっては何も終わらないと思います。そして私が解釈しなければならないと理解されます。ヘーゲルは明白なこととして言いましたが、イエスは本当の神であると同時に本当の人間です。それはヘーゲルが彼の精神の中で、イエスとジュピターを比べているのです。ジュピターが恐らく本当の人間であることも既に価値あることですが、本当の神ではありません。そのことが言いたいのは、力は最高に価値あるものではありませんし、帝国も最高に価値あるものではありません。それなのに神は最も価値が高いものなのです。そして、最も価値が高いものが笞刑や十字架と両立出来るものであって欲しいのです。そこには新時代が未だ発展させなかった啓示があります。人間たちは、大変自然に主人を感嘆して見ましたが、正義によって血を流しているイマージュは、まさに仮のものとして示されていなければなりませんでした。栄光と権力という幻想によって消されていなければなりませんでした。それはギリシア人たちのオリンポスの神々に戻るものです。そして、そこには私が正義を見ることが出来ない権力があるのは大変な真実です。従って全ては政治家たちの雄弁な仕事によって失われていました。そして私たちは日増しに力による環境によって、全てが失われているのを私たちの周りに見ます。全ては再発見され、そして失われます。これが熟考されることがない私たちの歴史です。しかし幸せなことに、イマージュが血を流しながらも残されています。そして私たちの裏切りが〈正義〉の中に再び釘を打ち込みます。それは司祭たちが言わないけれど本当のことです。そして精神の神は何て罵られ、軽蔑され、弱くされていることでしょうか。さらにそれは何て私たちを大変必要としていることでしょうか。そして、私たちも同様にそれを大変に必要としていることでしょうか。その様なものが啓示になります。何故なら鶏が鳴く前に人間というのは、私が理解したこの人物と同じことを言いながら、少なくともそのことをまさに三回否認して、それから賢明になったからです。「私の政治とは私のスープであり、ベッドである」。豚も同じことを鳴いてぶつぶつ不平を言っています。その豚が殺される前、もしも私が言えるとするなら、それはもう一度同じ言葉になります。

私は司祭の言葉を聞きます。司祭は言います、「そうではない。あなたは申し分なく信じることを本当だと思っていない。弱くて十字架に架けられたこの神は、同時に王の中の王であり、自然そのもののリーダーであり、調節者であると信じなければならない」。大変によろしい。私はこの最後の考えの中に、自然に関する古代の宗教を知ります。そして、もっと古くないもう一つの宗教においては、政治があります。これらの古い神々は常に戻って来ますが、新しい神々はこれらの神々を批判しました。新しい神は私たちに極めて明白に次のことを教えてくれます。自然の力や王の力を崇める者は、直ぐに本当の神を忘れます。すると大きいという理由で、大きな石にも価値を与えるようになります。あるいは偉大であるという理由で偉大な王に価値を与えるようになりますが、それは只の間違いです。これらのことをきっぱりと熟考する者は、現在では宗教と理性の間に衝突はないと理解します。しかし、古い宗教と宗教の間には、今でも美しい外見のものによって余りに力を持っていると理解しますし、既に示したように、新しい宗教には間違



った見方や間違った報いがあると理解します。そして私は、諸価値の急進的再検討によって、古代の神々を抑えて低く評価したものが本当に神であると言いながら、曖昧なことを言いません。勿論、雷を鳴らして怒る者の声は聞かないで下さい。雷を鳴らすのはジュピターです。そして、ジュピターは同一ではありません。この政治的神は自然の力も盲目の神も、ヘーゲルが言うように泥と血の神も不当に獲得したからです。そして重要なことは、私たちの神が他の二つの神の力を不当に獲得しないために注意していることです。隠喩によって話す必要はないと人は言います。反対に、隠喩は私たちが常に打ち破り、常に心配しなければならず、そしてついに尊敬を守らなければならないことを思い起こさせるものであると私は言います。（完）

理性は大変に冷静ですが、感情によっても生きなければならないとされています。一人ひとりはこちらで何らかの真実を発見します。しかし一般に感情と理性という二つの言葉は、お互いが無関心な状態で対照的な儘ですし、恰もそれらの一つ一つが自ら独自の領域を持っているかのようでした。そして、いわば思考することの無感覚なこのやり方は、既に全ての真実が啓示されていなければならないということの見本です。それはより良く目覚めていると自ら言うことです。私たちは科学の上で眠って仕舞います。他の人々は宗教の上で眠って仕舞います。私たちはお互いに眠って仕舞います。それ故に、もしも正義が多くの友人たちに無いとしても、余り驚かないで下さい。それ故に人が主張するような目覚めとか啓示とかは、ここでは如何なるものでしょうか。それは一つの観念を正確に理解するものではありません。何故なら、その応用によって正義とかその他の抽象された形に基づく全ての概念を、大変に良く理解することが出来るからです。啓示は寧ろ良く私とそのイマージュの中で、観念を把握すると信じていることに存じます。例えば、アヌシー(1)湖岸に波が返すのを観察している物理学者たちの波のことを、私たちは何時か理解するようになります。つまり汽船の航跡で遠ざかって行った波は、先ず一列に並んで、湖岸の壁に斜めに到着して衝突しました。それからその衝撃の後で、最初の波と直角になって新たに波が斜めに再び出発しました。私は最早、私だけの光線も、投射角も、反射角も認めませんでした。そのイマージュは観念を無視していました。そこからは真の注意力が生まれましたが、それまで私はこの問題は決して検証しませんでした。私は本が説明していたことを理解して満足していました。この時私は、そのイマージュの中に私の観念を認めました。そして、それは精神と感覚の和解のようなものでした。これらの機会は稀有なものです。物理学に関することで、その言葉の沢山の意味の中で私は少なくとも二つか三つのことを理解したとすることが出来ます。

この種の啓示が如何なるものであるのかをもっと良く理解させるために、私は実際にあった話を語りたいと思います。それは何よりも先に私に微笑みかけてくれるものです。私は一九一四年十一月頃にル・バルビュという名前の砲兵隊の陸軍中尉と親しくなりましたが、彼は理工科学校を卒業したばかりで勇敢でした。そして自然の成り行きでしようが、その後殺されました。ある晩、彼は砲兵中隊の望遠鏡を持って来ました。それは誰も使用していなかった物です。そして、私たちは月の山々を見詰めました。それは結局のところ何にもなりません。しかしこの時私は、月の行程、大空と星々の回転、そして太陽についても言いました。あなたもそのことは良く考えるように、彼も容易に理解していたことでした。ところが彼はびっくりしていました。彼が理解していたことではなくて、見ると同時にびっくりしたのです。「そこには宇宙の成り立ちがある！ そこには天空の球体、赤道、黄道がある！ 私は皆の大空がこの様になっていたとは少しも考えなかった」と彼は言いました。彼も又、イマージュの中に観念を見ていましたし、タレス(2)の恍惚を思い出していました。それは私たちが失っていたものでした。私は、偉大な発見とはその様に行われることを確信していましたし、少なくともその様なものなのです。有名なニュートンの林檎は、これらのことの象徴です。しかしこれらの発見が感情の靈感によるものであると言われるなら、人は既に何の興味もありません。そしてベルクソン哲学の信奉者たちの

ように、もしもこの突然の靈感が啓示であり、知性とは異なる源泉であったなら、その時私は頭を振って疑います。何故なら、私にはその様なことはないと思われるからです。

私が観念を齎したのは数々の経験によるものであると思われます。私はその時、私が陥った判断において、その間違いに気付きます。私は完全に理解していて、そうではないと信じていたからです。私はイマージュから出発して、イマージュの中に止まっていながら理解することを覚えました。そして、イマージュは確かに冷静な知覚ではありません。イマージュは情動でもあります。それは肉体の動きです。開始と抑制の動きです。それは不安です。それは恐れと同じです。そして、それは既に勇気ですが、人が深淵を知覚する時に良く見るようなものです。そして私は、この感情的な状態を表現しますが、デカルトの時代には全てにおいて、それは感情の始まりと言いながら、愛情と言われていました。私を先ず驚かせたものを私が理解するに依じて、私はこの理解するという行為において感情を信頼の方向にある、感激や愛という高い水準へ高めます。そして私は、不安や忍耐や恐怖が私の全てを支配していた当初の状態と比較して、かくして解放以外に他のものの名を何も言いません。

この種の閃きにおいて、それに先行する恐怖は十分に注目されていないのは明白です。何故なら私たちは事物に慣れたり、科学に慣れたりするからです。しかし日食を眼の前にしたギリシア兵の恐怖は、まさに恐ろしいものでした。そして同様に、私が物理学者の解放の感情を愛と名付けるまでに行くならば、私は言い過ぎる危険を負っています。しかしながら、それらの微妙な差異を捉えなければなりません。そして、そのギリシア兵が日食とは何であるのかを一瞬に理解することを想像しなければなりません。ここへは大変な注意を向けなければなりません。何故なら、この兵はこの美しい瞬間に、ある宗教からもう一つの宗教へ移るのであって、宗教から無宗教へは移らないと言われるに違いないからです。何故なら、彼が正当に真実の愛と呼ぶものは最初の恐怖であった感情と全く同じであるからです。同様に私は言いますが、興奮から救い出している優れた情操とは、最初の恐怖よりも最終の熟考をより一層良く含んでいる感情の名称であるからです。従ってそれは、感情が本来持っている光によるものであり知性とは関係のないものによって日食を理解したのである、と人は敢えて言いませんし、これからも決して言わないでしょう。寧ろ知性の中の進歩とは、感情の中の興奮を変えたものであると人は言うでしょうし、もっと正確に言うでしょう。そして、靈感についての多くの考察に真実のものがあることには知性への信頼は決して生まれず、最初の興奮による催促の上にしか決して感覚が無いということです。もしも私が知性は知覚の外では決して行使しないと書いたとしたなら、私は同じことを言うでしょう。クロード・ベルナール(3)が言うように、感情はまさしく研究の最初の原動力です。兎に角、感情は研究の中でも決して分離しません。感情だけが動物的な興奮になります。つまりあらゆる動物的な関心から分離させた研究そのものは、人は決して生まないものであり、これからも生まないものになるでしょう。私がそれを何処で知ることか、あなたは私に尋ねます。私は人間を見詰めなければならぬだけです。如何にしてその思想が肉体に縫いつけられたのかを、見詰めなければならぬだけです。

嘗て感情が独りで物事を進めて考えることもないと思ふことを私に許すものは何もありません。何故なら感情という言葉は、思考によって救われた興奮しか含んでいないからです。例えば愛や野心や吝嗇です。ここで私は要約して言いますが、それは良いものでなければなりません

。私は見抜くこと、求めること、調整することの余地を与えます。しかし兎も角、思想が無いにしろ、感じるための高貴で人間的な方法が全く少しも無いことを、指導者の観念として身に付けることが軽率でないのは事実です。他方では、感情が無いにしろ、感情を救わないものでさえある思考も実際にはありません。ベルクソン信奉者たちの間違いは（私は、ニュアンスと方策の人間であるベルクソンとは言いません）、分離された知性を標的と見做したことです。その知性は無駄なお喋りでしかありません。あるいは、もしもお望みなら、それは諸観念の考案に対抗することから、他人によって考案された諸観念の認識までのものでした。そして激しい不安の中や救いのために新たに観念を考案させなかった限り、人は実際に観念を持ってないことを私はここで示そうと思います。最終的な救いとは精神のものであり、精神によるものです。それは最初から知っているものではなく、だんだんと少しずつ発見されて行くものです。そして三つの宗教を単純にさせた歴史が想起させる活動です。しかしこの活動はあらゆる人間の中で、私たちの一つひとつの思考の中で、自ら繰り返します。それは結局、今から読者を騙すことなく要約して言うことになりませんが、もしも偶像崇拝者でないなら、理性的でない訳でもないでしょう。理性が宗教から自ら分離しなければ私は逃げ出さないのですが、逆に理性が消え失せます。思考への関心だけが宗教に関する意味を与えているのですが、それは日食という恵まれた例がそれを理解させるに違いないのと同じです。私たちは間違いから真実まである精神の活動しか持っていません。しかし私は、その間違いを保ちながらも、その時には外見を名乗っているのであり、それに全ての真実を知るのである、とつけ加えて言います。もしも天文学者たちの太陽が、霧の中の三百歩の長さの黄色のボールと同じであったなら、私は何を知るのでしょうか。そして正しい知識とは何でしょうか。（完）

- （1）アヌシーは、フランス東部のサヴォア・アルプス山中にある町で、アヌシー湖に面する保養観光地である。
- （2）タレス（前六二五頃～前五四七頃）は、古代ギリシアの数学者・自然哲学者で、七賢人の一人である。
- （3）クロード・ベルナール（一八一三～七八）は、生理学者で、近代科学の方法を説いた『実験医学序説』（一八六五）は広く思想界にも影響を与えた。近代実験医学の祖。

誰もが知っているのですが、先ずは憎むことがなければ人は愛することもありません。奴隷と反対の最初の情動は、愛されている対象へのより良い認識によって自由に決心を変えなければなりません。最も単純な恋愛は、発見から発見へ至ります。あるいはその時に、憎しみが苦い果実を実らせます。それ故に体刑を受けた躰いた人は、クローデルが言うように、十字架で〈正義〉に躰いた人は力強く話します。そして私たちの考えによれば、政治家たちのあらゆる努力は醜聞を消すことにあります。それはまるで、この神はその様にまさに望んだから磔になっていることを、神学者がよく思考し説明しているかの如くです。それは哀れな私たちの罪によるのであって、神の美德そのものによるのではないのです。しかし、これは弱い観念です。反対にイメージは激しく、無花果の逸話が激しいのと同じです。そして、それを全て抵抗せずに先ず愛する者は愛を知りません。精神の宗教を一つの醜聞として受け取ることは大変に良いことであると理解されます。全ての天空の回転はコペルニクスにとっては一つの醜聞でした。もしもあなたにとっても、そういう事情でないならば、あなたは地球が回転していることを決して理解しないでしょう。

精神は毎晩眠ります。精神は、骨と筋肉と神経で出来ているこの機械を管理することを断念します。それは本当のところは、一種の海水の中で一杯に広がっている動物たちの群です。精神が目覚めますのはそこからです。そして、それは精神が思考を生む非論理的な夢想でもあります。そうです、毎朝そうです。かくして私たちは時々夢想を信じるのが好きでしたけれども、幼年時代は追い払われました。確かに大人になるのは素晴らしいことですが、有名な言葉によるなら、天使になるのは素晴らしいことではありません。それは滑稽そのものです。全く滑稽です。出来るだけ肉体が動いている間に、思考と思考を繋ぎたくないのでしょうか。魂と肉体を分離したくないのでしょうか。ここでは笑うことの意味をご理解下さい。それは一種の純粋な痙攣によるものです。そして全てが快調で、体内の内臓や基本的な力を表の舞台に連れ戻します。笑いとは、生物学的な嵐のようなものです。しかし、それは否定することから今度は全く孤独に歩くことを強く主張する、高慢な精神の出番であること以外には意味の無いものです。笑いは数々のイメージが混沌となったものです。その混沌は創造の前のものです。笑いを覚えることは些細なことではありません。何故なら笑いは、偽善とか肉体の忘却であるこれらのきちんとした取決めを、全て解体させる前兆であるからです。天使のような思想は断片的なものに変えられます。そして決して騙されない言葉の天才によって、この全ての解体の仕事が再び〈精神〉と名付けられます。それは再び行うことが出来る証拠です。もっと適切に言うなら、再び行わなければならない証拠です。そして眠りは、一種の鎮められた笑いですが、それは全ての解放と、理性から完全に独立したものを既にそれ自体で確保しています。私たちは夢想を思考するに至りますが、それは巧みな誤魔化しが無い訳ではありません。何故なら私たちは、他の世界や精神の前兆として夢想を進んで解釈するからです。ここでは私たちの大きな対象が要約して示しています。夢想は神話であるからです。あるいは例えば、もしも私たちが一匹の猫とか数匹の魚が争いを意味するという決まりや、この種のようなことの決まりを設ければ、お望みなら夢想は謎であり、私たちは

夢想の神学者になるからです。それは確かに偶像崇拜者です。それは思考を行うのではなく、イマージュに従うことなのです。

宗教の三段階を通して私が述べた長い間の労働は、最も盲目的な神々と同じ正義の観念から人が引き出すことが出来るのを十分に教えてくれます。しかし、夢想のものとは何でしょうか。夢想のこれらの盲目的神々は、盲目で顔を顰めていて、何時も私たちに余りに支配しています。もう一度言いますが、それは私たちがそれらの神々を真実として決して受け取りたくないからです。そして、計画的に嘘を付く泥棒たちのように、夢想をよく調べる方法に関して人は大騒ぎします。〈夢〉に関する真実の〈鍵〉は、まさにこれらの神学的思想の向こう側にあります。寧ろ別れた判事が行うようにそれらを感じるのではなくて、数々の夢想の精神を僅かでも発見しなければなりません。そして、人は何らかの偉大なものを再び見出すのでしょうか、それはあらゆる仕事に見えて来ますし、それらの仕事を乗り越える唯一のものです。兎に角、夢想の精神と眠りの精神は、数多く引用されたり割り当てられたりして、偉大な人間たちの言葉の中に入っています。「明日の仕事だ」。しかし、この寛大な延期をすっかり理解するためには、夢想が決してあの世のものではなく、この世のものであることを知らなければなりません。貴重な観察によって人は光、音、言葉、接触、寒さ、苦痛、間違った位置、全く小さな瓦解が、夢想を引き起こすこととなります。例えばモリー(1)が自分自身で観察したギロチンについての有名な夢想が証明しています。彼は革命や恐怖政治や裁判の夢を見ました。そして、ギロチンの刃の下で目覚めました。その記憶の中には恐らく、沢山の作り話もありました。しかし、いずれにせよ彼はベッドで首に落下した矢で目覚めたのです。この観念によれば、それは常にこの世の世界にはよくあることであり、ドアを叩いているのです。そして絶えず叩いています。少なくともこの世が受け入れなかったとしても(明日の仕事だ!)、あるいは受け入れたとしても、大変にぼんやりと受け入れます。精神はそのことを嘲笑します。精神はそこでは見世物を見ているかの如くです。精神は信じる真似をしたり、衰える真似をします。それは恰も望んだ睡眠の奥底で、拒絶の力を試していたかの如くです。夢想の奥底は恐ろしくても幸せであり喜びでもある、と私は十分に信じています。その喜劇は、私たちが絶対的に夢想のイマージュのものと解釈する時にしか悲劇に変わりません。そして、それと同じものが神話です。私は、健康により適合した夢想を解釈する他の方法を言いたいと思います。しかし一体、本当の解釈とは何でしょうか。それは夢想と別れないことです。肉体に夢想を受け入れることです。それが何であるかを知ることです。それを調査することです。そして、それは目覚めていることなのです。

私は極めて単純な夢を見ましたが、それは私にとって象徴的でした。私は人が叫んでいる夢を見ました。「火事だ!」。私は目覚めましたが、実際に人が叫んでいるのが分かりました。「火事だ!」。私の夢は、あらゆる夢と同じ様に現実でした。そして、真実はその中にありました。少なくともその中にありました。私は二、三回の拒否をした後に行うように、それを真に受けるしかありませんでした。ところがそれは前日の夢の続きで、前日も同じ夢なのです。私には興味のあることです。何故なら、それは思考するからです。私たちはその夢とは違うような実際の思考を決して持たないからです。何人かの人々が夢として宗教を受け取っていて、夢そのものとは別々のものを意味しながら、抽象的な意味を各徴に結びつけて数々の空想の鍵に応じて解釈しているのだろうか、と私たちはその時に言います。ところが諸宗教は定められた夢想ですから、それら

の夢想は快い儘です。何故なら物語作者や詩人や彫刻家や画家の芸術が、この世の素材の中にそれらの夢想を受け入れたからです。それは目覚めるための機会であり、決して夢想でなくなりませんし、この夢想の中で芸術を理解するための機会でもあります。それは外部の観念によるのではなく、芸術の中にある観念と同じものによります。そして夢想への全幅の信頼が、自我に対する信仰心になりますが、くっついているので目覚めた者は〈神話〉を完全に信仰するのと同じで、本当の信仰心があり、目覚めた者なのです。そして、それが人間の中の信頼になります。（完）

（1）モリー（一七四六～一八一七）は、高位聖職者。

私は何を示したかったのでしょうか。如何にして人間が作られるのか、が少しはあります。私はそれをホメロスの中に見出しますが、その時代だけにあったようなものではなく、何時の時代にもあるのです。従って私は、過ぎ去った時代の証人としてホメロスを単に受け取りません。過ぎ去った時代には決して無いものです。寧ろ、古代の詩は他の社会基盤よりも良く分からせてくれます。ホメロスは存在したのか存在しなかったのか、イエスは存在したのか存在しなかったのか、そんなことは私には興味が無いことです。どうぞ、他の人々がそれを楽しんで下さい。しかし、この研究は時々方向を変えます。もしもイエスが存在して奇跡を行ったことが発見されたなら、私たちの思想が変えられることはないというのは真実ではありません。ピラト(1)は言いました。「真実とは何であろうか」。それを彼が言ったのかどうか私には分かりません。しかし、彼はそう言ったに違いありませんでした。支配者という者ならそう言いましたし、これからもそう言うことでしょう。〈受難劇〉は、ホメロスやアイスキュロス(2)やイエスその人の徴なら何でも構わないもののように、理解するには謎です。

コントがそのことに気付いたように、単にコントが徴を嵌めるに最も切迫しているのは、栄光で飾られた私たちに達する人々です。というのも、その栄光は多数の人々がそこで自分に認めたことを意味しているからです。例えば、私は自分の仕事がそこに招いたように、プラトンを進んで用います。しかし、有名な間違いとしてプラトンを受け入れることには十分に用心します。反対に私は今日でも読むに適うものをプラトンに求めます。もしもプラトンが答えてくれなかったなら、私はその儘にして置きます。勿論、私は先ず大いに注意しなければなりませんでした。これが信仰心と崇拜であり、それは他の人々が大いに注意したのと同様の理性によるものです。人間の古文書であると私は言います。しかし、このことによって同じく私は、プラトンが言っていることを全て信じなければならぬと私に言う人々に対して、私は大変よく武装します。信じることです。そうです、勿論理解することを目指すのです。

剥き出しの知識とは確かに別ものである文化は、人間についてのこの種の調査を意味します。人間の作品に関する長い間の熟考に倣うように導きます。更にもっと適切に言うなら、始めに戻る方法や同一の作品に戻る方法によって導きますが、それは多分未だ全てを委ねないことでした。そして曖昧ですけれども、強く言っています。取分け私たちに命じていますが、私が私たちの肉体や姿勢について言うのは、私たちが全力で思考するためです。ここでは偉大な詩人たちが、如何にして美と真実という二重の証拠によって私たちの啓示者になるのかを詳しく示す必要はありません。ところが誰もが聖書やホメロスの中のように、福音の中にも一篇の詩を認めます。そして、殆ど信じなかったシャトーブリアン(3)は、キリスト教をもう一度見直すことから名作群の中の自分の地位までの偉大な観念を形づくりました。この地位が一番であると認めるのは決して困難でない、と私は思います。そして私は、その理由をこの頁の中で示したかったのです。

人間の悩み事の中で、敵が考えていることやそれを思考する理由を理解すること以上に切迫したものはありません。例えば私たちの家とか前で、或る人がミサや宗教団体へ行く時、私は彼が信じているものを知りたいと思います。そして多くの場合、これらの礼拝行為は教養と呼ばれ



ているもので、両親を強くしていたことを私は見抜きました。そして、正義と悲しみの相反する行いは、それが現実であっても教養ではありません。反対に、もしも信じていることを実際に思考したなら、それは完全な人間であり、人間としても友人になるでしょう。もしも自己を見出したなら、そこに対立はありません。対立の諸原因は他の処にあります。それは殆ど何時も普通の宗教の中にあります。それを私は権力の宗教と名付けましたが、私たちの全ての中で大変活発に生き生きとしています。例えば名誉は混合された一つの感情です。そこでは既に最高の価値という意識がありますが、これらの高い観念を抱くことが無ければ、人間の力による崇拜に素早く再降下します。ここには戦争の魂があります。そうです、これらの観念の発展は際限が無く、この巨大な風景を発見するには、私は大変に縁遠いと認めます。

プラトンに戻りますが、終わりに私はプラトンがそれを行ったものとして、その人物のことを述べたいと思います。一つの袋の中に、私たちは賢人とライオンと豚を一緒に縫いつけて行く、とプラトンは言います。あるいは換言するなら、人間とは頭部、胸部、腹部であると私たちは言います。頭部は理性的結合の場所です。その様な結合には事欠きませんし、何も生まないことを誰もが知っています。それらの結合は何も生みません。何故なら、自己を管理する真実の問題には無縁の儘であるからです。もしも私が自分の理性しか管理しなければならなかったなら、私は一寸した問題も理解させられない如くであり、容易にそんなことが起こるでしょう。しかし私は、第一に腹部を管理しなければなりません。その欲望が何時も蘇ります。それ故にプラトンは、無数の頭を無駄に切られたレルネでの有名なヒュドラ（4）とも比べます。そして、そんなに知られていなくても、私は怒りと勇気のある場所である胸部も管理しなければなりません。人間の中に食欲しか見ない者は、情熱を余り理解していません。特に、戦争を説明しません。しかし、私は自分を抑えなければなりません。三つの宗教は、人間のこれらの三つの部分と関係していることを少なくとも注意して下さい。しかもその様にして、それらの三つの部分は人間全体に重なり合っていて、同時に社会全体にも利益と怒りと英知が重なり合っていることに注意して下さい。そして、歴史が相次ぐ瞬間として述べているものを、〈社会学〉は現代の機構を、避けられない機構の重層的なものとして取り戻しています。今まで私は、そのことを十分に言って来ました。私は、私の友人であるあなた方に、古代人が言っていたように、良いイマージュをお祈りしています。（完）

一九三二年～一九三三年

（1）ピラト（一世紀）は、ユダヤ、サマリヤ、イドマヤを治めたローマ総督で、ユダヤ人の抵抗運動を弾圧し、イエスの処刑を許した。

（2）アイスキュロス（前五二五頃～前四五六）は、古代ギリシアの三大悲劇詩人の一人で、「アガ멤ノン」「縛られたプロメテウス」などを創った。

（3）シャトーブリアン（一七六八～一八四八）は、作家で『キリスト教精髓』（一八〇二）を書き、ロマン派文学の先駆者である。

（4）レルネはギリシアのペロポネソス半島の北東部にある沼沢地帯で、ヘラクレスがヒュドラを退治した伝説の場所である。



この翻訳は、アラン『神話序説』Alain, PRÉLIMINAIRES A LA MYTHOLOGIEの全訳である。テキストとしては、Alain, Les arts et les dieux (Bibliothèque de la Pléiade), Gallimard, 1958 に所収されているものを使用している。

アラン（一八六八～一九五一）は『神話序説』を一九四三年九月十七日にアルマン（Hartmann）社から刊行したが、実際に執筆したのは一九三二年から一九三三年までの間である。労働者のために創設された「解放学校」（l'École libératrice）での講義のためであった。この学校は、労働組合と社会と教育の関係者を各々含む情報活動機関として、一九二九年に創設され、毎週開校されていた学校である。アランは第一次世界大戦に参戦する前からも、モンマルトルやイタリー広場で開催されていた「民衆大学」（Université populaire）において、毎週のように労働者のために講義を行っていた。それらはリセ（高等学校）の教師としての仕事の他に、アランが自発的に行っていたものである。この「民衆大学」で一九〇〇年に知り合ったのが、理科の教師であったマリー・モール＝ランブランである。彼女とは、やがて一九〇三年に再会して、一九四一年に彼女が亡くなるまで、アランの良き伴侶となったのである。例えば、第一次世界大戦に参戦したアランは、戦場で書いたものを毎日のように彼女へ郵送して、彼女はそれらをノートに清書していたのである。『精神と情熱に関する八十一章』や『芸術論集』などの草稿が、この様にして次々に戦場で執筆されたのであるが、復員後に刊行出来たのは彼女のお陰であったと言える。あるいは、アランは作品についての感想や意見を記した献辞を彼女へ送っているが、後年の研究者や読者には貴重な資料になっている。アランは彼女と正式に結婚せずに、所謂パリの二十一区へ結婚届を提出したのである（パリは二十区までしかない）。アランの方が長生きしたので、彼女はパリのペール・ラシェーズ墓地にあるアランの墓に入っていないが、まさにアランの片腕であった。

『神話序説』は、『神々』（一九三四）よりも前にアランが書いた、同書の素描のような作品である。（『神々』は二〇一五年に翻訳してパブーの電子書籍に登録済みである。）神話は事実でないと言われる。しかし、事実とは何であろうか。歴史は事実を積み上げたものであると言われる。事実とは一つだけの事象であるべきであろう。ところが歴史における事象は唯一でなくなり幾つも認められることが多い。従って歴史も神話の一つに違いない。歴史とは現代の神話である。そうして神話にも多くの真実がある、とアランは言っているのである。

「何事にも真実と虚偽があります。何故なら、ある意味で歴史は全く何も証明しないからです。寧ろ私たちは、歴史に人間劇の足場を表している一つの観念に関心があります。歴史は私たちに真剣に思考するように促します。宗教的精神はそれ故に自然に歴史家になりますが、当然のことです。しかし、もしもその様な事柄が起きたことの証拠を少なくとも人が引き出すなら、歴史の濫用があります。何よりも過去のこと、前日の出来事とか、証人になる時に至ったことさえも正確に知ることは決してありません。証拠も又非常に稀薄なものです」（本書Ⅱの十五）

歴史と神話を明確に区切ることは困難であるに違いないであろう。例えば旧約聖書に書かれていたノアの箱舟らしい木造の船が発見されて、実際に存在したらしいという。あるいは出雲大社の天空の神殿もそれらの柱が発見されて、実際に存在したらしいという。あるいは歴史的事実として教科書にも掲載されていた事象が、実際は捏造されたものであったという極端なこともあった。二〇〇〇年に発覚した旧石器捏造事件は記憶に新しい。まさに歴史とは現代が創ったもの

であり、現代に生きる私たち現代人が理解した神話に違いない。アランはそれらの神話について、視覚などの知覚、観念、精神、理性、科学、宗教、芸術などのあらゆる観点から考察して行くのである。そして、考察して、話し、書くことが人間を強くして行くのであり、人間の思考だけが真の勇気を与えるものであることを、アランは教えている。言い換えれば、地位や名誉は決して人間を強くしないし、真の勇気も与えてくれないのである。何故なら所謂〈事実〉ばかりに気を取られて、自分の思考を放擲して他者の思考に追従して行くばかりで、神話を理解しようとしなからである。事実としての歴史に名を刻むことが第一義となった精神に神話は生まれないのである。

神話は何処にでも生まれる。文学や芸術や音楽の世界にも生まれる。例えばJ・S・バッハは小さな教会であるライプツィヒの聖トーマス教会のために、毎年五十曲のカンタータを作曲した。決して大きな教会のために創ったのではなかった。そして亡くなるまで殆ど無名であり、当時は高名であったヘンデルに会おうとしても会えない儘であった。バッハの名曲を広く世界中の人々が知ったのは、彼が亡くなって七九年後の一八二九年に、メンデルスゾーンが「マタイ受難曲」を演奏してからであった。まさにバッハは一つの神話を生きたと言って良いだろう。

勿論、アランの人生も神話そのものであった。何故なら、ソルボンヌ大学教授の道を固辞して生涯を高等学校の一介の哲学教師として定年まで勤め上げ、自らの思考を決して諦念することなく、そして只管その創作に生きたからである。殆ど毎日のように執筆したアランの作品は膨大であり、日本語への翻訳は未だに道半ばである。本国のフランスでも、例えば一九〇六年から一九一四年までの間に執筆された『一ノルマンディー人のプロポ』全三〇八三章（全九巻）が刊行されたのは、アラン没後五〇周年を記念する二〇〇一年になってからであった。既に、アランの死後から六五年が過ぎようとしている。バッハのようにアランの全貌も、今は広く世界中の人々が知る時期に来ているのではないかと私は思っている。そのために我が国においてもアランの作品を初めて日本語に翻訳する仕事が可能になって来ており、私としても嬉しく思っている。併せて私は偉大な哲学者アランの思想に衷心から共感する者の一人である。そう言う意味で『神話序説』の翻訳は、今後の私にとっても一つの神話へ続く仕事となって欲しいと願っている。

最後に、電子書籍のプラットフォームを提供して載っている「ブクログのパブー」に感謝したい。拙訳であるが、少しでも多くの人々が本書をお読みになって、アランの思想を理解して戴き、思考し、一人ひとりの神話を強く生きる勇気を持って戴けるなら、訳者として大変に嬉しく思っている。

二〇一六年三月二一日

東京西郊・たまプラーザの寓居にて 訳者記す

アラン  
『神話序説』

<http://p.booklog.jp/book/105233>

著者：アラン（高村昌憲 訳）

訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/105233>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/105233>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ